

# 機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ The GOETHIA—LOGUE

Rick Mocky

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

異なる幾つもの「シン」が混ざり合う時、誰も観たこともない「鉄の華」が織り成す、新たなストーリーが始まる。

罪を背負い、世界に侵食する者。

何かに導かれ、果てるべき命を拾い、束ねる者。

受け継ぎ、次代に繋げ行く者。

そして、「招かれざる客」として召喚された、「持たざる力」を持つ者たち。

彼等が、「鉄血の世界」と融合したその先には……

## 目次

LOG "Shin" Prologue : ジェイルブレイク・	
トウ・アンビション	1
Intermission / 登場人物紹介 (随時更新)	23
LOG   「侵」	
第1話 : 煉獄帰りの軍神	27
第2話 : 謀略の宇宙 (そら)	64
第3話 : 激突! 鉄華団 VS タービンス・前編 > 衝突! <	101
第4話 : 激突! 鉄華団 VS タービンス・中編 > 劣勢 <	125

# LOG ”Shin” Prologue : ジェイル ブレイク・トウ・アンビション

## Log ”Shin” Prologue

ジェイルブレイク・トウ・アンビション

Chapter 1 : 天上界

伝令 : 「伝令ッ！タルタロス大監獄より…… 大罪人 : 『デイジー・パラケルス』が…… 脱獄されたとの事！今現在、警備隊と交戦中、ですがヤツらに太刀打ち出来ず…… エルヴィン様、どうか救援をオオツ……」

修羅場から生還したと思われる伝令が、一人の剣士 : エルヴィンと名乗る男に報告した。

エルヴィン : 「あの難攻不落の大監獄《タルタロス》からいとも簡単に!?」分かった、ジュリアス様にも伝えてやってくれ。準備整い次第、大監獄へ向かう！

（確か、イーサンが警備隊に入ってたような…… 仕方ない、行こう。）  
何かを思い出したかのように、彼は赤いロングコートを纏い、武器であるロングソードを携え、タルタロス大監獄へと馬を走らせた。

——後に、とんでもない事態に巻き込まれる事になるとも知らずに……

Chapter 2 : タルタロス大監獄にて……

『タルタロス大監獄』

地の底にあると云う、天上界を騒がせた罪人を収監する為、建立された監獄。鉄壁の守りもあり、『難攻不落の大監獄』なる二つ名で恐れられていると云う。

所謂テロリストや国家反逆罪などのいわゆる「危険因子」が多数収監されているのだ。

しかし、難攻不落の大監獄も、遂に崩れ去ろうとしていた。

数時間前にさかのぼる。

「何者か」が侵入、看守を手にかけてらしい。

怪しい一団A：「看守共を仕留めたよ。どうするウ？他の看守共に気付かれちまうよ？」

怪しい一団B：「なあに、心配は無用なのでね。さて我等も急ぐとしよう……」

黒づくめのロングコートを纏った一団は、向かうべき『ある場所』へと向かった。

すると、彼らを遮るかのように、声が聞こえた。

???：「そこまでだ！ここから先は通さないッ！看守を手にかけてまで……貴様等は何処へ向かうとしている？」

怪しい一団A：「知いるウか、そんな事オッ！御大層な大剣背負った『ガキ』に、俺たちの目論見なぞ分かってたまるかよ、エエツ？」

怪しい一団B：「クツクツクツ、貴様はここで果てて貰おうか……急がせて貰うぞ。『アグナス』、あの剣士と遊んでやれ、殺してやつても構わない」

そう言った後、黒づくめの一団は、近衛剣士を制止を振り切り、目的を果たさんが為、タルタロスの『深奥部』へと向かった。

???：「抜かれたか……ヤツらを追え！恐らく狙いは深奥部に囚われている『あの女狐』だ！何としてでも阻止するのだッ！」

近衛兵団：「はっ!!」

近衛剣士が、配下の近衛兵に指示を飛ばした刹那……

警備兵：「ザシュツ……」うぐうわアアツ!!」

警備兵：「ズバンツ！」ごおわアアツ!!」

間髪入れずに、無惨にも斬り刻まれて行く近衛兵たち。

その先にいるのは、黒い甲冑と黒いファアが目立つマントを纏い、両手には、『見覚えのある』ロングソードを携えている。

灰色の長髪に蒼い瞳……『彼』は、『眼前にいる剣士』を知っていたらしい。

???：「何でだよ？嘘だと言ってくれよ？何であなたと剣を交えなきゃいけないんだ……」

そして、何で『アイツらに魂を売って』しまったんだよ…

アグナスさん!!!」

アグナス：「我等が野望…：デイジー『奪還』の為…

『イーサン・ユアン・エルヴィン』貴様にはここで…：『死んで貰うッ!』」

### Chapter 3：解き放たれる悪意

タルタロス大監獄深奥部に到達した黒づくめの一団。

一団の目の前には、幾重にも封印が施された結界に囲まれた牢が見えた。

怪しい一団A：「こんなにもガツガチに封印かけられてんじやないのよオ、「セルバンテさん」よお?こんなガツガチな封印、てか鍵、破壊してやってくんない?」

怪しい一団B（セルバンテ）：「造作もない事よ…：こうしてくれる…（右手に、剣状に集束させた光を振りかぶり）フンツ!」

ズゴオオン!!じゃらじゃらじゃら…

セルバンテが放った一撃で、牢があつと云う間に破壊された。すると…

デイジー：「あゝあ、「良く寝た」、と云うか、ずうくと退屈してたんだよねえ。アタシの事、助けに来てくれたの?」

ブチ抜かれた牢から、紫のマジョーラカラーの長髪に、頭髪の色と相対する程透き通った白い肌に、すみれ色の瞳の女囚人：デイジー・パラケルスが姿を現した。

『天上界に騒乱を起こして破壊。後に彼女の王国を作りあげる』と云う、クーデターを興そうとしていた。

しかし、その目論見は看破され捕縛。国家転覆の罪に問われ、天上界の司法機関は彼女に対し、「人間で云う終身刑」に等しい判決：『タルタロス大監獄深奥部・無間獄入牢1世紀』を言い渡し、服役中の身である、筈だった。

獄中から彼女は「念」を飛ばし、彼女の仲間に対し、

「難攻不落の大監獄を破壊し、大罪を着せてブチ込んだアイツらにギャフンと云わせてあげちゃおうか♪」

と云うメツセージを飛ばし続けた。

その結果、集まったのは僅か10人程度。いわゆる「デイジー一味」の連中共だ。

その仲間うちの中から、潜入に成功したのは、一味の中で、魔術や法術に長ける魔術師：「セルバンテ・ヨグ・バルボッサ」と、名は明かせぬが、筋骨隆々ではあるが、一部オネエ口調を使う男。（在りし日は、とある海賊のNo. 2兼パイロットだったらしい。↑誰かと云えば、読者諸氏もお分かり頂けるだろうか？）

そしてもう一人は、イーサンと交戦中である謎の剣士：「アグナス・ハスター」。

残りのメンバーは、タルタロスの外で「待機している」、との事だ。解き放たれ、自由の身になろうとしている悪意は、大監獄の壁を難なく突破し、外に出ようとしている。

まさに、「難攻不落の壁が崩壊する」瞬間であった。

#### Chapter 4：「悪魔の心臓」

大罪人デイジーが解き放たれた。大監獄始まって以来の由々しき事態にまで発展した。

セルバンテ：「暫くだな、デイジー。退屈な牢生活は満喫出来たかね？」

デイジー：「退屈してたわよ、セルバンテさん。アタシのメツセージ受け取ってくれてありがと、てか「いつものメンバー」ばかりじゃん、もお」

セルバンテ：「そうカッカしても「事」は進まんぞ。外で他の連中が、あんたの帰還を待っているぞ」

デイジー：「そ、そうね。「やるべき事」が、アタシらにはまだあるから、ね？あ、そうだ!!アタシを解き放ってくれたお礼に、何か良いものあげる!」

セルバンテ：「ほおう、「良いもの」とは何かね??」

デイジー：「ちよつと待つて。「結構な物量を引っ張り出して来た」から、ちよつと離れてくれない?」

そう言った後、デイジーはセルバンテらに離れるよう指示を出し、指示のまま、彼らは離れた。

デイジー：「そんじゃ行くよ…… はぁアッ!!」

彼女の手から放たれたモノ、それは地上絵にも似たような魔方陣が監獄の廊下に顕現し、無間牢一帯を吹き飛ばした。

そこから出てきたモノは、まるで大きいタイヤを並列に繋げたような物体であった。

それを見たセルバンテは、驚嘆しながらデイジーに問う。

セルバンテ：「これは一体……」

デイジー：「アタシの「力」で、「別の次元から取り寄せたの」。まるで「意思を持った機械の心臓」のような代物なの」

セルバンテ：「確かに「脈動」は感じるが、これは何なのだ?」

(※セルバンテが言った「脈動」とは、「固有周波数」の事です。まだ現段階で「エイハブウェーブ」と「エイハブ粒子」を理解していません。後々理解する、と云う事で m (――) m)

デイジー：「そうね…… この代物の名は……」

『エイハブリアクター』

別名：「悪魔の心臓」と呼ばれる代物なの」

セルバンテ：「エイハブ、リアクター? この代物の名称がか? 誰から如何にして聞き出したんだ?」

デイジー：「アタシの分身」を天上界に派遣させて、ある人に吐き出させて、教えてくれたの。

その人の名は…… 「エイハブ・バーラエナ」

「悪魔の心臓の創造手」よ!」



セルバンテ：「その為に『あの術』を使ったのか？ハッハッハッハッ、まったくお前は…… 前評判通り、使える『女狐』な訳だ」

セルバンテが言及する「あの術」。即ち「分身精製」。本人とおなじスペックの分身を精製する事が出来る。彼女はこの術を使って、天上界にいるエイハブ・バーラエナを捕まえて、リアクターについて問いただした。

さらにデイジীর術は続く。

デイジীরリアクターだけじゃ「つまんない」から…… 「こうゆうの」は、どうかな?」

すると、エイハブ・リアクターの後ろから、黒いトンガリ帽子を被ったような、如何にも悪魔のような黒い巨人が召喚された。

それと同時に、10基以上同じようなエイハブリアクターと、異形なる巨人たちが群れを成して現れた。

その中で、リアクターが巨人たちの「体内」に、それぞれ取り込まれていった。

セルバンテ：「ほおぅ。『召喚したりリアクターと巨人を融合錬成させる』とは…… 流石デイジীর、使える女狐な事で……」

デイジীর「もおくさつきから『使える女狐』、『使える女狐』って、アタシの事、小バカにしてるつもり?」

セルバンテ：「小バカにはしておらんよ、『褒め言葉』として受け取る方が無難だぞ……」

デイジীর「さ・て・と、『手駒』の準備は出来たし、頭打ちのおバカさん達を潰しておかないとね…… それっ!!」

デイジীর指を鳴らしたと同時に、召喚された巨人たちが光に包まれ、そして蜘蛛の子を散らすように、それぞれ散っていった。

時同じく、タルタロス大監獄へと向かうエルヴィン。  
彼も、散って行く光を目撃していた。

エルヴィン：「なんだ、あの光は?…… イーサンが危ない、急がねば!」

Chapter 5：「アンドラス」

（デイジー：「アグナスさん、あなたに良いものあげるから、邪魔な剣士……排除してくれない？」）

イーサンと交戦中のアグナスに、テレパシーで指示が送られて来た。

イーサン：「アグナスさん、何であの女狐の側についてしまったんだ？ アンタなら、「ダニエル兄さん」の背中を預ける位の中で、ボクの憧れだったのに、何で裏切るような事を？」

互いの剣を重ねながら、イーサンは、「傀儡の身」となったかつての仲間に向かって問いかける。しかし……

アグナス：「……貴様に返す言葉など無い。あるとするなら……（ガキイーン！）我が主の宿願の為、貴様の命、我等に差し出す事だな！」

アグナスの冷徹なまでに意思の無い冷たい刃を弾き返し、イーサンが反撃に転じようとしたその時！

『ズゴォオン!!』

アグナスの周囲に紫色の光が降り注ぎ、光の柱が精製された。

柱の中からうつすらと巨人の影が……

イーサンは巨人の影を見つめながら退き、警戒しつつ身構えていたその時だった。

『ズガアーン!』

光の柱の中から、巨大な大剣が降り下ろされ、監獄2フロア分消し飛ぶ斬撃が発生、フロアを消し飛ばした。

アグナス：「この力、最高だ！ 我が意のままに動かせるとはな……気に入ったぞ、憎きジュリアスを、天上界を潰す力を……そしてデイジー「様」の宿願成就の為、その力、存分に振るうがいい……」

”アンドラス” ツツ!!」

（イメージBGM：「無双OROCHI2 Ultimate」より「最終決戦／THE FIRST END」）

漆黒の羽を生やし、大剣を携えた殺戮の悪魔・「アンドラス」なる「巨人」が、翡翠色に似た眼を輝かせてそびえ立っていた。

アグナスはどうやら、「『アンドラス』」の内部・「コクピット」に座っていた、と云うより融合していた。

（コクピット仕様は、ビルドファイターズシリーズのようなコクピットインテリアに、鉄オルのMSのメインパネルを増設したようなもの。阿頼耶識／MMIのピラスは無いが、操縦槌を握った時点で機体と「一体になる」新世代阿頼耶識仕様。アンドラスはこの仕様のコクピットになっている。まだこの段階で、エイハブリアクターの概念浸透してません。）

アグナス：「成る程、あの女狐め、いい得物をオレにくれるとはな……」

イーサン：「何だ、あの巨人は……だが、アグナスはあの巨人と「融合している」、とても云うのか？」

イーサンが巨人と対峙している最中に、援軍が来た。

脱獄の急報を聞き、近くに駐留していた遊軍の一団だ。

遊軍隊長：「イーサン様、ジュリアス様の命を受け、馳せ参じましたぞ！」

イーサン：「ありがたい。だが、あの巨人：「『アンドラス』」には十分注意してくれ」

遊軍副長1：「了解し……うわあ、何だあの巨人は!」

遊軍副長2：「さっきイーサン様が云ってた「『アンドラス』」だったの！何退いてんだよ、強がりのくせして」

イーサン：とにかく、目の前のアイツを倒し、デイジーを捕らえる。君たちは巨人の足を崩し、中に取り込まれたアグナスを引きずり出さんだ」

イーサンの口調が何処かしら苦し紛れのような感じだった。それもそのはず、実の兄であるダニエルと共に肩を並べる位の剣の腕が立ち、且つ「面識」がある友人でもあり彼の目標とする人物だ。しかし今は違う。イーサンらの前に立ち塞がり、且つデイジーの脱獄に「関与している」と云う事実がそこにあり、彼の胸中には、「何故僕たちを

裏切ったのか？恩を仇で返すような事を何故？」と云う複雑極まりない想いが交錯しているに違いない。

無論、遊軍の隊長格なら尚更理解していよう。

遊軍隊長：「複雑な心中、我々も分かります。アグナス様と兄上であるダニエル様との仲は…。」

イーサン：「そんな事は分かってる！」

遊軍隊長：「し、しかし今は…。」

イーサン：「やらなきゃ」ならないんだ…：… デイジーに「魅入られる」ようなアグナスさんじゃないのは分かってる…：… でも…：… 彼女らに加担している時点で、悪は悪。悔しいのは分かるけど…：…」  
泣きたい感情に落ちるイーサン。

”アンドラス”の外部スピーカーから、「裏切り者」の声が聞こえて来る。

イーサン：『どうした貴様等、この”アンドラス”の姿を見て怖じ氣付いたのか？やはり「ジュリアス子飼いの剣士団」も、たかだかその程度の強さしか持っていないとしか云えんだろうな？』

遊軍兵卒A：「何を云うか！」

遊軍兵卒B：「大罪人の片棒担ぎ風情が！」

遊軍兵卒C：「ジュリアス様の大恩に半旗を翻すとは…：… 裏切り者め!!」

アグナス：『やかましいイイツ!!』

と同時に、”アンドラス”が大剣を降り下ろした。

ブウオオオツ!!

凄まじい巨大な剣圧が、イーサン達に襲いかかる。

遊軍兵卒：「うおおおおわっ!？」

吹き飛ばされ、壁に叩き付けられ、地に伏せる一部の兵卒達。  
微動だに動かないイーサンと遊軍達。

アグナス：『ほおう、この剣圧に怯まず、立ち向かえる余裕があるとは…：…』

(デイジー：『アグナスさん、何遊んでるの?』)

何処からともなく聞こえて来る女の声。

ざわめくイーサン達。

彼らの目の前にすみれ色の光の球が出現、”アンドラス”は身体を直し浮遊、大剣を右手に保ちつつ下に構え、左手で光の球を携えた。その光の球の中から、デイジーとセルバンテ、更に謎の黒服の男の3人が姿を現した。

イーサン：「あ…れ…が…あ…女狐…か？」

絶句する一同。天女が舞い降りるかの如く、神々しいまでの闇のオーラを放ちながら、彼女は巨人の手のひらの中にいた。彼女のボディーガードのように、両サイドをセルバンテと黒服の男が、並び立っていた。

デイジー：「あらあら、皆さんお揃いで…私の晴れ舞台、観に来てくれたのかしら？」

イーサン：「そんな戯れ言に付き合っているヒマなんてない!! デイジー・パラケルス!! 天界を破壊と混沌の渦に陥れようとする罪、断じて許さないッ! ジュリアス・アウグストの名の下に、お前を、ひいては彼女に加担するお前達を、ここで処断するッ! 全軍、突撃用意、構えッツ!!」

ー

イーサンの号令により、武器を構える。

そんな彼らの抵抗する様子を眺めながら、女狐は笑みを浮かべながら、アグナスに頼み事を囁く。

そう、「悪魔のささやき」のように…

デイジー：「アグナスさん、ここにいるの飽きたからさあ…どーんと「花火」打ち上げてく…れ…な…い？」

アグナス：『いいだろう。”アンドラス”《コイツ》の本気、如何なモノか試してみたくてな』

”アンドラス”のコンソールを操作し始めるアグナス。

尚も更に浮遊する”アンドラス”。そして、浮遊が止まり、空中で静止した。

―胸部装甲上下展開

―リアクター・多機能武装システム間への回路連結完了

―エイハブ粒子供給開始…… 正常

―リアクター出力正常

イーサン：「何が始まろうとしてるんだ？」

ドウオーン!!

強力な重力波で、監獄一帯が押し潰されそうな状態に。

デイジー：「アグナスさん、まだなの!？」

アグナス：『急かすな!あと少しだ……これで「忌々しき鎖」から、解き放たれよう!さあ」アンドラス」よ!オレに示すがいい!!そして挙げるのだ…… 反逆の…… 狼煙をツツ!』

―エイハブ粒子臨界点まで膨張

―暴発抑止装置解除

―自動照準作動

―阿頼耶識システムによる姿勢制御…… 誤差無し)

ターゲット…… ロックオン!!!

”アンドラス”胸部・ガバツと開かれた「口」の内部に、紫色の光の粒子が収束されていく。同時に周辺の空気も吸収されていく。

遊軍隊長：「イーサン様、巨人の胴体に光が収束されております!」

遊軍副長：「あの巨人、「我々に向かって何かしよう」と思われますが?」

イーサン：「警戒を厳にせよ!（あの光は一体??）」

その光は、「恵みの光」ではなく、全てを奪い、刈り取る「破壊の光」だった……

アグナス：『受けるがいい…… デーモン・ブラスト!!』

グイーン……ズドオオオン!!

粒子と空気が、胴体中央に圧縮され……

凄まじい勢いでビーム砲が放たれた。

高圧縮エイハブ粒子光線砲・「デーモン・ブラスト」だ。

デーモン・ブラスト、タルタロス大監獄に命中、そして……

ドガアアアン!!!

火山が爆発するかの如き勢いで大爆発し、大監獄をチリと化した。  
時同じく……

ドガアアアン!!!

エルヴィン：「この爆発の方向は……（!!）マズイ、急がねば!!」  
焦燥感に駆られたエルヴィンは、馬を急がせた……

エルヴィン：「生きててくれ、イーサン。それまで……持ちこたえてくれよツツ!!」

Chapter 6：タルタロス消滅

エルヴィン到着。

時既に遅し。

エルヴィン：「おいツツ！大丈夫か？」

警備兵A：「エ、エルヴィン様……申し訳……ございませんツツ！

（既に虫の息状態）

エルヴィン：「何があつたと云うのか？」

警備兵B：「デイジー・パラケルスが脱獄された模様、しかし……彼女の一味が……妙な巨人を召喚、事態は最悪の状況へと向かつて……ガハツ（血を吐く）」

エルヴィン：「しつかりしろ！無理に喋るんじゃない！後で回復薬やるから……それより弟……イーサンはどうした？」

警備兵C：「そ、それが……」

警備兵が恐る恐る指差したその先には……

『!!』

黒い巨人の剣圧で吹き飛ばしたガレキを喰らい、瀕死の重症を負った、イーサンの姿があつた。

下馬し、イーサンのもとへと向かう。

エルヴィン：「イーサン！しつかりしろ!!イーサン！」

イーサン：「に……兄さん……ダニエル……兄さん……なの？」

イーサンは瀕死の重症、喋るのもやつとの状態。

エルヴィン：「そうだ、俺だ!!しつかりするんだ!!」

イーサン：「もう……無理かも……しれないし……（立ち上がり、剣を取りにこうとする。）ウツ!!」

エルヴィン：「無茶なするな、いいから休め!!」

イーサン：「いいんだ……ここは……ボクが……まも……るん……だツツ」

立ち上がったては倒れ、立ち上がったては倒れ、繰り返しながら剣を取りに行く。イーサンの足下には、赤く滴り落ちる「ナニか」が、足跡のように続いていた。

エルヴィンは、その「ナニか」の正体は理解していた。

そして、実弟に対し「無茶するな、いいから休め!」と声をかけた理由も……

エルヴィンは、弟のもとまで駆け寄り、抱えた。

エルヴィン：「イーサン! もういいから一旦退け! 後は俺がやるから……」

イーサン：「もう……いいんだよ!」

エルヴィン：「何だよ!」

イーサン：「兄さんに……辛い思いさせたくないから……」

涙を流す二人。そして……

エルヴィン：「ここで、お前を喪いたくないんだ! まだ気にしているのかよ?」

イーサン：「気には……して……ないよ。でも大丈夫。ボクは……いつでも兄さんと一緒だから……また……いつか……『どこかで会える』時が……来るから……兄さん……また……あの時の……つ……づ……き……をツ……」

エルヴィンの腕の中で、イーサンは息絶えた。

エルヴィン：「嘘だろ……嘘だろ? イーサン……イーサン……もっと早く気づいていれば……ウオオオオツツ!」

事切れた弟を抱えつつ、ただ慟哭するしかなかった。

そこに……

デイジー：「あはは、まだ足りないんじゃない? アンコール求めるな



ら、もう少し観客連れて来た方がいいんじゃない?」

エルヴィン：「泣きながら」貴様か!!大監獄を吹き飛ばし、そしてツツ…実の弟を手には掛けたのはツツ!」

デイジー：「じゃあ、さっきまで抗ったの、アナタの弟さんなの?」  
エルヴィン：「貴様がデイジーか?ジュリアス様の命により、貴様を再び捉える!!」

デイジー：「それはムダだよ〜ん♪」

”アンドラス”の掌の上にいるデイジーが、左手を上げると、後ろにブラックホールみたいな次元の穴が空いた。

デイジー：「アンタ達なんかに、二度と捕まるもんですか!」

捕まえたきや、ここまで追って来なさいよオ〜だ、じゃあね!」

穴の中に、異形の巨人が2体、エルヴィンを上から睨み付けるように見ている。

デイジー：「アグナスさん、何ボーツとしてるの、行くよ!!」

エルヴィン：「アグナス」だ!?お前、裏切ったのか?おい、何とか言えよ!!」

アグナス：「……」

”アンドラス”が、穴の中に吸い込まれるように消え、同時に穴も消滅した。

エルヴィン：「アグナス…お前……」

更地と化した監獄の中心で、ただ茫然としているエルヴィンであった……。

## Chapter 7：反撃開始

天界のとある高名な術者の屋敷に赴いたエルヴィン。過日のデイジー脱獄の件について話していた。

エルヴィン：「やはり、「予見したとおり」の惨事になってしまったのか、エヴァンス」

エヴァンス：「そうだね…予見した、と云うより、それ以上の大惨事になってしまったようだ…「イヤな予感が的中してしまったようだ…」とジュリアス様が言ってたよ」

陰陽師風な装束にネイビーの長髪に翡翠色の目をした少年術者、エ

ヴァンス・イルバーンが、頭を抱えながらエルヴィンに言った。

エヴァンス：「しかもデイジー一味、「禁断の術」を使って逃亡したらしいよ」

エルヴィン：「禁断の術」とは一体？」

一呼吸置いて、エヴァンスはこう答えた。

エヴァンス：「次元移動」だよ」

エルヴィン：「次元、移動？」

エヴァンス：「そう！別の世界、別の次元に移動する術、まあ「タイムワープ」と言えば分かるでしょ？」

エルヴィン：「お、おう…」

エヴァンス：「更に、別の次元からそれぞれ異なる物体や巨人を呼び出し、融合させる術も使ったようだね。多分デイジーの脱獄は、何かの「予兆」かもしれないね」

エルヴィン：「予兆？とは云え、やつらは何処まで逃げたんだ？」

エヴァンス：「いま調べているけど、うん…あつ！やつと見付けた！どうやら…」

エルヴィン：「どこなんだ？」

エヴァンス：「どうやら…「太陽系」だよ。しかも「別の次元」のね」

エルヴィン：「太陽系」？…奴らの逃亡先は、分かった。

しかし、あいつらに太刀打ちするにはどうすれば？」

悩むエルヴィン。しかし、エヴァンスの頭の中で、「答え」は既に出ていた。

エヴァンス：「君に良いものをあげるよ、ハッ!!」

(イメージBGM：ターンAターン／西城秀樹↑フルコーラス、慎んで哀悼の意を表します、RIPですm(――)m)

すると、赤色の魔方陣が現れ、赤い炎の柱が湧き出た。

そして柱の中から、赤い鳥のような鉄の鳥が姿を現した。

エルヴィン：「これは一体？」

エヴァンス：「奴らの術を真似て、君にぴったりの「機体」、あいつ

らから奪ってきたから、君にあげる」

そう云うと、エヴァンスの右手から光の球を打ち出した。

光の球はエルヴィンを包み、赤い鳥に載せはじめた。

既に「コクピット」に座っていたエルヴィン。エヴァンスに話し掛ける。

エルヴィン：『何やら見慣れぬ機械が目の前にあるんだが……コイツをどう動かせばいい?』

エヴァンス：『真ん中の画面に手を振れてみてよ。「起動」するから」  
エヴァンスの指示通りに、コクピット正面の「メインコンソール」画面にタッチすると……

???：『システム起動。メインユーザー認識を確認。メインユーザー：ダニエル・グレン・エルヴィン。ユーザー認識完了』

エルヴィン：『エヴァンス、何か画面から声が聞こえたが、何者だコイツは??』

エヴァンス：『ごめん、召喚と錬成ついでに、君の為に、執事的な役割を為すAIを搭載したんだ。名前は「エルピス」、「希望」を意味するギリシャ語から付けてみたんだ』

エルヴィン：『「エルピス」か……。よろしく頼むぞ!』

エルピス：『こちらこそ、ご主人様』

エルヴィン：『何が何だか分からないが……この機体を起動させてくれ!』

エルピス：『かしこまりました。』

―機体起動シークエンス移行。―

―『イオン熱核融合ドライブ』並びに『ASW―G―37：『ガンダム・フェニックス』リアクタードライブ』起動。―

―『ミノフスキー』『エイハブ』両粒子、双方のリアクター内、正常数値を維持。―

―『デュアルリアクタードライブ』起動完了、機体を起動します。―

ご主人様、ちなみにこの機体は、エヴァンス様が「異世界」から「取り寄せた」機体：『ウイングガンダムゼロ炎』に、「ASW―G―37ガンダム・フェニックスのエイハブリアクター」を融合させた「MS

《モビルスーツ》です」

エルヴィン：「モビル、スーツ？ますます分からなくなってきたが……『エヴァンス、どうすれば良いのかさっぱり分からん！』」

エヴァンス：「大丈夫!!」「既に操作方法を知ってる」ように「術」を掛けたから!」

と、エヴァンスが言った。その返事を受けてエルヴィンは、一度目をつぶり黙想。そして目を開けながらつぶやいた。

エルヴィン：「やはり……俺はコイツの動かし方を知っている」状態になってる。エルピス、「あの女狐共」が逃げた先は、把握してるか？」

エルピス：「はい、既に把握しております。逃亡先の座標値、既に固定済みです」

エルヴィン：「導けるか？」

エルピス：「可能です。ですが、「次元を越える」為、かなりの高出力を要します。相当のリスクを背負う事になりますが……」

エヴァンス：「心配はないよ!」

エルピス：「エヴァンス様、何か策でも？」

エヴァンス：「この「機体」の力を使ってみるとか……そんなじゃ、召喚ツツ!」

右腕を上突き上げたと同時に、白銀の光の柱が現れ、エヴァンスが指を鳴らしたと同時に、中から12枚の羽を持ったMSが姿を現した。同時にエヴァンスを取り込み、融合した。

エルヴィン：「お前も、MSを取り寄せたのか？」

エヴァンス：「そうだよ!万が一の為に、デイジーの真似して、異世界からMSを取り寄せたんだ。ちなみにぼくが乗ってるMSは、「ビルドストライクバーニングコスモス（長い為、以下BSBC）」と云うヤツなんだ」

エヴァンスが取り寄せたが浮遊した。

エヴァンス：「ダニエル、ゼロ炎起動出来た?」

エルヴィン：「どうやら、完了してるようだ。飛ぶぞ、エルピス!」  
エルピス：「了解、ウイングガンダムゼロ炎、離陸します」

鳥の姿もとい、バードモードのWゼロ炎が離陸、B S B Cのいる位置まで到達した。

エヴァンス：『着いたようだね、それじゃ行くよ。クロノ・アクロス、作動！』

B S B Cが両腕を前に構えると、背部の12枚の羽から光が放たれ、エルヴィンを載せた炎の鳥に注ぎ込まれる。

エヴァンス：『エルヴィン、大丈夫だよ？多分ツライ戦いになるかもしれないけど、ぼくは信じてるから、キミが無事に帰ってくる事を。道中：：： 気をつけてね！』

エルヴィン：『ああ：：：： 行ってくる!!』

B S B C が両腕を真横に広げたと同時にWゼロ炎が射出、黄金の光が、音速の壁を超えるように消えた。

エヴァンス：『ふう、無事に成功したようだね：：：： さて、「取り寄せた駒」を、太陽系に射出させようか。』

：：：：：

：：：：：

あ：：：：：

肝心な事、エルヴィンに伝えるの忘れたorz」

Chapter—FINAL：Tear—rain of the Orphan

(たいへん長らくお待たせ致しました、鉄血世界と「遭遇」します。イメージBGM：RAISE YOUR FLAG/MAN WITH A MISSION(フルコーラス))

舞台は変わり、P. D. (Post Disaster)323年のとある夜。

火星の夜空に、流星雨が降ってきた。

時同じく、地球、月、デブリ帯、それぞれのコロニー圏の夜空を、流

星の雨が、暗い空を彩った。

厄祭戦終結から約320年、「平和」な世界の夜空を彩った一夜限りの天体ショー。

後に「孤児の涙雨：Tearrain of the Orphan」と名付けられる事となる事は、この時点では誰も知らない。

この天体ショーは、「ただの天体ショー」ではないのだ。

それゆえに、ただの「流星雨」ではない。

実は、この「流星雨」には、「P.D.」の世界軸に存在してはならないモノ」が紛れ込んでいたのだ。中身も誰も知らない、いや知らなくともいい。

（むしろ、「原作」のスピードを速めかねる事態にまで発展しそう。モビルアーマーがさあ、モビルアーマーがさあ↑やかましいわ。）。；  
＼（――；）

時同じく……

マルバ：「ヤケにキレイな流星雨じゃねえか…」（と、ウイスキーの水割りを飲み、空を見上げる）

ギヤラルホルン火星支部・第3基地

克蘭ク：「アイン、見えるか？この流星雨を……」

アイン：「はい、克蘭クさん。美しくて、言葉が出ません」

克蘭ク：「まるで「孤児達が流した涙」そのものだ。しかし、私は「歪みきった正義」のもとで、ギヤラルホルンが本来目指すべき「正義」の実像、描き直せるかどうか不安でならん。しかし隊長が、俺の教え子のオーリス、とはな……」

アイン：「克蘭クさん、なにゆえコーラル支部長に話をしなかったんですか？克蘭クさんなら、支部長と上手く話せば、隊長交代の件なら調整が利くかと……」

克蘭ク：「数週間後に監察局が、定期監査で、地球から直々に派遣される」との事だ。こんな辺境の星に、だ」

アイン：「なぜ今回、本部からわざわざ監察局が？」

克蘭ク：「私には分かるんだ、なぜ監察局がこのタイミングで来るのか、そして…」（その裏に隠された、とある民間組織と結託して得た

不正とその報酬、火星支部に隠された「濡れ衣」をな……「ソレ」を消そうと躍起になって、コーラルめ、俺みたいな「マトモなヤツ」を蜥蜴の尻尾切りに宛がうとはな……」

アイン：「克蘭クさん？どうしました？」

克蘭ク：「いや、何でもない」

とあるオフィスで……

ノブリス：「ええ、分かりました……恐らく、「ご令嬢」が何かしら動き出すでしょうねえ？……二十歳にも満たぬ歳で、「ノアキス」の7月会議《あの会議》を成功させたものですからねえ、「大手柄」でしたから……将来性を見据えた上で「投資」させて頂きましたから、当時の協賛者として、たいへん喜ばしい限りです……いえいえ、とんでもございません。「先生」もお互いに頑張りましょうね。クリュセの治安正常化の為に、何か手伝える事があれば、このノブリス・ゴルドン、力になればと……仰る通りです、おまかせ下さい！……失礼致します。（ガチャツ）首尾はどうかね？」

ノブリス配下の殺し屋：「ゴルドン先生の「予想通り」、『クーデリア・藍那・バーンスタイン』が動き出す』らしいですぜ」

ノブリス：「そうか……バーンスタインの家に「送ったスパイ」に伝えろ、『引き続きクーデリア・藍那・バーンスタインの動向を随時監視せよ。』とな。」

『革命の乙女』……世の中を知らぬ純粹無垢な少女は存分に「利用できる《使える》！」その為に投資した「までの事よ」。ふふふふ……」

バーンスタイン邸・クーデリアの自室にて

クーデリア：「綺麗な夜空……」

フミタン：「お嬢様、まだ起きていらしたのですか？」

クーデリア：「フミタン？どうしましたか？」

フミタン：「もうおやすみになられたか、と思ひまして……」

クーデリア：「フミタン、私……決めました！」

フミタン：「お嬢様？何を「決断」されたのですか？」

クーデリア：「明日の昼頃…… CGS（クリュセ・ガード・セキュリティ）に向かいます！」

CGS（クリュセ・ガード・セキュリティ）

???：「キレイな流星雨だなあ…… そう言えば、三番組の子たちも夜勤だったよなあ…… あ、「俺の部屋」入ってねえか心配になってきたから、「動力室」戻るか。

（あれ？さつきまで「頭がガンガンするくらい」痛かったのに、流星雨見てた時、痛くなかったのに…… また「疼き」そうだわ……）

木星圏・歳星

ジャスレイ：「親父、今日の定例会お疲れ様でした。流石は親父、テイワズをまとめあげる才覚はあるだけの事よ」

マクマード：「ワシを高く評価してんのかい、ジャスレイ。（愛刀を抜刀し、眺めながら）てんでばらばらだった連中を拾って面倒見て、ここまでの上がつて来たからなあ……」

ジャスレイ：「何言ってるんですかい、親父。うちら幹部は、親父に忠誠誓い、盃交わした仲だぜ。親父の俠《おとこ》の器のデカさにガン垂れて、シャバの連中から『圏外圏イチコワイ男』の二つ名が轟き渡るくらいだからさあ……」

マクマード：「そうやっておだてても、何も出て来ねえよ」

ジャスレイ：「親父？」

マクマード：「そろそろ若いのに、チョイと試してえ事があつてなア……」

ジャスレイ：「あの白いスーツのやさニーチャンですかい？」

マクマード：「察しがいいじゃねえか、ジャスレイ。タービンスに、ちよつとな……」

場所と立場が違えど、美しい天体ショーを眺めていた。

それが…… 新たなる変革をもたらす、「駒」となる存在である事を、まだ誰も知らない……

Prologue: Rogue ”Shin”



C 完  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
  
t  
o  
  
N  
e  
x  
t  
  
l  
o  
g  
.  
.  
.  
.  
.  
.

## I n t e r m i s s i o n 1／登場人物紹介（随時更新）

### 【異世界】

ダニエルⅡグレン・エルヴィン

異名：「深紅の不死鳥」

デイジーを捕まえる為、鉄血世界にやって来た剣士。元々いた世界では「剣の達人にして騎士団長だった」との事。

エヴァンスから託されたウイングガンダムゼロ炎を駆り、鉄華団と行動を共にする。

イメージモデル：「仮面ライダー鎧武／G A I M」の駆紋戒斗／仮面ライダーバロン／小林豊氏（B o y z 2 M e n）

エルピス

ウイングガンダムゼロ炎に搭載されたコンシエルジュAI。

機体の状態や戦況把握等を引き受ける。

イメージボイス：増谷康紀氏（関羽／魏延／真・三國無双シリーズナレーター）

イーサンⅡエルヴィン

ダニエルの実の弟。デイジー一味の襲撃に会い、兄の腕の中で息絶える。

アグナス・ハスター

デイジー一味に加担しているとされる剣士。ダニエルとは「面識がある」との事だが、イーサンを手につけ、更に大監獄を壊滅。何故加担しているか不明。

デイジー・パラケルス

「女狐」の異名で恐れられている女囚。鍊金術・妖術を使う。

「ある目的」の為に鉄血世界に逃走。

イメージモデル：「無双OROCHI」シリーズの姐己（声もそのまま）

（名前由来：「デイジー：Daisy」は、姐己の中国語読みである「Da Ji」をもじってみた。「パラケルス」は、錬金術師的要素を取り入れてみた。）

セルバンテール・ヨグ・バルボッサ

デイジー一味の参謀格。魔術を使う。

時折、鼻にかけるような言い草をするとかしないとか……

デイジーを高く評価しているのか、していないのか本心は不明。

イメージモデル：「パイレーツオブカリビアン」のバルボッサ船長

イメージボイス：藤原啓二氏（「戦国BASARA」シリーズの松永久秀風）

エヴァンス・イルバーン

ダニエルたちの仲間で、法術師。錬成術など高度な術が得意。後述のジュリアスの部下。

イメージモデル：シン・アスカにリュウタロスを足して2で割った感じ

ジュリアス・アウグスト

エルヴィン・エヴァンスの主。

イメージモデル：『ONE PIECE』の“冥王”シルバーズ・レイリー

## 【火星】

CGS／鉄華団

エドワーズ・アーケイ

異名：「煉獄帰りの軍神」

もとCGS社長・マルバ・アーケイの息子。

三番組教官ではあるが、もと二番組副隊長。

子供の時MWに轢かれる事故に遇うも生還。その際、頭に外部情報チップを埋設される。（その後遺症で、良く頭痛に苛まれるのが悩み。）

MW・MS 共にそつなく操作出来るが、「謎の送り主」から届け

られたG―3ガンダムを駆る。

教練で三日月を追い詰めたり、GHの武官級と対等に渡り合える程の錬度を持つ。(反面、ビームサーベルを使いたがる為、良くダンジに怒られているとかいないとか...)」

イメージモデル:「BREACH」の黒崎一護と「戦国BASARA」シリーズの前田慶次を足して2で割ったような感じ。

ダンジ・エイレイ

原典第1期では、GHオーリス隊によるCGS夜襲の際、MWごと蹴飛ばされて死亡。

しかし、何者かの手によりメディカルベッドに入れられ、九死に一生を得る。お真面目な性格補正と、MSのメンテナンスもこなせる技術を「修得」して復活。エドワーズの弟子でもあり、突っ込み役。「銀魂」のメガネポジション)

エドワーズ:「近々、俺のG―3乗せてあげようかな♪そんでもってえ」「ビームサーベル抜かせる」癖をn:.....(??▽?)」

ダンジ:「きょーかん? (ーー;) まーた何か変なコト考えてませんか? (ーー;)」

ギャラルホルン (GH)

アルダ

GHアーレス隊所属の武官。階級は三佐。

ステイブ・ヤン

異名:「木星の青龍」

GH木星支部所属の武官。階級は一尉。タービンス専属の教官。広島弁全開の武闘派。愛用機はシュヴァルベ・グレイズ(だが、とある戦闘で大破寸前の所までボコボコにされる。只今整備中orz)。外部情報チップ埋設手術被験者で、ティワズ内のある組織から取り上げた(本人曰く「アゴ割って懲らしめた後、頂いた」)ウイングガンダムを駆る。

イメージモデル:「新機動戦記ガンダムW」の張五飛

タービンス

ステイシー・タービン

サラ・タービン

双子。ステイブが手塩に育てた弟子にして、斬り込み役。

アスカ・タービン

サラ・タービン

ステイブの弟子。主にアジのフォローに回る事が多い。

## LOG―「侵」

### 第1話：煉獄帰りの軍神

Log―「侵」

#### 第1話

Chapter 1：火星の夜の夢

P・D. 315年の夏のある日の事、一人の「少年」が事故に巻き込まれ、瀕死の重症を負った。

学校は、夏期休暇中。家路へ向かう帰路、モビルワーカー（以降MW）に轢かれ、頭を強く地面に打ちつけられ意識を失った、と目撃者が言う。

その後、「少年」は、クリュセ市内にある『ノアキス記念総合病院』に搬送された。

そこに、一人の中年男性が、病院に駆け込んだ。

少年の父親にして、民間警備会社CGS・クリュセ・ガード・セキュリティの社長・マルバ・アーケイだ。

マルバ：「先生、息子は…… エドワーズの容体は？」

医師：「アーケイさん、落ち着いて下さい。息子さんのエドワーズさんですが…… 頭部に目立った外傷は無かったのですが…… 意識がまだ戻らぬ状況です。」

マルバ：「そんな…… 先生！何とかして下さい!!」

医師：「最善は尽くしますので、待合室で御待ちください」

医師はマルバを上手く宥め、吸い込まれるように救急治療室へと入っていった。マルバは、お願いします、と云いながら深々と頭を下げた。

俺の大事な一人息子だ、ここで喪う訳には、と思いつつ、待合室の椅子に座り、天を仰いだ。

「少年」：エドワーズ・アーケイの『意識』の中では……

エドワーズ：何か目の前が真っ暗だけと……

天の声：『君は、MWに轢かれてしまい、意識不明の重体の怪我を負ってしまったんだ』

エドワーズ：「怪我!?俺は、死ぬのかよ?」

天の声：『そんなことはない!ぼくが君を「死なせたりしない」から、安心して。さあ、目を閉じてもいいかな?』

と、「天の声」の主の指示通り、エドワーズは目をつぶり始めた。

エドワーズ：「何かが通り抜けてくような気が...それに、何だ?頭に「何かが入ってるような異物感」が...」目を開けて良いかな?」

天の声：『いいよ』

エドワーズは、目を開けた。

エドワーズ：「はっ!!」(..... また「同じ夢」か? 何か頭が痛

む...やはり「チップ」の副作用か?)」

(イメージBGM：オリジナルサントラより「An Orphan's Sorrow」)

エドワーズは「夢」を見ていた。それを「夢」と認識した方が良いのか悪いのか、現実味を帯びた、過去の出来事を昇華させたような「夢」を.....

CGSの仮眠室、エドワーズは夜勤中である。その間、一緒に当直勤務をしている一軍のトド・ミルコネンは、施設内の巡回に出ている。

トドが巡回から戻ってきた。

トド：「エド、巡回したが、何もなかったぞ」

エドワーズ：「お疲れ様です、ミルコネンさん」

トド：「次は、「坊っちゃん」の番ですぜ」

エドワーズ：「ありがとうございます」

トド：「しっかし、いいんですかい?かつての『二番組』の生き残りである坊っちゃん、今や俺ら一軍の末席、そんな地位じゃ、納得いかんでしょう?」

エドワーズ：「そんな事は無いと思いますけど?」

トド：「いやいやいやいや、坊っちゃんには「次期社長の椅子」が約束されてるんですぜ?まさか.....「まだ気にしてる」んですかい?

ササイとハエダの事??」

エドワーズ：「気にはしてませんよ。ただ、あの二人、親父を上手く利用して、俺の意見を通さず、あいつらの言い分を素直に受け入れるしかない状態に。事あるごとに、俺か三番組の子やヒューマンデブリに「鬱憤晴らし」だ、マツチポンプ的な感じで八つ当たりだとか何とかやって、俺はそんな体質を望んでないのに……」

トド：「確かに……」「ガキ共見捨てたくない」と云う思いが積もりに積もって、「三番組教官」と云う要職に就いた、訳ですよ?」

エドワーズ：「ああ。」「一軍がもし倒れた時の為の最後の切り札」、阿頼耶識を施したあの子たちなら、CGSを守りきれるだろう、と思つてます」

トド：「さすが坊っちゃん。足元にも及びませんやい」

話が終わると、エドワーズは巡回に、トドは仮眠休憩をとった。

エドワーズはまだ気付いていなかった。アイツ（トド）が、影でそこそと工作している事に……

その工作に気付かず、朝を迎えた。

Chapter 2：お届け物

（イメージBGM：オリジナルサントラより「Barren Land」）

夜勤・当直明けの朝、エドワーズは自分の部屋で寝ていた。彼の部屋は、動力室、もとい「ASW—G—08 ガンダム・バルバトス」が係留されている「格納庫」の脇に彼の部屋、もとい生活拠点がある。（社長で実の父であるマルバから使つて良い、との御許しを頂いている。）

エドワーズは、タブレット端末を立ち上げ、メールを確認した。

『エドワーズ・アーケイ様に、お届け物がある』との文言が、書いてあるメールがあった。

誰だよ、こんな辺境の地に? そんでもってこの俺に、荷物を贈る物好きは何処のどいつだよ、とさえ思った。

エドワーズ：「さて、ちよつくら取りに行くか」

エドワーズは、夜勤明けの体に鞭を打ちながら、地上に出た。



天気は晴れ。テラフォーミングされた火星特有の穏やかな風が吹いている。

C G S 基地の管制塔の真下に、「贈り物」が届いていた。  
20 m くらいの縦長のトレーラーが止まっているではないか。

荷台の上には、丁寧にカバーが敷いてある。砂漠迷彩柄のカバーらしい。

エドワーズ：「メールで云ってた「お届け物」って、この事なのか？しかし、ハエダやササイにばれたらなあ……」おつ、ちょうど良いところに…… おういダンジ君にビスケット、ちよつといいかい？」

エドワーズが三番組の少年兵を呼んだ。三番組の参謀格のビスケット・グリフォンと、年少組のダンジ・エイレイだ。

エドワーズ：「悪いけどこのトレーラー、MWで引っ張ってくれないかなあ？」

ビスケット：「このトレーラーを、MWで…… 大丈夫ですか？当直明けなのに、良いんですか？」

エドワーズ：「まあ確かにそうだが…… ビスケット、君…… トレーラー運転出来たっけ？」

ビスケットが「トレーラー」を眺めながら言った。

ビスケット：「動かせる事は動かせますけど…… 教官、どこに入れた方が良いですか？」

エドワーズ：「秘密の格納庫」に入れてほしいんだわ。「上役サマ」に嗅ぎ付けられたらマジ面倒だからさあ…… とにかく、ビスケットはトレーラーの運転頼むわ」

ビスケット：「はい！」

エドワーズ：「それで、ダンジ君は、俺をMWに乗つけて貰って、エスコート頼むね、ナビは俺がやるから。」

ダンジ：「うっす！」

さらっと三番組の二人に指示を出し、ダンジが駆るMW先導のもと、ビスケットが大型トレーラーを運転し、「秘密の格納庫」に移動、滞りなく搬入作業が終わった。

エドワーズ：「バスケットにダンジ君、ありがとね（\*？▽？）ノ」  
バスケットとダンジを見送った後、擬装ハッチを閉め、トレーラー  
の「積み荷」を開けてみた。

勢い良くカバーを外した。

ばさッ！

エドワーズ：「何だ…？ これは？？」

暫く絶句した。

トレーラーの「積み荷」、それは…：

見るからに18mくらいあるねずみ色の巨人が、トレーラーの上に  
横たわっていた。外見は確かにねずみ色だが、左腕と思われる位置に  
灰色の十字架をあしらったシールドがマウントされており、背中あた  
りに、突き出た2本の棒状の構造物が着いている。エドワーズは、左  
腕のシールドに書いてあるロゴを観た。

エドワーズ：『G-3』… 『GUN-DA-M』？何だこ  
の機体？」

頭の中に、大量の疑問符が浮かびまくっているエドワーズは、ト  
レーラーのはしごに手を伸ばし、登り始めた。あれよあれよと、巨人  
の左足によじ登り、足元に注意を払いながら、胸元まで歩を進めた。

エドワーズ：「この機体…？ 「2本角」なのかよ!? 動力室の「ア  
レ」とは何か似てるような、似てないような…？ 何だコイツは？」  
ねずみ色の頭と2本角のようなツインアンテナに、黄色のツインア  
イ、さらにグレーのクチバシのような構造物を眺めながら、エドワ  
ーズは首をかしげた。すると…：

グイイン…：

エドワーズの背中側、巨人の胸部付近から音がした。何かが開いた  
音だ。おそろおそろ近づくエドワーズ。

そこには、誰も座っていない操縦席があった。MWの操縦席と酷似  
している部分はあるが、「阿頼耶識」と接続する端子がない事に気付い  
た。

取りあえず座ってみようか、と云う感覚に陥り、巨人の操縦席に  
座ってみた。

エドワーズ：「何か座り心地は良いな、こいつは。いつものように使っているMWや、稀に鹵獲する「ギャラルホルン製」の「モビルスーツ（以降MS）」とは、コクピットのインテリアが何か違うような…。」やべ、何か眠くなってきた…。」

エドワーズは座りながら眠りについた、コクピットで寝落ちである。

寝落ちしているのを他所に、操縦席が動き、「ハッチ」が閉まった。

―スタートアップシークエンス開始

―操縦者認識：エドワーズ・アーケイ… 認識完了

―教育型CPU、埋設マイクロチップとの相互リンク開始… 相互リンク正常に完了

―熱核反応炉正常作動… 異常無し

―各スラスタ―駆動系統… 異常無し

―推進剤残量：FULL

―各種武装：使用可能

―RX―78―3

―『G―3 GUNDAM』システム起動。

同時に、胸のダクトから排気音と、ツインアイに光が灯る「ギュオーン」と云う音がした。

エドワーズは…

死んだように…

爆睡中!!（ちゃんと呼吸してますし、睡眠時無呼吸症候群ではないので、アシカラズm（　　）m）

### Chapter 3：灰色の巨人、赤い大地に立つ!!そして邂逅

エドワーズがスヤスヤと眠りに着いた頃、地上では、ギャラルホルンのMS「グレイズ」3機、同MW隊数機がCGSを襲撃。三番組が迎え撃つも、MW数機大破・年少組数名死亡・更には、一軍の御一行が、マルバと一緒に撤退する「作戦」で、上手く逃げ出す「じり貧」な事態が発生。三番組劣勢か、と思いきや、動力室に繋がれていたガンダム・バルバトスを起動、オルガが駆るMWを襲撃する、オーリス・ステンジャが駆る指揮官機仕様のグレイズを、メイス殴打・パイルバンカー一刺しで撃墜。その反動を受けオーリスは死亡。撤退を開始したGHサイドのMW 隊を蹂躪、クランク・アイン両名が駆るグレイズ2機を追い込むも、起動したばかりのバルバトスが不調な状態である事に気付き、やむなく撤退、追い討ちを試みるも、バルバトスは「ガス欠」状態を起こし、且つ「パイロット気絶」の為機能停止、三番組「だけ」でCGSは守りきれた。

地上の騒乱が静まって数時間後、エドワーズが起きた。

エドワーズ：「ふわああ…… 結局寝ちまったよ…… って、勝手に起動してるし!?何か頭ん中、ざわついてるし、ナニナニ…… (コンソールを見ながら) コイツ、「G-3ガンダム(以降G-3)」って言うのかあ…… グレイズと同じ「MS」かあ……」

コントロールグリップに手を伸ばすと……

グオオッ……

(イメージBGM：機動戦士ガンダムより「ガンダム大地に立つ」)

エドワーズ：『コイツ、動くぞ!?』

スムーズに立ち上がり、歩行を開始。隠しハッチを開け、火星の大地に……

「存在してはならない」ガンダムが立った!

ピピッ!

外に出て直ぐに、センサーが反応した。

エドワーズ：「むむっ?『11時方向にMS反応あり』?11時方向?? CGSの基地がある方向じゃねーかよ!?何があったかどうかは知らんが…… 取りあえず向かうか。ついでにセンサーに出た「MS」

も気になるし……行くか」

アクセルを踏んで、バーニアに火が灯り、エドワーズが駆るG―3ガンダムは、CGS基地へと向かった。

一方その頃、CGS基地では、先のギャラルホルン（以降GH）の夜襲の事後処理を始めていた。MWの残骸を回収し、年少兵達が悔し涙を流しながら、拭いていた。

三番組年少兵A：「イリウム……ダンジ……何で先に、逝ってしまったんだよオオツ！」

散っていった仲間達に思いを馳せながら、部品を拭いていた。

そんな哀しみを吹き飛ばすかのように、基地へと向かう灰色の巨人の人影と、ゴオオオツと、大気が震えるようなスラスタ―音が近づいて来た。ある年少兵が、手を止めてその人影を見つめていた。

三番組年少兵B：「何でまたGHがって……何か違う！ 隊長、オルガ隊長……！」

（イメージBGM：オリジナルサントラ1より「Sandy Desert」）

オルガ：「どうした？ またGHか？」

三番組年少兵B：「違います！ 何か全身灰色で、角を2本生やしたMSが、こっちに向かって来てますが……」

年少兵が、オルガに報告しているうちに、灰色のMSがCGS基地に到着。

エドワーズ：「基地に到着、やベツ、年少組たち踏み潰しちまいそうだ！」

慌ててブレーキペダルを踏み、地上施設内、三番組が作業している手前の所で静止、スラスタ―を逆噴射させエアブレーキをかけた。

「うわっ！」と驚く少年兵達。

ゆっくり着地させ停止。灰色の巨人の胸のハッチが開放され、その中から、三番組の誰もが知ってる、あの人が出てきた。

エドワーズ：「全く、何があったかと思えば……どうなってんだよ、コレ？」

三番組年少兵たち：「エドワーズ教官だーッ！」

三番組年少兵C：「教官！、無事だったんですね！」

驚き、更に歓喜する年少兵たち。ヨッ！と軽く挨拶した後、巨人に備え付けのウィンチ式昇降機に足をかけ着地。彼らの元に駆け寄る。施設の奥から、白髪で、褐色肌の成年が出てきた。

オルガ：「エドワーズ教官！生きてたんですか？」

エドワーズ：「死んで悪いか、オルガ隊長。夜勤明け休みなんだぞ、つて、聴いちゃくれないかorz それにしても、すごい有り様だな…… 何があつたんだ？」

オルガ：「実は…… 6時間前に、GHの奴らが夜襲仕掛けて来まして、俺たち三番組だけで応戦してみました……」

エドワーズ：「わあかつてるつて、みなまで云うな。君らだけで凌げたのは見事な事だよ。それで親父、じゃなくて、社長は？」

オルガ：「社長は、一軍らと一緒にトンズラかしました」

エドワーズ：「はああッ？トンズラだとオッ？（やはり、ハエタとサイの口車に乗って、一緒に逃げやがったな？あの2人、親父おだてたり、転がすの上手エからなあ…… これがあるから、CGSの汚点がこの子達まで……）それで、被害状況は？あと、俺がこっち向かう時に見かけたけど…… 動力室のアレ、動かしたようだね。それで…… 乗ってるの、誰？」

オルガ：「被害状況に関しては、バスケットから聞き出して下さい。そんで…… 動力室に繋がってたMSに乗ってるのは…… ミカです」

エドワーズ：「三日月君が!?取りあえず、三日月君回収するから、オルガ隊長はそのまま事後処理続けてね！」

オルガ：「分かりました、教官」

エドワーズは、足早に巨人の方へ戻り、乗り込んだ。

オルガ：「それと…… 教官!!」

エドワーズ：『どうしたの、オルガ隊長?』

オルガ：「年少組たちが云ってた「灰色のMS」、教官のMS ですか?一軍の人達に見つかるやバくないですかあ?」

エドワーズ：『大丈夫だって！バレないように上手く立ち回るからさ』

オルガ：「頼みます！」

そう云うと、巨人は猛スピードで立ち去り、三日月らを回収しに行った。

オルガ：「………… ミカが乗ってた「アレ」と云い、教官が乗ってるソレもそうだが………… ビスケット、あの2つ………… 「MS」なのか？」  
ビスケット：「そ、そうだね………… 姿形は違うけど………… MSで、いいんじゃない？」

三日月、もといガンダム・バルバトスと、グレイズ3機がやり合った場所に到着。

（イメージBGM：オリジナルサントラより「Vulnerable Surface」）

エドワーズ：「うっわっ………… 見るからにエグいわ、コレ………… （スクラップになった指揮官仕様のグレイズにフォーカスする） 見るも無惨な状態に………… それに………… （G-3ガンダム、左に方向転換。） 動力室にあったアレに、三日月君が乗ってるのか？（コンソールに「ASW-G-08 GUNDA BARBATOS」と表示が） 声かけてみるか？『三日月君、起きてるかい？』（コンソールに「スラストー残量・無し パイロット生体反応・無し」との情報が…………） 良く動かせたなあ、この機体。さては、ナディさんが上手く………… てなワケないか？「ガキの頃、MS軽くいじった位だ」とか言ってたなあ………… さて、回収回収♪」

と、メイスを持ったまま「気絶」しているバルバトスを、よっこらせ、と肩に担いで、隠しハッチまで向かった。

エドワーズ：「三日月君………… 親父からちよろつと聞いたけど、阿頼耶識のオペに三回耐えた唯一のサバイバーだし、三番組のエースだしなあ………… ん？頭の中がざわついて………… ナニナニ？「阿頼耶識：MMIにおけるMSの情報量は、MWの約50倍」くらいするのかあ………… 起動時のキックバックがデカい為、場合によっては意識喪失もあり得るか………… ヒューマン・デブリ組のリーダーの昭弘君と一緒に良く筋トレ

レしまくってる姿、良く見掛けたし……鼻血吹き出すだけで堪えるだけで済ませる、なんて……やっぱ三日月君は凄いのよ。  
否……

『すげエよ、ミカは……』

G―3で、バルバトスの回収を済ませた後、グレイズの残骸をしっかりと回収。そこで、バトルアックスをちやっかりブンドド、自らの武器として押収しちゃいましたとき♪

Chapter 4：選手交代のお知らせです。三日月君に替わります……

事後処理が済んだ後、バルバトスは動力室、もといドック入り。ナデイ・雪之丞・カツサパの指示のもと、整備作業を開始。一方エドワーズは、G―3のメンテナンスを始めていた。推進剤の残量は、まだ余裕がある。熱核反応炉スゲーイモノスゲーイ、最ツツ高だね！と、どこぞでえんさい物理学者並みに狂喜していた。

が!!

「腑に落ちない案件」があった。

・頼んでもないのに、G―3を届けた送り主は誰か？

・そして、件の事後処理を済ませて引き上げた後、見たこともないメデイカルナノマシンベッドが置いてある。さつきまでなかったのに、誰がこのベッドを送ったのか？

この2点である。

1点目のG―3ガンダムはともかく、2点目のメデイカルベッドが気になってしょうがないエドワーズ。

中を覗いてみると……

エドワーズ：「ダンジ君!!何でこの中に?」

メデイカルナノマシンベッドのガラス越しに、三番組のダンジが横たわっているではないか。

ダンジ：「エドワーズ……教官……ですよね?」

(イメーじBGM：オリジナルサントラ1より「Oasis」)



エドワーズ：「そうだ… 良く帰ってきたな…」

ダンジ：「オレ… 気付いたら、この中に入っていたんで… 「ついさっきまで」 MW乗ってて、GHのMSの攻撃にあって… その後から、意識が飛んで… 覚えて、ないです」

エドワーズ：「阿頼耶識の副作用だな、それは。でも、君が生きてて何よりだ。神様に感謝しないとな」

ダンジ：「そう言えば… CGSは、どうなりましたか？」

エドワーズ：「三番組で何とか防げたが… 一軍と親父は逃げ出した。」

ダンジ：「無事で、良かったんですね」

エドワーズ：「体調はどうだい？」

ダンジ：「何か知らないんですけど、体全体の傷みとか無くなって、元気になるような感じがします。」

エドワーズ：「お、おう、そう、なのか？（このメディカルベッド、瀕死のヤツでも回復出来るのか？）」

驚きを隠せないエドワーズ。そうこうしてる内に、ダンジは回復。ベッドの蓋が開いた。

さつきトレーラーを運び入れた時の姿のままではないか。

ダンジ：「教官！見てくださいよ！身体がピンピンして、元気になりましたよ！」

エドワーズ：「ソウカー、ゲンキニナツタノカー、ケツコーミチガエツテミエルゾー（？▽？）」

一軍並みの肉付き具合にまで回復し、復活したダンジ。

「神の御業」とも云うべき力。ただただエドワーズは驚く事しか出来なかった。

エドワーズ：「まあ良いとして… ダンジ君、G-3ガンダムの整備、手伝ってくれるかい？」

ダンジ：「ウッス… じゃなかった… ハイ、出来ますよ」

エドワーズ：「ソウ… ほんじゃ、一緒にやろうか？」

ダンジ：「ハイッ！」

確かダンジは年少組、MWの整備とか教えた事ないぞ、とぼやきながら、G―3の整備を始めた。

エドワーズ：「誰がダンジ君をメディカルベッドに？一体誰が???そんで、ダンジ君、こんなにマジメだったか？」

ダンジ：「きよくかん!!手が止まってますよ」

エドワーズ：「ああ、ゴメン！考え事してた...」

時同じく地上では、三番組が一軍やマルバに対しクーデターを興した。結果、散々エドワーズを目の敵にしたハエダ・グネルとササイ・ヤングスの両名は、パンパンで粛清。三番組でCGSを回す事、となった。（事務方のデクスター・キュラスターと整備班のナディ・雪之丞・カッサパは残留となった。勿論トドも...一軍に退職金等の流れは、原点通りです。マルバはまだ雲隠れ中m（――）m）

三番組によるCGS乗っ取りクーデター成功から翌日...

館内放送：『監視班から報告！GHのMSが1機、えー...赤い布を持ってこつちに向かってる!』

（イメージBGM：オリジナルサントラ1より「Aspiratio  
n」）

地上・施設にいるオルガ達は外へ。一方エドワーズ達は...

ダンジ：「教官、またGH来たみたいですけど、大丈夫ですか？」

エドワーズ：「ウーッシ、メンテ完了！ダンジ君、一緒に行くか？」

ダンジ：「は、はい...」

G―3のメンテは無事終了。足早に乗り込むエドワーズとダンジ。

ダンジ：「複座式、ですか？」

エドワーズ：「まあな。振り落とされるなよダンジ君。しっかり捕まってるんだぞ」

ダンジ：「ハイッ!」

エドワーズ：「さて、さつき拾ったバトルアックス持って...「エドワーズ、行きまーす!」ってね♪」

と、フルスロットルで出撃するG―3。

地上では.....

タカキ：「それで...何なんすか、あれ？」

雪之丞：「（赤い布？）ありやあ、「決闘の合図」だな・・・」

厄祭戦開戦前の時代：いわゆる「B．D．：Before Disaster」暦

の頃は、大抵の揉め事がある際、決闘で優劣を決めていたらしい。  
P．D．歴になって以降、MSを保有しているGHでも決闘は盛んに行われている。人対人も然り、況してやMS同士も然り・・・

克蘭ク：『私は、GH実動部隊所属、克蘭ク・ゼント！そちらの代表との1対1の勝負を望む！』

シノ：「勝負って、マジかよ・・・」

克蘭ク：『私が勝利したなら、そちらに鹵獲されたグレイズと、そしてクーデリア・藍那・バーンスタインの身柄を引き渡して貰う！』  
ビスケット：「お嬢さんを？」

トド：「ほら見る！やっぱりだ！あっちはお嬢さんが目当てなんだ！」

克蘭ク：『勝負が着き、グレイズとクーデリアの引き渡しが無事済めば、そこから先は全て私が預かる。GHとCGSの因縁は、この場で断ち切ると約束しよう！』

雪之丞：「はあ？なんだその条件は？（一方的じゃねえかよ。）」

ユージン：「俺らが負けてもお嬢さん渡すだけ」で、「全部あのオッサンが良いようにしてくれる」ってか？」

ビスケット：「でも！そうしたらクーデリアさんが・・・」

クーデリア：「行きます!!」

一同驚く。

クーデリア：『勝負などする事はありません！私が行けば「全てが済む」のでしょうか？無意味な戦いは、避けるべきです！』

トド：『おお、そうそうそう！ついによ、交渉もしてお力ネの方もガツリと・・・（そして、得たお力ネは「ダンナ」に渡しておこうかなと、ぐへへへへ・・・）』

オルガ：『どうなるか、わかんねーんだぞ？』

ビスケット：「そ、そうですよ。あいつらはあなたを殺そうとし

て：」

クーデリア：「既に、多くの人は死にました・・・」

ビスケット：「クーデリアさん！」

フミタン：「お嬢様？」

ビスケットの発言を遮り、クーデリアは堂々と言い切る。

クーデリア：「それに、私は「ただ死ぬ」つもりはありません。何とか話を聞いて貰えるよう頑張ってみます」

オルガ：「フ・・・（言ってくれんじゃねえかよ、この嬢ちゃん）」

ビスケット：「無理だよ、そんなの。何せあのGHですよ？」「法と秩序の番人」だし・・・」

トド：「まあまあ本人もそう言ってたからよ！お嬢さんはねー、あの口が達者だしねーあの・・・」

オルガ：「そのつもりはねえ！」

トド：「ああゝ!?（やっちゃうの、マジでえゝ?）」

オルガ：「あのオッサンの話がどこまで本当か分からねえしな。簡単には乗れねえよ・・・ ミカアッ！」

三日月：「ん？」

オルガ：「やってくれるか？」

三日月が「いいよー」と返そうとした瞬間・・・

エドワーズ：『オルガ隊長、三日月君を休ませた方が良い！MS「も」だ！まだ身体が慣れてない上に、コンディション劣悪な状態で決闘挑んだら・・・ 負けるぞ』

オルガ：「エドワーズ教官!？」

駆け付けたG-3を見て驚く一同。

オルガ：「教官、ミカを行かせてあげて下さい、これは俺たちが落とし前をつけるべき事で・・・」

エドワーズ：『教官命令だ！ここでエース失って、後々困るのオマエらだぞ？ここは、教官の俺に任せておけ。ナデイさん！バルバトスはドック入りさせたら、超・入・念にメンテしておいて欲しいな。それと三日月君には、休息するよう釘刺しておいて貰えないかな、「エドワーズ教官が心配してる」と云う言葉を添えて、頼むよ』

雪之丞：「エドワーズの…… マルバの息子の頼みじやなあ……  
ナシ付けとくわ」

エドワーズ：「G H 火星支部配属のイチ将校が相手か……」

ダンジ：「教官、何か楽しそうですね？」

エドワーズ：「相手にとって不足無し！『そこなグレイズのパイロットに告ぐッ！この決闘、慎んでお受け致すッッ!!』」

クランク：『…… 感謝!』

一方その頃、(原作の流れだったら決闘に出て、クランクを、ありがとうパンパンする筈が、)『教官命令』と云う楔を打ち付けて、ガンダム・バルバトス共々「静養」する事となった三日月・オーガス。

雪之丞：「… と、云うワケだ。エドワーズが、三日月の代わりに、決闘を受ける事になった。」「とにかく休め!」ってな。」

三日月：「教官がそう云ってたなら…… しょうがないね。何でバルバトスの事も気にしたんだろう?」

雪之丞：「分かんねえよ、俺には。ただ、あの場で「身体が慣れてない」・「劣悪なコンディションで決闘に挑んだら負ける」と云う臨機応変で、的を得たようなアドバイス。流石マルバの息子だよ。ほれ、エドワーズから詫びの栄養食だ(三日月に投げ渡す、右手でキャッチする)「火星ヤシだけじゃ持たないだろ。」と言ってたぞ」

三日月：「ありがと、おやつさん。教官、俺の事、気にしてたんだ…… (栄養食を食べる。)ハエタたちと違って、教官は、いつも俺たちの事を信じている所があるし、指示も正確だし、守ってくれる所もある。いつも俺たちの、かなり先を進んでるような気がするんだ。「あの時」もそうだった……」

…… G H 夜襲から遡る事半月前、C G S：ブリーフィングルーム……

ハエダ：「社長の息子」で、且つ「二番組の生き残り」の分際が、でしやばんじやねえよ!!」

エドワーズ：「三番組に、なんて酷な事を?本来なら、一軍である俺たちが前線で、三番組が後方支援に回るのが、普通だと思うが……」  
ササイ：「お前が、俺たちが立てた策に、「口答え出来る権限がある」

とも思ってたのか、ええ？」

ハエダ：「GH 顔負けの、統率が行き渡ってた、あの二番組の生き残り、と云う事で、あえて俺ら一軍に加え「させてやった」んだぞ。ま、俺らにとっちゃ、「目の上のタンコブ」みたいな感じだったけどな♪」

エドワーズ：「まだ言ってるのかよ？ 確かにあの時は、CGS 始まって以来の「大惨事」だったし、親父も釈明するのに必死だった。それを知らないお前らが言える事かよ？」

ササイ：「てつめ…」（エドワーズの胸ぐらを掴む）ふざけんじゃ、ねえよツツ！（エドワーズの顔面めがけて殴打。テーブルがひっくり返り、壁まで吹き飛ぶエドワーズ。）

二番組の副隊長だったオメーに指図されたかねーんだよ、ヴオケエ！（エドワーズ、ササイを上から目線で睨み付ける）オオイ、何だよその目は？ 何か文句あんのか？」

一軍メンバーA：「ササイさん、その辺にしといてやって下さいよ！ エドワーズの坊っちゃんの名「異名」、知っててやってますよね？ 逆に俺たち怖くなって来たんすけど…」

青ざめてドン引きする一部の一軍メンバー。それもその筈、彼らは知っている。ササイがぶん殴ったエドワーズは、「タダ者ではない」と云う事を…

一軍メンバーB：「割って入って、ササイを宥める」ササイさん！もし社長がいたら、俺たちのクビに関わる事に…」

ササイ：「わあーったよ!! 俺らの仲間の顔色みて、ヤバい事に成りそうだし、もしも社長が入って来たら… もういい！ 今日はこの辺で… 勘弁してやるよツツ！」

ハエタ：「フンツ！ ヒューマン・デブリとつるんでるようだし、ま、「三番組教官」と云う閑職に廻しといて正解だったわ。（エドワーズに詰め寄る）可愛い可愛い「教え子たち」が、見るも無惨に死んでいくサマ、ここで、指加えて見てるんだな！ 行くなオメーらアツ！」

一軍メンバー：「うーい!!」

そそくさと立ち去る一軍メンバー。

その傍らで、直立不動の姿勢を取っていたオルガ・三日月・ビスケットの3人。

数分後……

ビスケット：「大丈夫ですか、教官？」

三日月：「また殴られたみたいだね。やり返さないの？」

エドワーズ：「イッツテエ……。相変わらずアイツら変わんねえなあ……。『力でねじ伏せる』だなんて。いつもヒューマンデブリ共を立たせて、マッチポンプだ、やれ毒抜きだ、挙げ句の果てに『一軍からの愛のムチ』名目の鉄拳制裁、ハタからみたら、立派な『虐待』だよ、マジで。ちょうど良い機会だから、ぶっちゃけ聞けど、悔しくないか？」

ビスケット：「確かに……。慣れてしまった部分はあるけど……。悔しいですよ、教官」

エドワーズ：「だよなあ……。流石参謀。良く分かるやん！オルガ隊長は、どうなの？」

オルガ：「悔しいのは分かりますが……。隊の皆を守る為なら……。」  
エドワーズ：「悔しい」って、素直に言えば良いじゃん。顔に出てるぞ。三日月君は？」

三日月：「うーん……。分かんない」

エドワーズ：「無関心だなー、相変わらず。良くも悪くも『凄いよ』三日月君は。でもな、俺は、君たちを、一軍の良いようには使わせない、絶対に、『教官』として、君たち三番組を守る責任があるから。閑職だ、閑職だと、アイツら抜かしてるようだけど、俺にとっては、『要職』だと思ってる。力でねじ伏せるヤツらの末路なんて、たかが知れてるし、ロクな事しかないからねえ……」

三日月：「教官がいつか言ってたよね、たしか『インガ何ちゃら』って……。オルガ、何だったわけ？難しくて分かんないや？」

オルガ：「ミカ、そこ俺に聞くとこか？俺も……。分かんねえよ。ビスケット、分かるか？」

ビスケット：「オ……。オ……。オルガ、行きなり聞かれてもオorz」

エドワーズ：「因果応報」だろ？」

三日月・オルガ・ビスケット：（顔を見合わせながら）「『それだツツツ!!』」

エドワーズ：「ま、いつかそのツケは、身をもって味わう事になるだろうよ、俺や三番組にしたような仕打ちでね、いや『それ以上の』、かな？」

何か気まずい空気になるブリーフィングルーム内。

エドワーズ：（手を叩きながら）ハイハイハイハイ、重ッ苦しい空気、一旦忘れて忘れて。後で親父に掛け合うし、何とかしてやるから、取り合えず教練に戻るぞ。オルガ隊長、今日は昨日の模擬戦のおさらいしよつか（？0？）／♪」

暫く沈黙が続く、オルガとビスケットが驚愕した。

オルガ・ビスケット：「えええええ!!Σ（。ㇿ。）」

オルガ：（ㇿㇿ、——）……（この期に及んで教練ですか、教官。いい加減に「止まって」下さいorz）」

ビスケット：（ㇿㇿ、——）……（オルガ以上に、ブレーキが必要かもorz）」

三日月：「オルガー」

オルガ：「ん？どうした、ミカ」

三日月：「おさらい」って……何？」

オルガ：「そこから説明しねえとダメかよ。（。；）／（——；）  
（そう云うオメーもだ、ミカ。教官にナシ付けないと……ダメか（ㇿㇿ、——））」

時間を戻して、決闘の戦場では……

ダンジ：「教官、勝てますか、あのMSに？」

ダンジがエドワーズに尋ねる。



エドワーズ：「いつちよカッコつけて「受ける事」となっちまったし……MSでの実践、始めてだもんなく。更には、コイツ動かすのも始めてで、これが初陣。どうかしてるぜ」

ダンジ：「タコ殴りにする」なんてどうですか？」

エドワーズ：「MWでやってる戦法じゃ通用しないで、ダンジ君。相手は、訓練が行き届いてるし、見るからに「相当の手練れ」だからな……要するに「三日月君や昭弘君・ノルバ君と云ったエース級のパイロットと相手にしている」ようなものだ。ダンジ君のレベルだと、多分ボロ負けだろうね（？▽？）」

ダンジ：「きょうか〜ん、キツパリ言わないで下さいよおお（TT）模擬戦の時の結果と一緒にしないで下さいよおお（TT）」

エドワーズ：「ゴメンゴメン！思い出しちゃった？」

ダンジ：「はい（TT）」

エドワーズ：「そんな事は、忘れる忘れる！一先ず決闘な。良い機会だから、よく見ておくんだぞ！」

ダンジ：「はいッッ！」

エドワーズ：「神様が、ダンジ君に与えてくれたご褒美……

君だけの……「特別教練」……始めるとするか！」

ダンジ：「よろしくお願いしますッッ！」

バトルアックスを右手に持ち、構えるG-3。

双方準備が整ったようだ。

克蘭ク：『GH火星支部実動部隊・克蘭ク・ゼント!!』

バトルアックスを構えるグレイズ。

エドワーズ：「CGS：クリュセ・ガード・セキュリティ、一軍末席兼三番組教官・元二番組「副隊長」・社長：マルバ・アーケイが実の息子：エドワーズ・アーケイ！」

ダンジ：「同じく、三番組年少兵……ダンジ・エイレイ！」

オルガ：「ダンジ!?生きてたのかッッ!」

三番組年少兵A：「ダンジが!」

三番組年少兵B：「生きてる!」

ざわつく三番組一同。それを気にもせず、決闘が始まる！

(決着が着くまで、イメーじBGM・無双OROCHI2 Ultimate  
ate より「対決ーSINCERE MATCHー」)

克蘭ク：『参るッッ！』

ブーストダツシユで、躍りかかる。

エドワーズ：『来いッッ！』ダンジ君、暫く衝撃に備えなよ！

ダンジ：はいッッ！(神様が、ボクに与えてくれた「ご褒美」、ム  
ダにはしないッッ！)

Chapter 5：お前は俺たちの「教材」になれ！

(イメーじBGM・無双OROCHI 2 Ultimateより「対  
決ーSINCERE MATCHー」)

ブーストダツシユでGー3に接近するグレイズ。

決闘が始まった。

ガアアンッ！

鉄と鉄がぶつかり合う音がこだまし、斬り合いが始まる。

エドワーズ：『ナニユエ単身で、ここに来た？理由を聞かせて貰おう  
か！』

つばぜり合いになる。

克蘭ク：『決闘中に、思索とはな？余裕があるようだが？』ガアン  
！

グレイズが弾き返し、Gー3後ろに下がる。再び双方構え直す。

エドワーズ：『貴公、確か「GH火星支部実動部隊所属」とか言っ  
たな？階級は？』

克蘭ク：『……二尉だ。何故階級を問い質すような事を？』

エドワーズ：『さあね、「何となく聞いて見たかっただけ」だ。それ  
に、過日の夜襲、貴公も与していたようだな？だが、何故単騎でここ  
に来た？』

克蘭ク：『本来なら、コーラルが……我々の上司が詫びに出る筈  
だが……』

ガアアン！再び打ち合う。

エドワーズ：『どうしたどうした？刃に迷いが生じてるぞツツ！』  
ガアアンツツ！

今度は逆にグレイズを弾き飛ばした。仰け反るグレイズ。

エドワーズ：『これが、「法と秩序の番人」として、四大経済圏を守護するべき守り手の「清廉潔白たる正義」のかたちだが、これかよ？たかがイチ民間警備会社を、一個小隊とMW数機編成組んでまで夜襲、挙げ句の果てには、「革命の乙女」と名高き、ノーマン・バーンスタイン代表の愛娘たる、クーデリア嬢の身柄引渡し要求。誰の命令でこれを？』

克蘭ク：『……』

エドワーズ：『言えない』って事は、「上から」の指示でやった、と云う事だな？……「二尉」であるアンタが、何故！上司に反論出来なかった？やっぱ、凶星だろ？』

克蘭ク：『ぐう……』

エドワーズ：『そうやって、暴走を止める事が出来なかった結果、力も罪もない弱者を……アンタらが踏みに行くんだろうが！』  
ブーストダツシュで詰め寄る。

ガアアン！

再びつばぜり合い。

克蘭ク：『貴様、「教官」と言ってたな。教官風情が、何故に決闘に望んだ？』

エドワーズ：『「護るため」だよ。コイツら子供達を』

克蘭ク：『まさか、青年なのか？』

エドワーズ：『スキありイイツ!!』

グレイズの胴体に、G-3の右の逆袈裟斬りが入った。

克蘭ク：『ぐうううツ！』グハツ!!（少量吐血、深く入ってない為、大事には至らず。）

エドワーズ：『俺の背中（後ろ）には……明日をも知れぬ命の中、敢えて銃器を握らざるを得ない選択をした子供たちがいるんだ。今を生きるのに、精一杯な子たちだっている。なのにアンタらは……そんな現状なんか知らずに、土足で踏みにじり、破壊の限りを尽くし

た。アンタらが、ウチに夜襲仕掛けたのが最たる例だツツ!」

ブーストダツシユし、タツクルを仕掛けるG―3。

克蘭ク：『先程から、綺麗事を並べ立てて…それが貴様の…

「正道」かアアツ!』

負けじと、タツクルを仕掛ける 그레이ズ。

双方正面衝突、かと思いきや…

克蘭ク：『ももらツたアアアツツ!』

エドワーズ：『グアツ!?!』

シールドをパイルバンカーのように水平に構え、G―3のバトルアックスを弾いた。その反動でよろけ、倒れるG―3。

オルガらがいる方向へ吹き飛び、突き刺さる。

バトルアックスが吹き飛んだ先では…

オルガ：「決めた!俺たちの「新しい名前」だ… 「鉄華団」。

クーデリア：「えっ?」

オルガ：「俺たちの新しい名前… C G Sなんて「カビ臭い名前」を名乗るのは癪（しゃく）に障（さわ）るからな」

クーデリア：「てつか」… 「鉄」の「火（ひ）」ですか?」

オルガ：「いや、「鉄」の「華（はな）」だ。「決して散らない鉄の華（はな）」… だ」

視点を戻して、決闘は大詰め。

ダンジ：「教官!このままじゃ俺たち負けますって!」

アラートが鳴り響くコクピット。

慌てるダンジ。

エドワーズは考えていた。起死回生の策は必ずある、と云う事を。克蘭ク：『この決闘、私の勝ちだな!!』

頭部センサーが、ガバツと開き、メインカメラが露出、バトルアックスを大上段に構え、切りかかろうとする。

ダンジ：「教官、教官!」

エドワーズの脳内に「電撃」が走った。

そして、彼がとった行動は??

ブウオン!!ズガアンツツ!

グレイズの左脇腹を、淡いピンクの「光の線」で貫いたではないか！

克蘭ク：「何？ビーム、兵器、だと？この時代には普及してない兵力を……CGSが保有していたとでも????（あり得ん！）」

膝をつき、倒れこむグレイズ。勝敗は決した。

「光の刀身」を納め、背中に束を納めるG―3。

降伏信号を打診し、先に克蘭クが出る。

コクピットハッチが開き、エドワーズとダンジが出てきた。

（イメージBGM：オリジナルサントラより「Reincarnation」）

克蘭ク：「やはり……俺の教え子と同じだな」

エドワーズ：「教え子？貴公、やはり俺と同じ教官だったのか？」

克蘭ク：「そうだ……お前の後ろにいるのは……やはり子どもなんだな。」

ダンジ：「おまえらが襲ってきたせいで、ぼくたちの仲間が、仲間が……」

エドワーズ：「ダンジ君!!その辺にしておきなさい!」

ダンジ：「教官、悔しくないですか?」

エドワーズ：「確かに悔しいさ!でも……そう云えば、決闘開始前に、貴公が敗北した場合の条件を提示してなかったな」

克蘭ク：「フ……すまない……君たちを馬鹿にした、訳じゃないんだ。その選択を俺が持たなかった……それだけだ……」

エドワーズ：「つまり、貴公が言いたかったのは、こう云う事だろう?」

克蘭クに対して、エドワーズの「口撃」が始まった。

エドワーズ：「上官であるコーラル・コンラッドの命に背き単騎出撃、自らの身をもって、「決闘」と云う「綺麗な形で」過日の夜襲の清算をしたかった」事。「勝利条件であるグレイズとクーデリア嬢の身柄引渡しが無事、万一火星支部に戻っても、待っているのは総員罰直、良くて別部隊に左遷、悪くて除隊処分」「軍法会議にかけられても

可笑しくない状況」だ、そうだろ？」

克蘭ク：「確かに、お前が言っている事に間違いはない。部隊全体の問題になってしまいうからな……それに……ダンジ君。」

ダンジ：「え？」

克蘭ク：「君の言う通り、おじさんたちは、取り返しのつかない、悪いことをしてしまった。謝らなければならないのは、おじさんの方だ、ガハアツ！（吐血）もう長居は無理なようだ……責任は全て俺が抱えたまま……ウツ、がはッ!!」

ダンジ：「教官、あのおじさん死んじやいますよ、「あのベッド」に入れましょうよ……」

エドワーズ：「分かってる……ダンジ君、銃を貸しても良い？」

ダンジから銃を借りるエドワーズ。（まさか???）

克蘭ク：「介錯を……手を貸してくれるのか？」

エドワーズ：「ああ……」

克蘭ク：「俺はもう……自分で終わる事すら出来ない……」

克蘭クに向けて銃を構え、一呼吸間を置くエドワーズ。

エドワーズ：「…… GH火星支部実動部隊所属、克蘭ク・ゼン

ト二尉、最期に言い残す事はあるか？」

銃を構え、閉眼するエドワーズ。休めの姿勢を取るダンジ。

克蘭ク：「俺を「終わらせてくれる」のか……（閉眼する）ありが……」

パンパンパン!!!

克蘭ク：「!!何故、俺を撃たなかった？」

（イメージBGM：オリジナルサントラより「Make You Believe」）

眼を開けた克蘭ク。向けられた銃口の先を見ると……

グレイズの左脇腹、先程の決闘で、G-3が貫いた部位に向かって、

銃を放ったのではないか！

エドワーズ：「克蘭ク・ゼント。この時点で「GHとしての克蘭ク・ゼント」は、今ここで「射ち殺した」。もう貴公、否、あなたはもう、原隊復帰しなくて良いです。ID上、「死亡扱い」として出しておきますから…… あなたは、軍人として、否、ここ最近の大人たちの中では、至極全うな部類に入ってる。トンスラしでかした親父よりマシだ。

あなたをここで「終わらせる」事すら、馬鹿馬鹿しくなってきた」克蘭ク：「何が…… 言いたいんだ？」

エドワーズ：「そうだな…… 捕虜にするのは勿体ないからな…… 克蘭ク・ゼント、いや…… 克蘭ク「さん」、あなたを俺たちCGえ、ウツ……」

ダンジ：「教官、また頭痛ですか？」

エドワーズ：「取り乱して失礼、鉄華団の為に、「教材」として、協力して貰えませんか？」

克蘭ク：「教材」だと？面白い事を云う青年だ。良からう、捕虜、としてではなく、「教材」か…… 克蘭ク・ゼント、お前達の為に、尽力しよう!!」

赤く染まった火星の夕焼け空に、暖かい風が吹いた。

エドワーズ：『オルガ隊長、そろそろバルバトス出しても良い頃合いだから、 그레이ズの回収始めようか？三日月君もイイ感じだから……』

Chapter 6：特別教練！三日月君を鍛えよう♪

克蘭ク・ゼントをエドワーズの仲間に引き入れた時と同時に、クーデリアは「鉄華団」に対し、地球までの警護を「発注」した。（内容は、原典通りの為割愛しますm（――）m）

G-3の cockpit では……

ダンジ：教官、カッコよかったですう、シビれちゃいました（？▽？）

エドワーズ：「ま、まあ、な…… 初陣で、これだけ動けたならいいんじゃない？それに、クランクさんを「ベッド」に入れておかないとね」

と、クランクを抱えたG-3は隠しハッチへと帰っていった。

三日月：『オルガー、遅くなつてごめん。「動かしても良い」と、教官からOK貰つて来たよ。』

オルガ：「悪いいなミカ。あのMSを回収して、シャトルの方まで持つていつて欲しいんだ。頼めるか？」

三日月：『いいよー』

と、クランクが乗つてたグレイズを、ヨッコラセと右肩に担ぎ上げ、シャトルが停まつてゐる場所まで運びだした。

（ちなみに、バルバトスは第1形態にグレイズの左肩アーマーを取り付けた、クランクとの決闘時の姿。または「第1・5形態」）

一方、エドワーズ達は……

（イメージBGM：オリジナルサントラより「Another World」）

エドワーズ：「成程ね、あの時とつきに出た武器……「ビームサーベル」だったのかあ…… 「まだ武器がある」と云うが、何処にあるんだろ？」

G-3のコクピット内で、何なら四苦八苦しているエドワーズ。

ダンジ：「何処かにあるんじゃないですか？MWの兵装使つてみるとか、どうですか？」

エドワーズ：「無理な事言うね、チミは。（。；）／（——；）

「ナノラミネートアーマーは、ビームを弾く特性がある」と云うのは聞いた事があるが、コイツの「ビームサーベル」は、ナノラミネートアーマーを、いとも簡単に貫いたからなあ……」

ダンジ：「あれは凄かったですよ。でも、どうしましたか、首傾げて？コンソールと、にらめっこしてますけど……」

エドワーズ：「「ビームサーベル」強力過ぎるからなあ…… エイハブリアクター積んでるMSには使え、そうじゃないかあ……」

悩んでいる2人。するとそこにクランクがやつて来た。



克蘭ク：「奥の手として温存する」と云うのはどうだ？」

エドワーズ：「奥の手…… それ良いかも、てか、克蘭クさん!? 大丈夫ですか？ベッドから出てしまっても？」

克蘭ク：「大丈夫だ。1時間で完治したから充分な位だ。ほう、これが「G-3ガンダム」のコクピットか？グレイズとは違うな？」

エドワーズ：「はい、最初は戸惑いましたが、頭に埋め込まれたコイツのおかげで、乗り切れましたんで……」

額を指差すエドワーズ。

克蘭ク：「まさか…… 記憶チップを埋め込まれているのか？」

エドワーズ：「知ってるんですか、克蘭クさん？」

克蘭ク：「ああ、そうだ。かつて、GHのある「没落」貴族の家の当主が、記憶チップの埋設手術を行ったらしい。埋設は成功したものの、杖を突かなければ、歩行もままならぬ状態になったらしい」  
(月鋼のヴォルコ・ウォーレンの事です。)

エドワーズ：「そんな事が…… でも、イイアドバイスありがとうございますッ！」

克蘭ク：「なに、礼を云うのは俺の方だ。こんな俺を、引き入れてくれて感謝している」

翌朝、火星を発つ数時間前、外にバルバトスとG-3が佇んでいる。これから、三日月に対して「特別教練」を行う、との事だ。

エドワーズ：「いいかい三日月君。MS戦は、今まで乗ってたMWと違って、戦闘の進め方が違うんだ。そこで、だ。三日月君には、俺との特別教練を受けてもらうよ♪」

三日月：「何か、イヤな感じがするけど…… まさか教官、バルバトスと目の前にいる教官が乗ってるMSと、戦うの？」

エドワーズ：「モニターを観ながら」流石三日月君、分かっているじゃないの…… って、何で上半身裸なん？」

三日月：「教官知らないの？MW乗ってた時、覚えてない？」

エドワーズ：「ああ、阿頼耶識ね、そうだったそうだった」

三日月：「バルバトスのコクピット、俺が乗ってたMWのヤツそのま

ま移植したんだ。』

エドワーズ：『（親父が「必要ない」とか云って、取り外してたからなあ……）さあて三日月君、始めようか！』

アサルトナイフを両手に持ち、構えるG－3。

三日月：『教官とやるの、めんどくさいからなあ……仕方ない、本気で行くよ！』

（イメージBGM：原典1期より「Iron blooded orphans」）

ブーストダッシュで躍りかかるバルバトス。

G－3を視界に捉えた時、メイスを降り下ろした。  
ガンツツ！

地割れのようなインパクトが大地に伝わる。

回避するG－3。

エドワーズ：『もぐら叩きかよ、今の一撃。』焦ったわう。マトモに喰らったら、中破モノだろうー……って、オイッ！どストレート過ぎるぞ!？」

三日月：『前がさあ……：ガラ空きなんだけど？』

バルバトス、ブーストダッシュでG－3にチャージを仕掛ける。

エドワーズ：『攻め方が単調過ぎるぞ、三日月君。一転突破も立派な攻め方のひとつだ。しかし欠点はある……こんな感じに……なッ!』  
メイスのインパクト面を、右アサルトナイフで受け止め、下段に下げた。メイスの重みで、バルバトスが前によろけ、うつ伏せに倒れ込んだ。

その光景を観て、オルガ達は……

オルガ：「一方的にやられてんじゃねえかよ、ミカ」

シノ：「教官さあ……：実は……：ツエーんじゃねーの?」

ユージン：「ヨエーと、俺たちの教官務まらねーだろ、シノ（。；）  
＼（――；）良く、注意されまくってたよな、教官に」

シノ：「あ、はははは……：そうだったっけ?（へっ；）」

昭弘：「お前、目立ちすぎだから、真っ先に討たれるぞ。実際の戦場だったら、敵の良い的だ」とな……：」

シノ：「そう云う昭弘も、「後手後手に回りすぎてる」とか何とか…」  
昭弘：「お前と一緒にするな！（。；）／＼（——；）」

ビスケット：「戦い方も違うんだね、オルガ」

オルガ：「良い機会だ、存分に鍛えて貰いな、ミカ。あの一軍でさえも、震えて逃げ出す位だからな…教官が「本気出した」時は、かなりヤベエからな…」

打ち合いは続く。バルバトスの単調且つ粗削りな攻撃を、受け流してはカウンターを畳み掛け、圧倒的な強さを見せ付けるG—3。そして……

エドワーズ：『ここでギブアップ？まだ早いでしょ。君はこれから、未だ見ぬ強敵と戦う事となる、例え相手がGHだろうと宇宙海賊だろうと…そこで倒れてて良いのかい？三日月君の「いのち」は、「誰に預けてる」んだっけ？このザマじゃあさあ……悲しくなるなあ……』

ハエタやササイのような上から目線で、バルバトスを見下すG—3。

三日月：「あんたに……そこまで……ボロクソに……『言われたく……ねエよ!!』」

メイスを拾い、勢い良く振りかぶり、G—3の下腹部に、メイスが炸裂。

エドワーズ：『うごおおおあつ!』

炸裂させた後、バルバトスがジャンプ。

三日月：『オルガの道を邪魔するヤツは、例え相手が教官だろうと……徹底的に……叩き潰す!!』

三日月、ついに「心のリミッター」を解除。

もう殺す気満々の状態で、大上段からのメイス幹竹割りを仕掛ける。

慌てるオルガ達。

ビスケット：「ヤバイよオルガ。三日月、完全に教官仕留める気だ

よ……（＜——＞）」

オルガ：「……（はは、ははは……）」

シノ：「どーすんだよ、オルガ。三日月止めねーと、取り返しかねー事態になるぞ！」（＜＜＜）

オルガ：「…（分かってるけど…）」

ユージン：「三日月を大人しくさせるのに、結構時間かかるの知ってるだろ、オルガ！」（＜＜＜）

オルガ：「…（あんな状態のミカ見たことねえし、どうすりゃ…：プレッツェルの婆さんみたいに、上手くなだめる事出来ねえんだぞ…：orz）」

あたふたするオルガたち。

オルガ：「…」（落ち着け、オルガ・イツカ。俺は「鉄華団団長」だぞ。こんな所で、しかも「最悪」な形で終らせては…）」

ビスケット：「多分手遅れになるかもしれないよ、オルガ！」（＜＜＜）

オルガの「心のリミッター」が外れた、「希望のはな」、ではありません、アシカラズm（――）m後頭部にデカイ汗と一緒に…

オルガ：「な…：な…：な…：ぬううあにいやってんだ、ミイカアアアツツ!!教官殺してどーすんだアアアツツ！」（／≡◇≡／）

オルガの心の叫びも虚しく、G―3絶命か!?!と誰もが思った次の瞬間！

ガアアン!!

即座に左腕にシールドを装備、メイス幹竹割りを防ぎつつ、受け流した。

三日月：「やば、立て直さないと…」

ブウオンツツ!

三日月の右の首もとに、「何かが触れてる感覚」を感じた。

エドワーズ：『短時間で俺をここまで追い詰めて、しまいに「コレ」を抜かせてしまうとはな…：まったく、我ながら恐れいったよ…：やっぱ、凄いよ、三日月君は…：（否、「すげえよ、ミカは…：」）』

三日月：『久々に怖かった。やっぱ、教官には…：敵わないや』

オルガの心の叫びと同様、別の場所でも「心の叫び」が聞こえたとか、聞こえなかったとか。しかも、モニター越しで……

ダンジ：「何ここでビームサーベル抜いちやってるんですかア？」

と言うか……

何やってんですか、きよオオカアアんツツ！（TT）」

Chapter 7：いざ地球へ！

特別教練終了後、秘密の格納庫に戻るエドワーズとG-3。

G-3をドックに収容し、降りてきた。

開口一番に来たのは、ダンジだ。

ダンジ：「きよーかーん、何でビームサーベル抜いちやったんですかあ？（>|<）」

エドワーズ：「仕方ないだろ。本気で死ぬ所だったんだぞ。でも、咄嗟に反応出来たし、ま、首の皮1枚繋がったんなら、結果オーライでしょ♪」

ダンジ：「どや顔決めて言える結果じゃなかったでしよ、そこは。観てる方の身にもなって考えて下さいよお…ヒヤヒヤしましたからあ…クラंकさんも何か言って下さいよお（>|<）」

クラंक：「確かに、ダンジ君が言ってたように、危なげな部分が見られたが…最後の所で起死回生のビームサーベル、お前らしいな、エドワーズ」

エドワーズ：「いやいやいやいや、MS操縦歴が長いクラंकさんにそこまで言われても…何と云うか、照れますなあ（へっ）」

照れるも何も、模擬戦闘ではなかったら、確実にエドワーズは、火星のチリと化していたのかもしれない。

エドワーズ：「さて、オルガ達と合流しますか」と、再びG―3に乗り込もうとした時・・・

オルガ：「やつぱりここにいましたか、教官」

エドワーズ：「あら、オルガ隊長？来ちゃった、のね？（まあ、いいけど。一軍と親父いないし、まあいいやorz）」

何と、オルガら鉄華団員とクーデリア・フミタンと、トドがわざわざ出向いて来てくれた。

エドワーズ：「ほう、「鉄華団」ね。改名したんだ・・・」

オルガ：「はい、俺が決めました。「CGS」と云う縛りから逃れたい一心で、決めました」

エドワーズ：「成程ね・・・ お前達の力で、この「大仕事」出来るのかあ？ましてや、GHの奴らに狙われる事は、目に見えてるしな。そんで、慌ただしい空気出まくりだったけど、行くのかい、「方舟」に？」  
オルガ：「はい。実は「方舟」の方には、昭弘達を先に行かせました。後は俺たちだけです」

エドワーズ：「シャトルに積んだ」のはそう云う事だったのね。納得得・・・ あ、ちなみに着いてきたのが、あの・・・」

エドワーズが、オルガの右横にいる女性2人に目が行った。

オルガ：「教官、紹介するのが遅くなりましたが、俺達鉄華団に、仕事を依頼した・・・」

クーデリア：「クーデリア・藍那・バーンスタインです。そして、私の侍女のフミタン、フミタン・アドモスです」

フミタンは軽く会釈した。

エドワーズ：「音に聞く「革命の乙女」、ノーマン代表の御令嬢様にお目通り出来る事、恐悦至極にございます。」

クーデリア：「私も貴方についての噂、耳にしておりますよ、マルバ・アーケイの实の息子：エドワーズ・アーケイ。またの名を「煉獄帰りの軍神」と云う異名、でしたよね、フミタン？」

フミタン：「間違いはありません、お嬢様」

「え、知ってたの？」と云う目で、ドン引く鉄華団員。トドも然り。

克蘭ク：「お前が噂の「軍神」だったのか？」

エドワーズ：「知らなかったんですか？克蘭クさん、そう云うアナタもあるじゃないですか、「紅き猛虎」と云う異名が」

ダンジ：「えーッ！克蘭クさんも「異名持ち」だったんですかアア？（＞|＜）」

克蘭ク：「20年前の話だなf（＾＾；」

照れる克蘭ク。

オルガ：「それもそうだが、ダンジ。良くぞ無事に生き残ってくれた」

ダンジ：「オルガたい… じゃなかった、団長。「ある人」に助けて貰ったおかげです」

オルガ：「「ある人」？誰だ、ソイツは？」

エドワーズ：「俺から説明した方が良いかな？」

オルガ：「教官？」

エドワーズ：「ああ確か、G-3ガンダムを試運転して帰ってきたら、何故かメデイカルベッドがあつて、その中に、ダンジ君が入っていた訳なんだ」

オルガ：「何か分かんなくなりそうだが… 無事だ、と云う事にしておくとして… 教官、俺達と一緒に、地球へ行きますか？」

エドワーズ：「決まってるでしょ！俺の教え子達が行く、て云うのなら、行くしかないでしょーよ!!」

年少組：「わーい!!」

エドワーズ：「ただ、オルガ隊長、否… オルガ団長。この「条件」を呑んで貰いたい。」

オルガ：「どんな「条件」ですか？」

エドワーズ：「観て分かるように、「もと」GH将校・克蘭ク・ゼントを捕虜、じゃなかった、俺の「仲間」として引き入れている。ヤツらには、「克蘭ク・ゼントは死亡している」と云う情報を「与えた」んだ。多分躍起になって来るだろうね」

（一方その頃……

アイン：「ヘクシュン!!」

アールレス隊武官：「アイン、大丈夫か？」

アイン：「大丈夫ですよ。」

エドワーズ：「ヤツらにバレないように、上手く立ち回りをお願いしたい。出来るよな、団長」

オルガ：「教官の… エドワーズさんの頼みであれば… 引き受けてやるぜ、じゃなかった、引き受けましょう！」

ダンジ：「やったー！教官と、克蘭クさんと一緒に、地球へ行けるよ！」

克蘭ク：「そうと決まれば、エドワーズのG-3ガンダムを、シャトルに積まなくてはならないようだが、間に合うか？」

エドワーズ：「そんな心配する必要はないですよ、克蘭クさん。鉄華団が出た後、俺達もシャトルで「方舟」に向かい、親父の舟「ウィル・オー・ザ・ウィスプ」に搬入する。鹵獲品はもう既に積んであるようですし… オルガ団長、CGS三番組の頃からの付き合いもあるから、改めて宜しく頼む。呼び方は… まかせるよ」

オルガ：「ありがとうございます、教官」

そんなこんなもあって、エドワーズご一行様と合流した鉄華団。

地球へ向かって、いざ出発!!と、上手く行くワケがないと、頭の隅っここで見ているエドワーズであった…

LOG―「侵」第1話：煉獄帰りの軍神

Chapter―Extra：異世界からの客

時同じく、火星軌道上

空間の歪みから、赤い鳥が出てきた。

エルピス：「クロノ・アクロス完了。逃走先の太陽系に到着しました」

エルヴィン：「着いた、のか？」

ピーピーピー

アラート音が鳴る。



エルピス：「エイハブウェーブ反応確認。ご主人様、「ヤツ」がここまで追って来ました。」

エルヴィン：「ヤツ」……」アンドラス”か……」

（イメージBGM：Wings／山本彩↑さやねえの卒業ワンマン大成功を祈ります。さやねえ……止まるんじやねえぞ……）

赤い鳥の後を追いかけるように、黒い羽のMSが姿を表した。

別の次元で、大監獄を吹き飛ばしたMS。”アンドラス”だ。

アグナス：『ついてきたのか、忌々しいヤツめ。振り返ちにしてくれる』

大剣を「召喚」、エルヴィンが駆る「フェニクス」に襲いかかる。

ピーピー

再びアラート音が。

エルピス：「ご主人様、危険です」

エルヴィン：「分かってる！」

”アンドラス”の斬撃をひらりとかわす。MS形態ではない為、攻撃があたらないのは当然の事だ。

アグナス：『どうやら「越えた」分の燃料が尽きたようだ。次に会うときは、必ずッ！』（ズウウン）

空間に溶けるように、”アンドラス”が消えた。

エルピス：「推進剤残量、僅かになりましたので、イオンドライブに切り換えます」

エルヴィン：「一体……「あの女狐」は、この世界で何をしようとして……」

エルピス：「生命維持装置作動、フェニクスリアクターをスリープ状態に設定、救難信号を発信します。」

果たして、「異世界からやって来た客人」は、合流出来るのだろうか？

エドワーズ：「ウツ!!（何か、いつも以上に頭が……）」

C o n t i n u e   t o   t h e   N E X T   L O G . . . . .

## 第2話：謀略の宇宙（そら）

LOG―「侵」：第2話

Chapter 1：イサリビ乗船

オルガ達を乗せたシャトルが発射して、暫くした後、別のマスドライバーからシャトルが発射した。

火星の衛星・ダイモスに建造された宇宙港「方舟」へと向かうシャトルだ。

厄祭戦時に使用されたマスドライバーを、P. D. 暦になつても、まだ使えるから凄いのである。

シャトルは、CGSが使っていたシャトルを使用しているのである。G-3とメデイカルベッドを積み込んでおり、乗り込んでいるのは……あの3人だ。

クラנק：「まさか、シャトルまで持っていたとはな……」

エドワーズ：「親父が、多めに購入したんだ。ウイスプに積み込んだりする為に使ってたからね。」

ダンジ：「教官、宇宙行くの始めてですよ。」

エドワーズ：「そうか、宇宙はとてもキビシー環境だからなあ……」

そうこうしてるうちに火星の大気圏突破、「方舟」まであと少し。

エドワーズは、LCS回線を開く。

エドワーズ：「ウィル・オー・ザ・ウイスプ聴こえるか。こちら輸送シャトル「キャメロット」。搬入要請願う、どうぞ。」

チャド：『こちらウィル・オー・ザ・ウイスプ、改め「イサリビ」舵手のチャド・チャダーン……ヴェΣ（∩）、エドワーズ教官？Σ（∩）』

エドワーズ：「その声は……チャダ君かあ。ちゃんとお茶は飲んでるかね？（▽?）」

チャド：『通信機越しでイジるの止めて下さい、教官。シャトルに積

み込んである荷物の搬入ですよね?』

エドワーズ：「ああ、まだオルガ達とは合流してないな？」

「

チャド：『まだです。』

エドワーズ：「よし、もう少しで着くから、後部のハッチ展開して待つてよく。」

チャド：『イサリビ、了解しました。通信終わります。』

回線が切れ、通信が終わった。

エドワーズ：「舟の名前」まで変えたか……いいね、オルガ。サイツコーだね、ぐへへへ……（?▽?）」

ダンジ：「教官、何か楽しそうですね?」

克蘭ク：「ダンジ君。エドワーズは、いつもあんな感じなのか?」  
ダンジ：「はい……こういう時に限って、何かヤバい事考えてたりするので……でも、やる時はやりますからね。」

そうなのか、と呆気にとられる克蘭クを余所に、シャトルはイサリビに到着。雪之丞の支持のもと、先着したデブリ組・年少組の働きにより、無事に搬入作業が完了した。

エドワーズ一行の部屋は、イサリビ内格納庫に近いブロックに宛がわれた。本来なら、マルバの部屋として使われるべき部屋であったが、調度品は無く、ただの物置部屋同然になっていた。そこに、メデイカルナノマシンベッドとか、エドワーズの着替えやら何やらを置いただけでも結構スペースが余っている。まあ、一人じや退屈だし、多ければ良くな?と考えていた。

克蘭ク：「ここで、大丈夫なのか?」

エドワーズ：「大丈夫ですよ、これくらいあれば。もとを正せば、厄祭戦時に、多く建造された「強襲装甲艦」ですから。GHの方で運用されてる「ハーフビーク級」、「スキップジャック級」、更に「ビスコー級クルーザー」とは違って、簡素な作り方ですからね……。」

克蘭ク：「かなり詳しいな。やはり「チップ」の恩恵か?」

「  
エドワーズ：「まあ、そうですね。」

談笑をしているエドワーズ一行を尻目に、イサリビは静かに出航、合流予定宙域へと向かった。

## Chapter 2：漂う悪意

一方その頃、オルガ達を乗せたシャトルは「方舟」付近に到達、火星での細かい手続き等、細々した手続きはデクスターに任せて出立したので、まあ大丈夫だろう。

そして、オルクス商会との契約は成立。しかしこれは、鉄華団を釣り出し、一網打尽に叩き潰し、クーデリアの身柄を確保しようとするGH火星支部長：コーラルの「本懐」。

数日後に、ヴィーンゴールヴより監査官が来る。ここで、「手柄」を挙げねば！といきり立つコーラルの野心が、火星の成層圏を黒く染め上げようとしていた。

時同じく、火星へと向かう1隻の艦船がある。監査局のビスコー級クルーザーだ。

ガエリオ：「お前が睨んだ通り、クーデリア失踪の件…」「コーラルが絡んでいた」ようだな。そのコーラルの「下衆な申し出」を、お前が受けるとは思わなかったよ。」

マクギリス：「下衆」か…… 確かなな……」

ーークランクが、単独で決闘に挑んだ時間まで遡る。

監査局のクルーザーと、火星支部間のLCS通信でのやり取り。

マクギリス：「それで…… 急な話とは？」

コーラル：『是非とも監査官に、御同道願いたい作戦があつてね…』  
ガエリオ：「作戦？」

コーラル：『クーデリア・藍那・バーンスタインが、「調停」の為に地球へ旅立つのは君たちの望む所ではなからう。この手柄を君たちに譲ろう、と言っているのだよ?』

はあ、と溜め息を付き、ガエリオが返答する。

ガエリオ：「1度は自らの手柄にしようと、中隊まで動かした癖に、「手柄を譲る」とは、良く言ったものだなあ。」

マクギリス：「(火星支部の)失態の穴埋めに必死なのだろう。笑ってやるな、ガエリオ。」

ガエリオ：「お前、何を考えている？」(まさか、「クーデター」とか、そんな野暮な事、考えてないだろうな?)

マクギリス：「今やクーデリア・藍那・バーンスタインは、火星独立運動の象徴だ。その小娘1人を「飼い慣らす」だけで、火星の市民を黙らせる事が出来るなら、「利用価値はある」、と思わないか？」

ガエリオ：「成程。「身柄を押さえ、我々の手のひらの上で囁ずって貰う」訳か……」

コーラル：「君たちには、とても申し訳ない事だが、火星支部の威信の為、宜しく頼むッ！」

通信を切り、別の回線に繋げるコーラル。繋げた先は……

鉄華団と契約を取り交わした「筈」のオルクス商会の会長・オルクスだ。

オルクス：「お手を煩わせずとも、我が社の船がクーデリアを捕らえましたものを……」

コーラル：「これは「政治的な問題」だ！手順に意味がある。「結果だけの話」では無いのだ！そこを履き違えるなよ！」

監査局とのやり取りの後、焦燥感にかられながら話すコーラル。火星支部長の椅子が危うい。先の失態、如何にして挽回すべきか？その事しか頭にないコーラル。それを「帳消し」にする為の策として、ある所から話が来た。

火星圏では有名な豪商、ノブリス・ゴルドンからの資金援助と、斥候からもたらされた指令だ。

【革命ノ乙女ヲ、赤イ空ノ果テニテ始末スベシ！】と。

その為に、息のかかった手の者を手配したのだ。オルクス商会を鉄華団に差し向けたのである。更に「内通者」として、元CGS一軍・トド・ミルコネンに数ギャラーの仕事料と云う「袖の下」所謂「賄賂」を渡し、挟撃を仕掛け、「混乱に乗じてクーデリアを捕らえ、オルクス商会経由でGHに差し出す。併せて、鉄華団を消す」と云う手筈である。

オルクス：『浅学ゆえの発言、御容赦を…』

コーラル：「良い！情報提供に感謝している。」

オルクス：『今後も、我がオルクス商会の輸送航路をご最真に願います。』

コーラル：「分かっている…「来期」は任せる。」

回線を切り、火星を眺めながら呟く。

コーラル：「後はクーデリアを確実に始末するだけか…」（フツ、ノブリスのカネさえ手に入れば、どうとでもなる…）——

その悪意に気付く由もなく、シャトルは一路、オルクス商会と落ち合うポイントへ向かう。

フミタン：「いよいよですね、お嬢様。」

クーデリア：「ええ。（行つてまいります。お母様…お父様。）」

Chapter 3：G-3、宇宙デビュー戦

エドワーズ：「船の名前をマジで変えたか…」「イサリビ」ね…「まったく、味な事してくれるぜ、オルガ。ま、「決別する」意味合いがあつて、良いんじゃないの？」

と、格納庫でG-3をメンテしながら話すエドワーズと、その横で、せっせこ手伝うダンジと克蘭ク。

克蘭ク：「しかし、彼らだけでこの装甲艦を、上手く操舵出来るとはな…」

エドワーズ：「ヒューマンデブリとは云えども、彼らには船の操舵方法もしっかり教えましたからね。」

ダンジ：「教官の教え方が、上手い事もありますからね。」

エドワーズ：「そんなに誉めても、何も出てこないからね。（（；））」

3人の会話に、雪之丞が入ってきた。

ダンジ：「おやつさん、どうしましたか？」

雪之丞：「ちよいとコイツが気になってな。」

エドワーズ：「あ、G―3ですか？」

雪之丞：「ああそうだ。整備班のガキ共がお手上げの中、お前さんたちが、ぱぱつと整備してるようだしな。それに、ダンジも手伝ってるようだが大丈夫か？」

ダンジ：「大丈夫ですよ！おやつさんもどうです？」

雪之丞：「悪リイ、遠慮しとくよ…」

整備中、G―3の後ろに並んでるグレイズに気が付いた克蘭ク。克蘭ク：「カツサパ、とやら… 後ろのMSは、俺が乗ってたグレイズだが、これは一体…」

雪之丞：「ま、「質にかける」名目で、使えるパーツをかき集めて作ったジャンク品だ。急造で仕上げたから、色にバラツキがあるけどよ…」

克蘭ク：「そんなに、酷しい台所事情なのだな…」

雪之丞：「そりやそうさ、塗料が安価な白しかなくてな… お前さんがいたGHと違って、ウチはカツカツだからなあ… だが、エドワーズの「G―3ガンダム」とか言ったっけな？ ナノラミネートとは違う、別の材質で出来てるみたいだが？」

エドワーズ：「ルナ・チタニウム合金」で、出来てるらしいんですよ。」

雪之丞：「るな、るな・ちたにうむ？ 何じやそりや？」

克蘭ク：「始めて聞く名前だな。」

エドワーズ：「ま、ガンダム・フレームに使われてるであろう「高硬度レアアロイ」、分かりやすく云うと、「レアメタルの一種」として、認識した方が良くかもしれないね。」

ヤマギ：「おやつさん、ここにいましたかあ。あと、エドワーズ教官と克蘭クさんは、ブリッジに来て欲しいと、昭弘さんが呼んで



ますけど……」

エドワーズ：「分かった、すぐ行く！ナデイさん、G―3は推進剤をチャージするだけなんで、お願いしますね。克蘭クさん、行きますよ！」

克蘭ク：「うむ、行くでしょう！」

ダンジ：「教官！ぼくも行きますよ！」

雪之丞：「お、おい、エドワーズ！どこに挿入口があるんだあ？」  
足早にブリッジへと向かうエドワーズ一行。

雪之丞：「……「自分で探してね♪」とでも言ってるようなもんだぞコレは。」

ヤマギ：「おやつさくん、どうしました？」

雪之丞：「いや……何でもない。とりあえず、手探りでも良いから、G―3の整備、始めるぞ。」

ヤマギ：「そう、ですね……やりますか。」

ブリッジルームに到着したエドワーズ一行。

エドワーズ：「どうしたんだ、昭弘君？」

昭弘：「コイツをみてくれないか？チャド、モニターに映せるか？」  
チャドに指示を出す昭弘。メインモニターに映し出されたものは……

チャド：「30分前に救難信号を受信。エイハブウェーブ・LCS通信は感知出来なかったようで、それに近い周波数で傍受しました。」

モニターを眺めながら、頭を抱えるエドワーズ。例の「頭痛」だ。

エドワーズ：「何か知らないが、頭のなかで声が響くんだ。「助けてやってほしい」と。」

昭弘・チャド：「何ッ？」

エドワーズ：「とりあえず、信号の発信先まで接近出来るかい？それに……後部ハッチ展開、収容を視野に整備班はスタンバイを！」

雪之丞：「分アったよ、準備入るぞー！」

整備班員：『うつうつす！』

急遽、救難信号を出し続けていた「MS」を確保、イサリビに収容された。

エルピス：「ご主人様、ウイングガンダムゼロ炎、「民間の船舶」にて収容されました。今現在、推進剤補充中です。」

エルヴィン：「エルピス、ゼロ炎は任せる。」

エルピス：「私も行きます。」

そう云うと、エルヴィンの左ガントレットにある端末が起動、ゼロ炎のкокピットハッチが開放、格納庫に降り立った。

エルピス：「ご主人様、ここは強襲装甲艦「イサリビ」の格納庫です。救難信号を傍受され、我々を救出したようです。」

エルヴィン：「そう… か？追手はここまで… 来ない… か…」  
バタツと倒れるエルヴィン。

「誰か」が倒れた音に気付いた整備班の少年兵。

整備班の少年兵A：「おやつさん、救出したMSの側に、人が倒れてますけど…」

雪之丞：「取り合えず、食堂連れてけ。」

整備班の少年A：「ウツス！」

見ず知らずのパイロットは、食堂に担ぎ込まれた。

再び、ブリッジでは？

チャド：「そう云えば教官、オルクス商会と契約結んで、低軌道航路船に拾って、「方舟」へ行く、と云う手筈になってる筈ですが…」

エドワーズ：「その話、なんか上手すぎないか、チャダ君？」

チャド：「ええッ？Σ（。□。）」

一呼吸置いて答える。

エドワーズ：「オルクス商会が、鉄華団と契約取り交わすような所じゃないような気がするんだわ。何か「裏」があるんだよね。」

驚く一同、しかし驚かないのはただ一人、そう、かつてGHにいた克蘭クだ。

克蘭ク：「俺がかつてGH、前の職場にいた時、コーラルとの間に「黒い密約」がある、との噂を耳にしたことがある。まさか、こんなかたちで……」

すると、アラート音が！

チャド：「エイハブウェーブ反応、確認!! 数は…… 18!？」

昭弘：「18機だと？」

ダンジ：「多すぎない？」

エドワーズ：「張られてたか？それとも、俺たちが来ると云う情報がリークされたのか？」

昭弘：「ここにいるデブリ組はMWしか操れない。ここはどうすれば？」

克蘭ク：「3個中隊」か…… 出撃したいのは山々だが…… エドワーズ、行けるか？」

エドワーズ：「何時でも行けますよ。」

ダンジ：「ビームサーベル、抜かないで下さいね（―――#）」

エドワーズ：「どうしよつかなく？抜いちゃおつかなく？（？▽？）」

ダンジ：「ぜったいたい抜く気マンマンでしょ、多分。（―――）」

エドワーズ：「そんじやま、GHのヤツらと戯れて来るわ、克蘭クさん、オペレーター役お願いします！」

克蘭ク：「心得たッ！」

エドワーズ：「ダンジ君は砲手席に回ってくれ！」

ダンジ：「了解ッ！」

昭弘：「事態が良く見えないが……これからどうなるんだ？」

克蘭ク：「昭弘・アルトランドよ、つまりこう言う事だ……この事態を打開せんが為に…… G-3を出すッ！」

（イメージBGM： 無双OROCHI2 Ultimateサントラより「行軍1 ARENA」）

格納庫に到着したエドワーズ。無重力ゆえ、宙に浮遊している。手早くワインレッドのパイロットスーツに着替えてある為、そのままG-3に搭乗する。

起動シーケンスが正常に完了し、メインモニターが映る。

雪之丞：「エドワーズ、推進剤、満タン入れといたからな。後、妙な銃が置いてあったから使ってみると良い。』」

エドワーズ：「ナデイさん、それ「ビームライフル」ですよ。ま、牽制程度で使おうかな。」

雪之丞：『びーむらいふるウゝ？またワケ分からん武装出てきたよ、変わり者好きだなあ、お前さんは。』

エドワーズ：「ま、邪魔なグレイズの「群れ」片しておくから。」

雪之丞：『いまのところ、マトモに動けるの、お前さんしかいねエからなあ。』良オオし、エドワーズのG―3降ろすぞオオ、下ア氣イ付けろオオオツ！」

雪之丞の檄が飛ぶ中、搬出アームが、G―3格納ドック後部を掴み、うつ伏せに。床だった部分が開き、G―3を射出カタパルトに移動される。

射出レールに接続後、開いた床が閉鎖される。

外では、射出カタパルトが展開。

克蘭ク：『射出カタパルト展開。A―ロック解除。電磁射出レール、テンションMAX、射出タイミングはG―3に譲渡するツ！エドワーズ、宇宙での戦闘は初陣だが、焦りは無用。』「軍神」にとつては朝飯前か。』ともあれ、冷静に対処したまえ！」

エドワーズ：「...了解。... エドワーズ・アーケイ、G―3行きます！」

電磁カタパルトが射出され、G―3は宇宙に解き放たれた。

チャド：「克蘭クさん、オペレーターもこなせるんですか？」

克蘭ク：「ま、まあ、な... 「心得ている」からな。(ゝゝ)」

ダンジ：「克蘭クさん、カッコいい... 教官が「鉄華団の教材となつて貰う！」と云う意味、何となく分かってくる気がする...」

時同じく、GHアーレス隊は...

武官（隊長）：『良いか、物量で圧倒し、クーデリアの身柄を押さえる。手筈通りに行くぞ！』

武官（一般）：『『『了解ッ！』』』』

コーラル：『アルダ、分かっておろうな？』

武官（アルダ）：『御意に...』「さあ、「ネズミ」共、覚悟するがよい。貴様らの旅は、ココでジ・エンドだ！」

一般武官A：『アルダ隊長、MSが1機、我が隊に接近中!』

アルダ：「宇宙ネズミ」共のMSか?」

一般武官B：『違いますッ!固有周波数リストには一致しません。エイハブウェーブ反応ありません!』

アルダ：「なあにイイツ!」「一致しない」だとオオッ?そんな機体、この時世に存在するなどあり得ぬぞ!」

一般武官C：『アルダ隊長、黙視でなら視認、(ズギョオオオン!)ぐわあッ!』

アルダ：「どうした?」

平静を失うアルダ隊。

その平静を乱している根源こそ...灰色の「未確認」のMSだ。

G-3、アルダ隊と交戦開始。ファーストコンタクトは...

ビームライフルの精密射撃一閃。

エドワーズ：「案外使えんじゃんコレ。良し、これで注意がこっちに向いた訳だ。適当にやつとくか。」

アルダ：「どこから狙って来た?」

一般武官C：『2時の方向、灰色のアレです!』

アルダ：「まだ動けるか?」

一般武官C：『問題ありません!ライフルが射抜かれただけです!』  
アルダ：とにかく、あの灰色のヤツの足を止めるぞ!全機、仕掛けるぞ!」

一般武官：『『了解ッ!!』』』

G-3のコクピットでは...

エドワーズ：「18機」なのに何故5機しかない?クランクさん、一体全体どうなってるワケですか?」

クランク：『恐らく、二手に分けての挟撃が有り得る。まさか!』

エドワーズ：「それじゃあ、オルガ達が...」

最悪なシチュエーションが、頭を過る。

それを払拭するかのように、誰かの声が…

???「困ってるようだな、私が力になろう。エルピス、起動シーケンスを！」

イサリビの格納庫では、エルヴィンがゼロ炎に乗り込もうとしている。

エルピス：「推進剤フルチャージ。デュアルリアクタードライブ、正常に稼働を確認。イサリビとのシエアリング開始。グレイズ2個中隊が、本艦に接近中。よって、ブリッジに「砲雷戦態勢、並びに戦闘配備の指示」を要求します。」

克蘭ク：『ブリッジ了解。ダンジ君、頼んだぞ！』

ダンジ：『了解ッ！』

チャド：「俺たちよりスムーズに動けてるし…。」

昭弘：「……（脳ミソまでガチムチの為、処理速度が追い付かずフリーズ中。）」

克蘭ク：『発進タイミングを貴侯に譲渡するッ！』

エルヴィン：「”I HAVE CONTROL!” ダニエルⅡグレン・エルヴィン… フェニクス、行かせてもらうッ！」

エルピス：「ウイングガンダムゼロ炎、テイク・オフ。」

カタパルト射出、炎の鳥が飛び立った。

Chapter 4：奇襲と奇行と

一方その頃、シャトル内では…

クーデリア：「このあと、低軌道ステーションに入港して、迎えの船を待つ手筈でしたよね？」

ビスケット：「はい、オルクスの低軌道輸送船に拾ってもらって…。」

タカキ：「あつ、あれがオルクスの船じゃないですか？ほら、あそこあそこ！」

トド：「へへえ…（気付いてないなガキ共、あの時みたいには行かねえからな！）」

オルガ：「予定より少し早いな… お！あれは…。」

オルクスの輸送船の影から出てきたのは…

ビスケット：「GHのMS！」

（イメーじBGM：オリジナルサントラより「Survive the Battle」）

ユージン：「おい、その奥にもまだ何かいるぞ！」

シノ：「何イツ！」

トド：「はあッ！どうなってやがる！（フェイクフェイク。）」

ユージン：「トド、説明しろ！」

トド：「お、俺が知るか！GHなんて聞いてねえ！クソッ！クソッ！どけッ！」

オルガらを押し退け、通信無線の所まで行く。

驚くパイロットら。

トド：「俺がオルクスと話をつける！（なあゝんてな、ぷくくくく……）」

オルクス艦オペレーター：「トド・ミルコネンからの通信ですが……」

オルクス：「我々への協力に感謝する」と返してやれ！」

シノ：「協力」ってのはどういう見だあ!?てめえ、俺ら売りやがったなあ！」

オルガ：「入港はいい！加速して振り切れ！」

トド：「クソー！てめえら許さねえぞお！（#、皿）」

ユージン：「許さねえのはこっちだ！（#、皿）」

シャトルの窓越しに見える多数のグレイズを見ると……

ビスケット：「ダメだ、囲まれてる！」

シャトルのパイロット：「MSから有線通信！「クーデリア・藍那・バーンスタインの身柄を引き渡せ」とか言ってますけどお……」  
クーデリアは絶句した。

トド：「さささ、差し出せ！そうすりゃ俺たちの命までは取らねえだろう!!」

ユージン：「てめえは黙ってろ！（（?へ?井）」

トド：「ほ、他に助かる手があるってのかよお？」

ユージン：「グッ、それは…」（――；）

アトラ：「えつと…」

クーデリア：「私を差し出して下さい！」

オルガ：「それは無しだ。」

クーデリア：「ですが!!」

オルガ：「俺らの「筋」が通らねえ。」

トド：「バカか？状況を考え…」

シノ：「うるせえ！」

暫く沈黙が続く、そして…

オルガ：「ビスケット！」

ビスケット：「了解、いくよ、三日月！」

ユージン：「何？」

シノ：「ああ？」

クーデリア・アトラ：「三日月!」

タカキ：「何を？」

オルガ：「フツ…」（見りや分かるよ!）

シャトルのペイロードが強制排出、中からバルバトスが出てきた。

一般武官D：『小細工を…（ダンッ!）なっ!』

一般武官E：『何だ!?MSだと!』

（イメージBGM： 無双OROCHI2 Ultimateサント  
ラより「街亭の戦い THE CREST OF THIRST」

一般武官F：『目標の確保、失敗したようです!』

コーラル：「クーデリアがそこにいるならそれでいい!」

アイン：『コーラル指令!ファリド特務三査より、「殺すな」という  
指示が』

コーラル：「貴様の上官はいつから「あの青二才」になった!?構わん  
!ファリドが来る前に船ごと撃ち落とせ!」

アイン：『は、はっ!』（そうだ、折角もらったチャンス。今はあの  
角の付いたMSを倒し、クランク二尉の仇をとることだけを考えろ  
!）



コーラル：「監査官自らが参加している作戦中の「事故」ならば、いくらでも言い訳が立つ。あとはノブリスとの契約だ。華々しく散ってもらうぞ・・・クーデリア！」

シノ：「クソッ！撃つてきやがった！（＞|＜）」

オルガ：「進路はこのままだ！このままでいい！」

急加速するシャトル、バルバトスとの交戦が続く。

コーラル：「ああっ！くっ・・・あいつから始末しろ！」

三日月：「よし、こつちに来い・・・」

一方、イサリビでは・・・

エドワーズ：「克蘭クさんにダンジ君、あと少ししたらオルガ達と合流する。例の部屋で待機を頼む。それと、目立たない範囲で、戦況注視しといてほしい。』

克蘭ク：「御意に。」

ダンジ：「了解ッ！あのお・・・昭弘さん、教官が「そろそろ団長が着く」ようなので、ぼくたちは別任務があるので、一旦抜けますが、大丈夫ですか？」

昭弘：「構わないが・・・最悪な状況を、ここまでひっくり返すとは思わなかったな・・・」

克蘭ク：「後は、君たちに託すッ！」

昭弘：「ああ、任されたッ！」

そう言つて、ブリッジをあとにして、エドワーズの部屋に戻り、戦況モニタリングを開始した。

ダンジ：「克蘭クさん、あのグレイズ、火星で見たヤツと色と形が違いますけど・・・」

克蘭ク：「良い所に気付いたな、ダンジ君。配属先や仕様によって、色や仕様が異なるんだ。このグレイズは宇宙仕様、背面にブースターが2基付いているだろう？」

ダンジ：「あ、ホントだ・・・じゃあ、あの時の緑色のグレイズは？」  
克蘭ク：「あの色のグレイズは、正規の色のグレイズだ。あの時の

仕様は、地上仕様。地上専用のブースターを装備するんだ。状況に応じて装備を交換できる扱いやすいMSなんだ。」

ダンジ：「すごい、鉄華団にグレイズがあれば……」

クランクのレクチャーを聞きながら、妄想を膨らませるダンジであつた。

再び戦場では？

アルダ：『単騎でこのグレイズ9機を相手どった覚悟は誉めてやろう。しかしッ！これはどうかな？』

距離を取りながらビームライフルを放つG―3。ことごとくグレイズのシールドの壁に跳ね返される。

エドワーズ：「当たんねーし、グレイズがワラワラとお……」

この間も、バトルアックスの降り下ろしを交わしつつライフル打つ、防がれて降り下ろしを交わして、の繰り返し。

エドワーズの「リミッター」もオーバードライブ寸前。

アルダ：『もオラツツたアアッ!!』

アルダ、バトルアックスを降り下ろすべく、躍りかかる。

背後を取られたG―3、絶体絶命のピンチ！

G―3 が取った行動は？

ブウオン！ ズガアアン!!

GH武官：『ぐうおおおわッ!!』

アルダ：『ぐわっ!!跳ね返された、だとオッ!?しかも、何だこの「長いトーチ」は?』

G―3の伝家の宝刀にして奥の手である、ビームサーベルを抜刀、アルダの奇襲を受けとめながら薙ぎ払い、寄って集るグレイズの群れを弾き飛ばしたではないか！

当然その模様は、イサリビの一室まで届いていた。

やはり、「心の叫び」が聞こえたとか聞こえなかったとかorz  
クランク：「ダンジ君、君の予想が当たってしまったようだな、ある意味で……全く恐れ入るorz」

ダンジ：「はわ、はわ、はわわわわ……Σ（。D。）  
（やっぱり抜いちゃうんだ、ここでも。（ー；）な……な……な……）

『何、やってんですか、きょーかあああん!!（>|<）』  
当然「心の叫び」は、ちゃんと「確信犯」にまで届いていた。

そう、エドワーズだ。

エドワーズ：「ごめん、ダンジ君。ピンチだったから……」

弾き飛ばされたアルダのグレイズは……

ピーピー

アルダ：「何、「エイハブウェーブ反応、固有周波数一致。」「フェニクス」だとオツ？ガンダムタイプが、どこにいやがる？」

アルダの眼前に迫ってくる飛行物体。そこから「フェニクス」の固有周波数をキャッチした。

アルダ：「有り得ぬ！エイハブリアクターが普及した現在、飛行機など存在しないのに？しかも……」

エルピス：「ご主人様、前方に「障害物」発見。MSのようです。撃墜を強く推奨します。」

エルヴィン：「分かってる、取り合えず邪魔だッ！」

アルダ：『ズバキュウン!!』何だコイツはアアアッ!』『  
ボガアアアン。

アルダ機のグレイズ、正体不明の飛行物体による攻撃により中破。  
アルダ自身は無事だった。

アルダ：「何故だ？グレイズだけやられたのに、何故俺だけ？」

一方、オルガ達は？

オルクス：「MS隊は敵に釣られたか。よし、こちらで船を沈めるぞ。コーラルに恩を売る良い機会だ。引導を渡し（「ガンツ！」と鈍い音が響く。）うつ！?な、何だ!?!」

オルクス艦オペレーター：「右舷上部後方！敵艦です！」

オルクス：「何イツ!?!」

オルクスの船に奇襲を仕掛けたのは……イサリビだ。

シャトル内のオルガ達を見上げるかのように、イサリビが迎えに来た。

昭弘：「……迎えに来たぜ、大将。」

オルガ：「時間通り。イイ仕事だぜ昭弘！」

エルピス：「ご主人様、オルガ・イツカから鉄華団員並びにクーデリア嬢、無事にイサリビに乗船しました。」

エルヴィン：「先ずは「安心」だな。さて、三日月と……後から来る昭弘含めて、助けに行きますか！」

エルピス：「ご主人様、我々が介入してしまうと、改変罪に問われますが……」

エルヴィン：「助けた恩を返さずしてどうする？それに、「エヴァンズが送った駒」も、そして、「弟（イーサン）の魂」も……」

オルガ達はシャトルからイサリビに乗り込んだ。  
ブリッジに入る。

オルガ：「状況は？」

チャド：「後方からオルクスの船が、まだ付いて来やがる！」

ダンテ：「ガンガン撃って来てるぞ！」

オルガ：「こつちからも撃ち返せ！」

緊迫した状況など知らず、トドが話しかける。

トド：「おい！何でその船がここにいる？」「静止軌道で合流」だった筈だ！」

オルガ：「これまでに前が信用に足る仕事をしたことがあったか

？シノ、ソイツを倉庫にでもぶち込んどけ！」

シノに連行され、トドは倉庫に放り込まれた。

倉庫の隣が、エドワーズご一行の部屋とは知らず……

オルクス艦の砲撃で揺れるイサリビ艦内。

アトラ：「ひやつ！」

クーデリア：「あつ！」

ビスケット：「クーデリアさんは危ないから奥にいて下さい！アトラも！（＞＜）」

クーデリア：「私はこの目で全てを見届けたいんです。」

アトラ：「あつ、三日月が！」

ビスケット：「遠距離で撃ちあっている間は大丈夫。MSのナノラミネートアーマーは撃ち抜けない。」

アトラ：「でも……（三日月ひとりじゃ……）」

オルガ：「仕方ねえな……」ヤマギに「アレ」を準備させろ！」

ビスケット：「アレ」って……「売り物」を使う気？」

オルガ：「ここで死んだら商売どころじゃねえ。昭弘、頼めるか？」

オルガの依頼に、昭弘は黙ってうなずくしかなかった。

オルクスの「後詰め」を捉えたエルヴィン。

オルクス艦隊後詰めオペレーター：「エイハブウェーブ反応確認。

我が艦の後ろにいます！」

オルクス後詰め艦隊長：「何、新手のMSか？」

突然の珍客に混乱する後詰め。

エルヴィン：「さて、少し手助けしよう。」

エルピス：「ご主人様？」

エルヴィン：「鉄華団が待ち受けるのは、後にも先にも退けない「茨の路」。「志半ばで倒れ逝く者」もいれば、「約束を果たさんが為、己が身体を捧げてまで成就せんとする者」もいる。しかし、彼らが望むべき「真の結末」、「たどり着いたその先で、みんなでバカ笑いするような世界」の為、たとえ天の意思に冒瀆する行為を侵してまでも、俺が為してみせる!!そして……デイジーを……この手で仕留めるッ！エルピス！ツインバスターライフルで、オルクスの後詰めを屠るッ

！

エルピス：「宜しいのですね？… ご主人様の一存に委ねます。  
ターゲットマーク完了。」

エルヴィン：「受けるがいい！不死鳥の… 業火をッ！」

バシユウウン！！

ドゴオオオオン！！

イサリビに張り付いていたオルクスの後詰め艦隊が、ゼロ炎のツインバスターライフルの一撃で、火星のチリとなった。

エルヴィン：「さて、三日月・オーガスの救援に向かうか。」

バルバトスのもとへ、炎の鳥が向かった。

Chapter 5：邂逅、炎の不死鳥と灰塵の軍神

コーラル：『くつそお、チョコマカとお… 援護しろ！接近戦をやる！』

接近戦を仕掛けるグレイズ。交わしながらコーラル目掛けて攻撃し続けるバルバトス。

撃ち合いに縛れる。

コーラル：『私のオツ、邪魔をするなあっ！（ドゴオオオオン！）ぐぬう？』

何処からか砲撃があつた。三日月が見渡す。

昭弘が乗ったグレイズ改が合流した。

コーラル：『ぐつ、何だあ？グレイズだど？あの機体、確か…』  
ガアン！！

バルバトスの攻撃がヒット、トドメさした。

コーラル・コンラッド、撃墜。

一般武官G：『コーラル三佐く！』

一般武官H：『そんな… 指令まで…』

アイン：『またアイツに？』

一般武官H：『アイン、もう1機来る！援護を！』

アイン：『なっ！この「リアクターの反応」は… ぐつ、『クランク二尉の機体かアアッ！』

一般武官H：『待てアイン！お前まだケガが！』

アイン：『このケガくらい、何のこれしきイイツ！』  
グレイズ改に向かって、アインが迫る。

三日月：『足の止まったのからやろう、援護頼む。』

昭弘：『（無茶言うな、三日月。）。；）／＼（――；）待てよ！俺はまだこれに慣れてねえのに！』

三日月：『後で教官に、特別教練受けてもらったら？んじゃ、行つてくる。』

昭弘：『さらつと「援護頼む」と言うとは、三日月の野郎！こっちは阿頼耶識がねえんだぞ！』

と、三日月に対して文句をぶつぶつ言いながらも、アインの急襲を砲撃でフォロー、三日月を何だかんだ言って助けた。

バルバトスが、グレイズを翻弄し撃墜。そこに、紫の見慣れぬグレイズが姿を現した。

三日月：『新手？』

ガエリオ：『コーラルめ。我々を出し抜こうとしてこのザマか。グレイズを既に数機失ったが…見てくれよりは、多少は出来るようだな。』

一般武官A：『ガエリオ特務三佐、我々も加勢致します！』

ガエリオ：『ほう、生き残りか？まあ良い。忌まわしき宇宙ネズミ共に、戦いの作法を教えてやろう。さあ、狩りの時間だっ！』

ガエリオの指示のもと、生き残ったアーレス隊のグレイズが鉄華団に襲いかかる。すると…

ズキユユン！

ズバキユユン！

アーレス隊の残存兵を、一瞬にして多数撃墜された。

ガエリオ：『何だ、今の銃撃は？何処からだ？』

エルピス：『ご主人様、MS反応を確認。グレイズの高機動型モデル・「シュヴァルベ・グレイズ」です。』

エドワーズ：『おいおい、ここでシュヴァルベ？久々に見たよ、「上官クラス」の機体かあ……』

思いもよらぬ助太刀、G―3とゼロ炎だ。

一方、GHサイド。

オペレーターA：「ボードウィン特務三佐、アールス隊の残存兵と合流し、会敵しました。」

オペレーターB：「更に敵側に増援、エイハブウェーブ反応がない機体が1機含まれています。」

マクギリス：「それにしても見ない機体だな……照合出来るか？」

オペレーターA：「距離ありますが、エイハブリアクターの固有周波数は拾えています。波形解析……データベース照合中……出ました！」

照合結果に驚くマクギリス。

マクギリス：「ガンダム・フレーム」だと？しかも2機？」

オペレーターA：「はい、まず1機目の固体コードは「バルバトス」。2機目は……容姿が違います……固体コードは「フェニクス」です。ただ3機目は……データベースに対象の固体コードはありませんでした。ただし、左腕に記されているマーキングを解読した結果、灰色の固体、むしろ機体名は……」

「G-3（ジースリー）ガンダム」との事です。」

オペレーターC：「マッチングエラーでしょうか？2機のガンダム・フレーム機は、厄祭戦時代の古い機体ですよ？」

マクギリス：「いや、必然、かもしれんな……」

オペレーターC：「ファリド特務三佐？」

マクギリス：「ソロモン七十二柱の悪魔（其の名）を冠する機体は、幾度となく「歴史の節目」に姿を現し、人類史に多大な影響を与えてきた。（無論、いずれ「俺」が手にする「GHの絶対的象徴」たる、始祖・「アグニカ・カイエル之魂」が宿りし「バエル」、ウォーレン家の「アスタロト」、ナディラ家の「グレモリー」、ボードウィン家の「キマリス」、ザルムフォート家の「ダンタリオン」もまた然り……）火星の独立を謳うクーデリア・藍那・バーンスタインが、それを従えているのだ。だが、「G-3ガンダム」とやらは別だがな。（エイハブウェーブすら感じなかったあの機体、実に興味深い。）船を任せるぞ、「私」も出る。」



監査局士官：「ファリド特務三佐？」

MS格納デッキへと向かうマクギリス。おもむろに端末を出し、あ  
る士官に連絡を入れた。

マクギリス：「石動か、ああ「私」だ。実に興味深い事案が発生し  
て……。私は今、火星圏にいる。火星支部の「残務処理」を行っていて  
ね……。遂に、歴史の表舞台に蘇ったのだよ、「ガンダム・フレイム」  
が、悪魔の名を冠する伝説の機体がね……。まだ「早めなくて良  
い。」……。悟られぬよう、地道に準備を続けて貰いたい……。「私」は  
この辺で失礼する。

（通話を切る。）

遂に、伝説の悪魔と渡り合える！

アグニカ賛美的な事を頭の中で妄想しながら、シュヴァルベに乗り  
込むマクギリス。

マクギリス：「マクギリス・ファリド、シュヴァルベ・グレイズ、出  
るぞー！」

（イメージBGM：「無双OROCHI」より「FUSION！」）

三日月：『教官？それに、赤い鳥みたいなヤツ誰？』

エドワーズ：「三日月君、そこまで詮索しないでほしいなあ（（（  
へ；）そして、アンタは何者だい？」

エルヴィン：『私は、ダニエル・グレン・エルヴィン。訳あって「あ  
る囚人」を追っている。救出してくれた礼も予て、鉄華団に加勢しよ  
う。』

エルピス：「ご主人様、敵増援多数接近。数は10。恐らく総力戦に  
なるかと思われます。」

三日月：『あつ、また増えた。』

エルヴィン：『まさか……。総大将の「吊い合戦的な感じ」だろ？』

エドワーズ：「昭弘君、まだ機体に「馴染めていない」から、引き続  
き後方支援任せる。戦いながら慣らしていった方が、昭弘君の利にか  
なっているかもしれない。出来るね？」

昭弘：『教官がそう云うのであれば……。了解！』

エドワーズ：「三日月君は、俺と一緒に「あの紫のシュヴァルベ」

を…」

三日月：『分かってる、やるんでしょ?』

エドワーズ：「そうだな。ダニエル、とか言ったな? アンタはどうする?」

エルヴィン：『お前たちのサポート、かな?』

エドワーズ：「ドライ過ぎる返事だな、オエ。」

エルヴィン：『ウカウカしていると、増援の一斉掃射来るぞ。』

エドワーズ：「そうと決まれば… 行動開始ッ、って、三日月君、先走り過ぎ! (〽〽〽)」

各機散開し、攻撃再開。

三日月のバルバトスは、ガエリオのシユヴァルベ・グレイズと対峙。  
ガエリオ：「落ちろッ!」

ライフルを撃つも、交わしながらシユヴァルベに迫るバルバトス。

三日月：「無駄。」

メイスを振りかぶり、幹竹割りを仕掛けるも…

ガエリオ：「何て力任せなッ! ちイッ!」

後方に緊急回避。両者拮抗状態が続く。

そんな一進一退の攻防を、俯瞰しているマクギリスは…

マクギリス：「あれか… ガエリオめ、ああもおかしな避け方をされてはムキになるのも分かるが… こちらの照準システムに異常はない。やはり「奴」の問題か。姿勢制御プログラム特有の回避パターンは出ない。まるで「生身のような」重心制御が、回避動作を最小限に留めている。「空間認識能力の拡大」を謳ったものだっか…

「阿頼耶識システム」とは… (ピーピーピー) 何ッ!」

ズキユユン!

ボガアアンッ!

マクギリス：「何処から狙って来た?」

我に返ったマクギリス、モニターで確認。その先には?

マクギリス：「エイハブウェーブ反応がない? やはり… 「あの機体」か?」

エドワーズ：『随分と余裕ブツこいてるようだな、「蒼嵐の貴公子」さんよオッ！』

灰色の角付きのMS。G-3だ。ビームサーベルを抜き、一騎討ちに打って出る。

エドワーズ：「ご自慢のライフルが身代わりになって、良かったじゃないの？」

マクギリス：『ビーム兵器を使うMSが、火星に存在する』と言う噂は、本当だったらいいな。』

エドワーズ：「アンタの事だ……『ビーム兵器の技術は、厄祭戦以前の、B・D・暦の技術、「モビルアーマー（以降MA）」のみ装備された兵器』と云う認識があるようで、『再現不可能の「喪われた技術」扱い』らしいな、ここではな！」

マクギリス：「何故分かる？GHの一部の人間のみ知っている事を？」

エドワーズ：『さあな!!』

両者、激しく撃ち合う。

一方、イサリビサイドは、オルクス艦隊に追いたてられ、絶対絶命のピンチに晒されている。振り切ろうとしても、真っ向から砲撃を仕掛けようとしても結果は同じ、イサリビが撃墜されてしまう。そこでオルガは、「資源採掘用の小惑星を使って、回避してみる」と云う無茶な大博打に打って出る事にした。

ビスケット：「やるにしても、問題は離脱の方法だ。船体が振られた状態での砲撃はアテに出来ない。誰かがMWでアンカーの接続部に取り付いて、爆破するとかしかないけど……」

シノ：「んなの自殺行為だ！誰がやんだよ？」

オルガ：「それは勿論（俺が……）」

ユージン：「てめえは大人しく座ってろ！」

オルガ：「ユージン？」

オルガを制止したのは、ユージンだ。

ユージン：「大将」つつうのは「でっかく構えとく」もんだろぅが。「ノコノコ出ていく」なんて「みっともねえ真似」は俺が許さねえ！テ

メエらもだ!!なんでもかんでもオルガに頼ってんじゃねえぞ!」

シノ：「んだとお!?（#、皿）」

一触即発の空気が漂うブリッジ内。その空気を打ち消すかのよう  
に、誰かが入ってきた。

克蘭ク：「君たちなりに良い作戦かもしれんな。」

オルガ：「克蘭クのオッサン?それに、ダンジまで?」

ダンジ：「すいません、団長。心配になって、来ちゃいました。」

克蘭ク：「相当のリスクを負った一撃離脱」か...だが、ユー  
ジン君の言った通りだ。オルガ・イツカ、お前はあくまでも「団長」だ。  
団員たちを信じ、待たなければならぬんだ。ここは、団員たちを信  
じ、委ねるんだ。かつての私の教え子のような若い命を、ここで失う  
訳にはいかんだ。」

ダンジ：克蘭クさんが、団長の事を思って言ってるんですよ!団  
長、立ち止まる事も、必要なんじゃないですか?」

はっ!と我に返ったオルガ。

オルガ：「オッサンやダンジに言われちまうと...まるで教官に怒  
られてるようだな...」

ビスケット：「オルガ?」

オルガ：「何でもない、独り言だ。ユージン、やれんだな?」

ユージン：「俺らに黙って船まで用意しやがって、俺にも仕事させろ  
!」

オルガ：「フツ、そこまで言うなら見せ場は譲ってやるよ。」

ユージン：「任せろ!!」

ユージンは、足早にMW格納庫へ向かった。

オルガ：「オッサンに助けられちゃったな、教官かと思ったよ。」

克蘭ク：「時には年長者の意見も聞き入れるべきだ、そうは思わん  
か?」

オルガ：「ああ、全くだ... お前ら準備しろ!」

チャド・ダンテ：「了解ッ!」

オルクス艦オペレーター：「敵艦、高度を上げます!」

オルクス：「小惑星を盾にする気だろうか... 無駄な足掻きだ、撃

ち続ける！」

克蘭ク：「エドワーズ聞こえるか？」

エドワーズ：『どうしました克蘭クさん、今「蒼嵐の貴公子」とじやれ合ってますけど何か？』

克蘭ク：「何、フアリド特務三佐だと？」

エドワーズ：『それがどうしましたか？』

克蘭ク：「すまない、イサリビの方が今大変な事になってる。」

エドワーズ：『大変な事って？』

克蘭ク：「今、オルクス艦隊の追撃を受けている。それを回避すべく、資源採掘用の小惑星にアンカーを撃ち込み盾代わりとし、追撃を交わすようだ。」

エドワーズ：『無茶な事を？オルガ団長は正気か？そんで、アンカーを射出して、かわすのは分かるんですが、アンカーの抜錨のフォロー、誰が出るんですか？まさか、「オルガ団長が行く」なんて…』

克蘭ク：「ユージン君が行くらしい。」

エドワーズ：『はあッ!?七星（ナナホシ）君があ？』

克蘭ク：「今、ユージン君がMWに乗って準備している。」

エドワーズ：『ここで死なれては元も子もないからなあ…取り合えず、団長のフォローを、こっちはこっちでかなり忙しいから、イサリビは任せます！』

克蘭ク：「了解した、エドワーズ、御武運を！」

そして、小惑星にアンカーを撃ち込み、主砲と閃光弾を掃射、混乱するオルクス艦、その傍らでユージンのアシストもあり、オルクス艦隊は壊滅。

一方…

ガエリオ：「チョコマカと、すばしっこいヤツめ！」

左腕のワイヤーアンカー射出。バルバトスを絡めとろうとするが、上手くかわした。

三日月：「うっ！（ガントレット「だけ」持ってたか。）」

マクギリス：「致命傷を避けたか、良い判断だ。」

エドワーズ：『隙がありまくりなだけど！』

青いシュヴァルベと灰色のG―3が、まだ激しく打ち合っている中、バルバトスと紫のシュヴァルベは？

ガエリオ：『大人しく投降すれば、然るべき手段で貴様を処分してやるぞ。』

三日月：「投降はしない。」

ガエリオ：『ん？』

三日月：「する理由が… ない！」

ガエリオ：『ガッ！』

滑空砲を放つも、回避するガエリオのシュヴァルベ。間髪入れずに、再びワイヤーアンカー射出。バルバトスの滑空砲の砲身を絡め取った。抗うバルバトス、手繰り寄せる紫のシュヴァルベ。

ガエリオ：『そのクソ生意気な声… あの時のガキかあ！』

―「方舟」出立の前の時間まで遡る。

（イメージBGM：オリジナルサントラより「Desert in the Desert」）

火星：クリュセ均衡にある桜農場。桜・プレッツェルが経営している農場だ。

クッキー・クラッカー：「ああつ…」

何の因果か知らぬが、身なりの良い紫の髪の毛の青年の胸ぐらを、三日月が掴んで、今から殴り倒そうとしていた。

クッキー・クラッカーが必死に弁明、彼女らが飛び出してしまった所を、間一髪所で回避。車から降りてきた青年に対し、三日月が殴り倒そうと云う事態が発生した。

桜：「いい加減にしないか、この慌て者！」

三日月：「(はっ！) 桜ちゃん!？」

桜：「カツとなるとすぐこれだ。気をつけな。」

三日月：「ごめん、桜ちゃん…」

桜：「謝る相手が違うだろ！まったく…」

彼女らの必死の弁明と、桜の制止もあり、青年の胸ぐらを離した。車の中からもう一人、金髪の青年が出てきた。

紫の青年・ガエリオに対し三日月は謝ったが、「何がすいませんだ！」と謝罪の旨を受け入れなかったが、金髪の青年に制止され、ようやく受け入れた。

青年らは、三日月の背中に施された「モノ」に目が行った。

ガエリオ：「おい、貴様……その背中のは何だ？」

三日月：「ん？」

金髪の青年・マクギリスは呟いた。

マクギリス：「阿頼耶識システム」……」

ガエリオ：「あらやし……？（何だったつけ？）」

マクギリス：「人の身体に埋め込むタイプの「有機デバイスシステム」だな？未だに使われている、と聞いたことはあったが……」――

三日月は思い出した、「あの時のアイツ」だ！

（イメージBGM：オリジナルサントラより「Defenders of the Wild」）

三日月：『そういうアンタは……「チョコレート隣の人」！』

ガエリオ：「ガエリオ・ボードウィン」だ！火星人は……火星に帰れええー！」

バルバトスを火星に投げ捨てようとする紫のシュヴァルベ。

ガエリオ：『あつ！気でも振れたか「宇宙ネズミ」ガツ!?ウツ!!』  
ダアン！

紫のシュヴァルベの左腕に滑空砲が命中。ワイヤーアンカーがもぎ取られた。

灰色のMSの追撃を振り切って、青のシュヴァルベが駆けつけた。  
マクギリス：「ガエリオ、大丈夫か？」

ガエリオ：『すまないマクギリス、こっちは掠り傷だ。』

マクギリス：「なら良い。正体不明のMSに追い詰められているよ  
うだが……まだ行けるか？」

ガエリオ：『当然だ！』

青のシュヴァルベと合流した紫のシュヴァルベ。

彼らの下では、バルバトスとグレイズ改を回収したイサリビが通過

して行つた。

三日月：「そうか… あつちは「チョコレートの人」か…」

Chapter 6：未知の驚異

エルピス：「ご主人様、敵の追撃激しく、かわしきれません。」

（イメージBGM：ガンダムビルドファイターズOSTより「メイジン」通常のフラメンコの6倍の情熱）

エルヴィン：「仕方あるまい、こつちも打って出る！エルピス、変形だ！」

エルピス：「了解しました、ウイングガンダムゼロ炎、MSモードに変形します。」

GHアーレス隊武官：「何が始まるんだ？」

啞然と見つめる中、ゼロ炎が垂直に飛翔、瞬時に人型のMS形態に変形した。

アイン：『あのMS、「変形した」、だと？』

驚くGH勢。「単体で人型に変形するMSなんてあり得ない」と云う空気が漂っていた。

MS形態に変形したゼロ炎、瞬時にツインバスターライフルを連結、狙いを定めた。

「狙われている」事を知らないGH勢。

エルヴィン：「さあて、消えてもらうよ。（カチッ。）」

ズキュユン!!

「別の世界」では、スペースコロニーを破壊出来る位の威力を誇るツインバスターライフルのフルバースト射撃を受け、アーレス隊は瓦解するも、辛うじてアインは生き残った。

アイン：『何だったんだ、今のは？（ピーピーピー）何、MS反応？何処から？（ズキュユン！）ウツ！そこか？』

灰色のMSの狙撃を喰らい、のけ反った。

アイン：『良くも同胞をオオッ!!』

エドワーズ：「クソッ！ビームライフルだけじゃ間に合わないか？」  
マクギリス：「ガラ空きだぞ！ガエリオ、仕留めるぞ！」



ガエリオ：『全然状況が飲み込めてないが……貴様も「火星入」か！大人しく火星に……引つ込めえッ！』

アイン・マクギリスはバトルアックスを、ガエリオはスピアを構えて呐喊、それぞれ構えて接近するが……

ブウオン！

ズガアン！

ウイングゼロ炎の剣：カレドヴルツフ炎・G-3のビームサーベル  
双方からの剣圧で、互いに吹き飛ばされたではないか！

アイン：『アルダ隊長が言ってた「光るトーチ」……ビーム兵器、だと？』

ガエリオ：『マクギリス、何だアイツらは？我々が見たことのない兵器を使っているようだが？』

マクギリス：「知らなかったのか、ガエリオ。あの2機のMS、さっきお前が相手していた「バルバトス」と同じ、「ガンダム」の名を冠するMSだ。」

ガエリオ：『「ガンダム」だと……厄祭戦時、初代ボードウィン卿が乗り、アグニカ・カイエルが乗ったとされるあの……』

マクギリス：「そうらしいが……我々は今後、あのMSと戦うことになるだろう。特に、「G-3ガンダム」とやらには、要注意だ。刃を交えた「私」には分かる。どうやら潮時だな。ガエリオ、退却だ。残存兵も併せて回収、立て直すぞ。」

ガエリオ：『ネズミ共を逃がしたのは誤算だが、あの灰色のガンダム、油断ならんな！（そろそろ、「あの機体」を引っ張り出す頃合いかな？）』

アイン：『G-3……ガンダム』か……』

退却するGH。

エドワーズ：「勝った、ようだな。ダニエルとか言ったな。俺たちも、イサリビに帰還するぞ。」

エルヴィン：『そうだな……』

イサリビの方向に向かい、2機のMSが飛び去って行く。  
そして……………

その状況を、謎の「戦闘機」が見守っていた。飛び去って行く様子を  
確認した後、溶けるように静かに消えた。

こうして、鉄華団は、GHアーレス隊・オルクス商会を撃破。「景気  
の良い門出」となった。

## Chapter 7：アレン・クランツ

イサリビに帰還したG-3とゼロ炎。

格納庫には既に、バルバトスとグレイズ改が整備ドック入りし、メ  
ンテナンス作業に入っていた。

雪之丞：「さっきまで鳥のような姿してたのが、MSの姿になるだ  
んなてなあ……………」

驚きを隠せない雪之丞。一方、G-3は、と云うと……………

ダンジ：「きょーかん（ーー）？やっぱビームサーベル抜いたでしょ  
？ しかも3回。ちゃーんと、この目で、しっかり、見てましたよ。

「証人」もいるので、言い逃れ出来ませんよ？（ーー）ね、クラン  
クさん。」

クランク：「そ、そうか？言及したい所だが、まさか「監査局」の、  
且つ、「名家の息子達」と「教え子」を一気に相手取るとはな……………感  
服した。」

ダンジ：「認めるんですか、そこ（ーー）#」

エドワーズ：「前も言ったけど、仕方ないでしょダンジ君。要は、「勝  
てば良からう！」だから、ね。今回は、「シユヴァルベと合間見えた事」  
が大きな戦果かな？」

ダンジ：「しゅ、「しゅう」あるべ」って何ですか？」

エドワーズ：「GHのMS・グレイズの高機動型「シユヴァルベ・グ  
レイズ」、さっき俺がG-3でやりあった、青と紫のMSいたでしょ  
？」

ダンジ：「ああ！さっきのですね！」

エドワーズ：「そうそう！それが「シュヴァルベ・グレイズ」ね。『シュヴァルベに乗れるのは、エースクラスか上官クラスじゃないと授与出来ない機体』なワケさ。そうですね、克蘭クさん。」

克蘭ク：「ああ、そうだ。エドワーズの言ってる事に間違いは無いが…… ちなみに、グレイズ系統のMSは他に何かあるか知ってるか？」

エドワーズ：「ええ、勿論！『騎士のような姿の「グレイズリッター」、グレイズの廉価版の「フレック・グレイズ」』ですよ？（それと、『阿頼耶識システム登載の試験機「グレイズ・アックス」』とかもね…… 公表したいけどさ、ぐへへへ（？▽？））」

ダンジ：「きょーかん、いま何か企んでたでしょー（ー；）？」

エドワーズ：「べ、別にいゝ……（3、）」

ウイングゼロ炎は、と云うと……

エルヴィン：「何とか切り抜けられた、か。」

雪之丞：「おう、生きて帰ってきたか。救出した時は、かなり疲れきってたのに、MSと同様にタフだな。」

エルヴィン：「それほどではない。だが、敵の方が案外「そうでもなかった」ような強さだったがな。」

雪之丞：「結構上から目線だな。メンテナンスしなくて良いのか？」

エルヴィン：「大丈夫だ、「ナノスキン」を登載してる故、自動修復が可能だ。自然に治る。」

雪之丞の左肩をポンと叩いて、格納庫を去って行った。

雪之丞：「な……「なのすきん？（@|@）」 何が何だかさっぱり分からなくなってきた……」

時同じく、トドを入れたカプセルを射出。GHのビスコー級クルーザーに届けられたと云う。

イサリビの食堂では……

（イメーシBGM：オリジナルサントラ2より「Daily life of the Tekkadan」）

エドワーズ：『別の名前』を名乗ってヤツらを欺く、と云う手を使

いまいしょうか？」

ダンジ：「教官それイイですよ！ね、克蘭クさん。」

克蘭ク：「そ、そうか？本当に「バレない」、だろうな？」

シノ：「エドワーズ教官がそう云ってるから、いいんじゃない？  
なあオルガ。」

オルガ：「ま、まあ、な。克蘭クのオッサンが「生きている」と云  
う事を知ってるのは俺たちだけ、だからな。」

ビスケット：「確かに…… どうします？バレないような「別の名  
前」、何にします？」

GHを欺く為の、克蘭クの新たな名前を決める会議が始まった。  
（大喜利みたいになってるがorz）

シノ：「んじやゝ…… 『ギャラクシー・スター』（？0？）／」

エドワーズ：「ノルバ君、なにそのキラキラネーム？（。ゝゝ）／（—  
—；） ボツ。次ッ！」

シノ：「そんなあ、イカしてるのにいゝ（＜「＜」）」

ユージン・ダンテ：「誰も聞いてねえよ（。ゝゝ）／（——；）」

昭弘：「『克蘭ク・アルトランド』ってのはどうだ？」

エドワーズ：「昭弘君、ムリしてないか？オルニチン入りのプロテイ  
ン飲んで、脳ミソも超回復した方がいいんじゃない？次ッ！」

ビスケット：「『ゼント・プレッツェル』って、どうです？」

エドワーズ：「うーん…… 桜ばあ様に了解得てるの？次。」

三日月：「んー、『教官の側にいる人』」

エドワーズ：「ニュアンスは良いけど惜しいねえ…… でも何か違  
う、つぎ。」

アトラ：「うーんと…… 『フランツ・ミクスタ』はどうですか？」

エドワーズ：「イイ線いつてるけど、何かなあ…… でも、アトラ  
ちゃんの発想力には脱帽ものだ。つぎ。」

フミタン：「『克蘭ク・アドモス・バーンスタイン』は、どうでしょ  
うか？」

エドワーズ：「フミタンさん、長すぎて覚えられません、次。」

フミタン：「お嬢様の番ですよ。」

クーデリア：「ああ、次は私でしたか……『フランツ・ノアキス』は？」

エドワーズ：「クーデリア嬢も、イイ線行っているようだが、何か得心行かないなあ……次。」

オルガ：『ゼント・イツカ』ってのはどうだ。」

エドワーズ：「団長、一旦「止まれ」(。；)／＼(——；)」

会議が難航する中、エルヴィン登場。

エルヴィン：「これならどうか？エルピス、ビジョンを。」

エルピス：「かしこまりました。」

左腕のガントレット状端末から、3Dモニターが出てきた。そこには、『CLANK ZENT』と、克蘭クの名前が映し出され、一文ずつ、右手でスワイプし始めた。

エルヴィン：「まったく、イイ案が浮かばないようだから……これでうだ、克蘭クさん？」

克蘭ク：「ああ……これでなら、バレずに済む！」

驚く一同。

そこに標示された「新たな名前」は……

『ALEN CLANTZ (アレン・克蘭ツ)』

克蘭クが、GHに「欺く」為の、新しいフルネームだ。

LOG—侵：第2話・謀略の宇宙（そら）

Chapter—8：蠢く何か

（イメージBGM：Wings／山本彩）

マルバ：「すいません、名瀬さん！何から何まで……」

名瀬：「すまないねえ、マルバ。「何かの縁」もあるし……困った

時はお互い様、だろ？」

マルバ：「そ、そおですよね。あは、あは、あはははは……」

イサリビとは別の宙域に、逃げ延びたマルバ・アーケイ。

逃げた先は……

木星圏の複合企業・「テイワズ」の下部組織にして、運送業を任されてる「タービンス」だ。その彼らの船・「ハンマーヘッド」に回収、保護されている。

そして、後にマルバは身をもつて知ることとなるだろう。彼が手塩に育てた「三番組」に叩きのめされる、と云う事を……

イサリビが飛び去った火星軌道上……

アルダ：「結局……俺は……ここで……」

アルダの命が終わろうとしていたその時。

「空間の歪み」が発生し、その中からグレイズの頭が付いた謎のMSが姿を現した。

ザシュツツツ!!（アルダ：がはツツツ！）

謎のMSのコクピットから伸びた触手に、アルダを突き刺し、吸収した。

更に、「書き替える」ように、体を再構築。

そして、謎のMSのコクピットに、「彼」がこうつぶやいた……

アルダ”だった”男：「クハハハハ…… やつと手に入れたぞ!!  
この「世界」に順応出来る「体」を!!さあて……

蹂躪してやろうか。

その為に、協定を結びに行くか……

『ブルワーズ』に、な……

行こうか……

「ヴァレフオール」!!」

「ヴァレフオール」なる名のMSは、モノアイを光らせ、アルダが乗っていたグレイズを左足でちゃんと蹴飛ばし、左腕のキャノン砲を発射、チリ一つ残さず爆散させ、その場を立ち去った。

C o n t i n u e   t o   n e x t   L O G . . . . .

### 第3話：激突！鉄華団 VS タービンス・前編く衝 突！く

LOG―「侵」：第3話

激突！鉄華団 VS タービンス・前編く衝突！く

Chapter 1：嵐の前の静けさ

タービンス母艦・ハンマーヘッドのブリッジでは……

マルバ：「頼みますよ、名瀬さん！」

名瀬：「アンタの依頼は聞いてやるが…… 着の身着のまま逃げて来た、だなんて、それでも「社長の器」かよ、マルバ？」

と、白のセツトアップスーツに白の帽子を被った色男、タービンスのリーダー：名瀬・タービンが、マルバに詰め寄る。

マルバ：「社長の器」だなんて…… そりやないですよ？」

名瀬：「ヒューマン・デブリの権利書関係は「持つていなかった」のは致し方ない、として…… 手塩に育てたガキ共に会社乗っ取られるわ何やらで、やられ放題だなあ…… 情けないにも程があるぜ。なあ、アミダ」

アミダ：「全くだよ名瀬。「あの時の威勢」は、何処に行ったのかねえ？」

マルバ：「あ、アミダさん…… それだけは勘弁を……」

名瀬：「アミダ、取り合えずその辺にしとけ。ま、そのガキ共とこれから対峙する「みたい」だし。ここは任せときな。テイワズきつての武闘派の底力、しっかり目に焼き付けなよマルバ」

名瀬がそう言うと、マルバはただただ頷くしかなかった。

後に、とんでもない報復を受けるとは知らずに……

一方、イサリビでは……

ダンジ：「きよーかーん、何難しい顔してるんですかあ？  
しかも…… 「三日月さんの」バルバトス眺めて……」



エドワーズ：「ナデイさんや、ヤマギ君も、そんなもってオルガ団長含め、みんな知らないんだよなあー……」「ガンダム・フレーム」の稀少性と、「厄祭戦」について……」

ダンジ：「そんなに珍しいんですか、あのMSは？」

せっせこG-3のメンテをしつつ、向こうでヤマギと雪之丞が話している様子を眺めながら、エドワーズは淡々と話し始める。

エドワーズ：「確かに「この時代」じゃあ、ガンダム・フレーム機は「骨董品」扱いになるくらい、稀少価値が高いんだわ。その価値を上げるに相応しい要因となつたのが「この技術」が投入されてるからだ」

ダンジ：「この技術」って？」

エドワーズ：「MSや艦船、スペースコロニーに必ずと言って良いほど積んである、半永久機関であるエイハブリアクター。ソイツを2基搭載しているだけあって、並列稼働させる事が出来る、かなりスゴい機体なんだわ……」

ダンジ：「え、2基も？1基だけで充分動かせますけど？」

エドワーズ：「ま……まあ、な……（（^|~））厄祭戦後、MSとエイハブリアクターの製造権限は、GHが牛耳ってるようなものだし、火星圏や圏外圏には、MSをイチから作りおこす技術や詳しい資料は、無いらしいんだわ。そりゃナデイさんがアタマ抱える理由、分かるような気がする……昭弘君のグレイズ改あるじゃない？」

ダンジ：「昭弘さんのグレイズが、どうかしましたあ？」

エドワーズ：「あれさあ……リアクター1基だけで、どうにかなんてるんだよねー。火星軌道上で刃重ねたシュヴァルベ・グレイズ同様、リアクター1つで何とかなってるんだわ。今の時代に出回ってるMSの「主流」かな？」

へー、と頷きながらも、推進剤補給を済ませるダンジ。

G-3の整備が終わった。部屋へと戻るエドワーズとダンジ。

ダンジ：「教官、さっき話に出てきた「厄祭戦」って何ですか？」

エドワーズ：「ダンジ君、良い質問だね！」

エドワーズは、頭に埋め込まれた記憶チップのデータを引っ張り出しながら、語り始める。

（イメージBGM：オリジナルサントラ2より「Hashmal：The Legend of the Calamity War」）

エドワーズ：『今から300年前、B. D. 暦100年に勃発した戦争さ。地球圏を皮切りに、月・スペースコロニー・火星圏・そして木星圏をまたにかけて勃発した、世界大戦かな？』

事の発端は、地球圏で開発された無人兵器・MAの暴走から始まり、地球全土に繰り出しては、MAを中心に、MW のモデルとなった、端末機がウヨウヨ暴れまくり、人間を見つけたら躊躇いなく始末する、と云う虐殺し放題、地球人類の4分の1を死に至らしめたらしい。そして宇宙は宇宙で、MAと子機の群れが蹂躪、コロニーや木星圏まで勢力を伸ばしては、地球と同様、大虐殺を繰り広げたんだ。地球圏の地図を見れば分かるように、かつてオーストラリアの首都「だった」シドニーが、跡形もなく消えてしまった。今やシドニー「湾」だぜ……恐らく、MA 20機くらいで、シドニーを沈めたんだろうよ。

そして長期化する戦況と、疲弊する当時の人類。どん底に陥った時、ある技術者の提案で、人類勝利のキツカケとなるモノが産まれた。それこそが……』

ダンジ：「マンマシンインターフェイスシステム、通称「阿頼耶識システム」、そしてMSですよね？」

エドワーズ：「その通り！『MAを倒す為に、人の姿を模した巨大兵器・MSの開発と、それを乗りこなす為のシステムとして、「阿頼耶識」とい、MMIが誕生したワケよ。」

まあ、MAもエイハブリアクター積んでる、とは言えども、ガンダム・フレーム機とは比べ物にならない位の高出力で、且つ「封じる」システム』が、あるとか無いとか、だったかな？確か、えっと……」

凝り固まるエドワーズ。ここでネタグレかと思いきや？

克蘭ク（以降、アレン）：『ガンダム・フレーム機に対しては相性が悪く、MAに近付き過ぎると行動不能になってしまう。ガンダム側のリアクターは高出力状態になる分、パイロットに過度の負荷を与えてしまう為、安全装置が作動してしまう』のだ。「封じる」と言う例え

が相応かも知れんな。『MAの外見が、鳥のような姿から「天使」と比喩されるのに対しMSは、それらを狩る「悪魔」に準えた』ようだ」と、補足説明をしながら克蘭クもとい、アレンと合流した。

エドワーズ：「克蘭、じゃなかった…アレンさん、どうしました？」

アレン：「ビスケット君がお前を探していたぞ？ブリッジに来てくれ、との事だ」

エドワーズ：「分かりました。ダンジ君、行くよ！」

ダンジ：「了解ッ！」

エドワーズとダンジは、急いでブリッジへと向かった。

ブリッジへと急ぐエドワーズ達を見送るアレン背後から、壁にもたれかけ、アレンの様子を伺うエルヴィンが話しかけて来た。

エルヴィン：「アレン、行かなくて良いのか？」

アレン：「うむ、そうだな。エドワーズ達に任せている。年長者は、黙って後ろから見守る立場、だからな」

エルヴィン：「フ…そうだな…」

やり取りを終えるとアレンは部屋へ、エルヴィンは格納庫へと向かった。

## Chapter 2：再開と対峙

ブリッジに到着したエドワーズ。

エドワーズ：「どうした？何があったんだ？」

フミタン：「他船からの停止信号です」

オルガ：「他船？位置は？」

フミタン：「不明です」

ユージン：「GHじゃねえのか？」

ビスケット：「わからない。一体何処から？」

混乱するブリッジ内。その空気を鎮圧するかの如く、エドワーズが指示を出した。

エドワーズ：「皆とにかく落ち着け!!GHだったら停止信号ではなく、向こうから停船命令の広域通信が来る筈だ。「俺らの船を知っている」と云う事は……チャダ君、モニターに映せるかい？」

チャド：「教官、発信先の映像、モニターに映します」

モニターに映し出されたのは……………

「見覚えのある顔触れ」だった。

マルバ：『ガキ共よく！「俺の」船を返せ！』  
ビスケット：「社長!？」

マルバ：『人の』船を好き勝手に乗り回しやがって！』

オルガ：「マルバ・アーケイ？……何でアイツが？」

マルバが何やら喚き散らしているようだ。

マルバ：『この「泥棒ネズミ」共が！「俺のウィル・オー・ザ・ウィ  
 スプ」を今すぐ返せ、って……エドワーズう!? Σ（。Д。）何でお  
 めえがここにいるんだよお? Σ（。Д。）』

溜め息を付いてから、画面越しの父親に向かって反論した。

エドワーズ：「結局アンタが頼つて逃げる場所、と言つたら「やつぱりここだった」とはねえ……相変わらずだな親父、良くも悪くも……な」

オルガ：（（（  
|　ゝ  
）；）（教官、何かキレてねえか？）

ビスケット：（（^ | ^）；）（だろうね。社長が映った瞬間、何かが吹っ切れた」ような危ない臭いが：。）

エドワースの言葉で、凍り付くブリッジ。オルガの後頭部にドデカイ冷や汗が滴り落ちる感覚と、背筋が凍る位の恐怖を感じた。勿論、ユージン・ビスケットも然り。

エドワーズ：『親父の「亡命先」？何か見たことあるような「ブリッ  
ジ模様」なんだよね？て事は……

「まさか」ね……

そんなワケないですよ。そこにいるの分かってますよ。

いい加減ダンマリ決めて、艦長席でふんぞり返ってないで、出てきたらいいじゃないですか？

木星圏に本拠を構えている、複合企業体・ティワズ直参組織にして、独自の運送網を展開している運送部門：「タービンス」の代表……

「木星の白mamushi」こと……名瀬・タービン代表!」

(イメージBGM: オリジナルサントラより「Teiwa z (Accordion Ver.)」)

驚愕する鉄華団一同とクーデリア。特にビスケットは絶句しつつ、開いた口が塞がらぬ表情に。

ビスケット:「教官、いま「テイワズ」って言いましたよね?あの「テイワズ」ですよ?」

エドワーズ:「ああ、言ったよ。( ? ▽ ? )」「仁侠的な二オイが充滿する」木星圏の「勝ち組」組織ね♪ ( ? ▽ ? )」

更にドン引く一同。その一言を聞いた時点で誰しも思った事だろう。

「教官、何度も言うがいい加減に「止まって」くれ」と。

そんな事など気にも止めず、モニター越しの「白mamushi」が返答する。

名瀬:「……ハハッ!俺の「臭い」を引き当てるとは……流石

「煉獄帰りの軍神」、マルバの息子だ。息子と話したいからちよつとどいとけ。その代わり……女共に手エ出したら、承知しねえからな……」

マルバ:「あ、ああ、スイマセン……アイツらを上手く説得させてやって下さいね……」

マルバが名瀬にお願いし、立ち去った後、名瀬が映し出された。

(イメージBGM: オリジナルサントラより「Brainstorming」)

名瀬:「これはこれはエドワーズ君、久しぶりだねえ。つい先日あつたくらいかな?」

エドワーズ:「ご無沙汰です、名瀬代表。どうしたんですか?親父が……マルバ・アーケイがあなたの方の船:「ハンマーヘッド」に乗船されている」じゃないですか。コレは、何の冗談ですか?」

名瀬:「冗談も何も……キミも知つての通り、一緒に仕事した事が

あつてさあ……』

エドワーズ：「その節は、親父共々お世話になりました。お礼をしたかったのですが……」

名瀬：『律儀過ぎるなー、キミは。どこまで話したつけ……あ、そうそう！たまたま火星に立ち寄る用事があつて、久々にマルバに会ったら……えっらいボロボロになって、それで「GHと揉めて困ってるから、助けてやって欲しい！」と泣きついて来た訳だわ』

エドワーズ：「成程……話の筋と、親父が考えている事が分かりました。つまりこう言う事ですよね、名瀬代表？」

火星以来の「口撃」が始まった。

エドワーズ：『親父が名瀬代表に助けを求めた』すなわち……「アイワズに保護して貰う」と云う事。あのGHでさえも、介入出来ない位の技術力を保有している上に、独自でMS持ってますからねえ』

オルガ：「マジかよ!?Σ（。D）」

エドワーズ：『まさか親父がこんなこと言つてませんでしたか？

「CGSの所有財産等を、全部タービンスで預かつてほしい」つて云う事を』

名瀬：『あー、「手助けの駄賃」として何とか、とマルバが言つてたわ。それで調べてみたら、CGSは廃業、全資産は「鉄華団」とかいうのに委譲されているようじゃねえか。こりやたまげたわ。一通り見させて貰ったが……手続きも手馴れたモンだし、書面上に不備もなく成立してるし、抜け漏れも無い。ソコはイイんだけどねえ……』

エドワーズ：『要するに……親父に代わつて鉄華団が持つてるものを全て返すように要求。言い方を変えれば「取り上げに来た」と云う認識として、掟えていいんですね?』

名瀬：『察しが早いねえ、エドワーズ君。火星での彼らの戦闘、見させてもらったよ。ガキにしちやあ大したもんだし、勿論お前さんもな。資産の返還に快く応じてくれれば、悪いようにはしねえし、うちの「傘下」で真つ当な仕事を紹介してやる。命を張る必要のねえ、真つ当な仕事幹旋してやるから……さ?』

エドワーズ：「評価して戴き誠に光栄ですが……我々鉄華団に

は、大事な案件を遂行してしまして……」

名瀬：『クーデリア・藍那・バーンスタイン：「革命の乙女」の護送」の件ね。ああ、この件は複雑でな、「マルバの資産」名義になってるけど？』

オルガ：「資産」？どういう意味だ!？」

エドワーズ：「オルガ団長、ここは落ち着け。取り乱してすみません、名瀬代表。何故にクーデリア嬢を？」

確かに「CGS」として受けた依頼として、正式に引き受けたんですが…… そちらに保護して貰っている「クソ」親父がトンスラかましたせいで、引き受けざるを得ない事になりました…… 何か抜け漏れとかありましたか？ざっと目を通されたかと思われませんが、何か不服な点ありますか？これだと話が拗れそうなので、自分がそちらに行きますので、対応お願いしますね」

名瀬：『あ、ああ…… 考えておくが、その前にマクマードの親父にも確認しねえとなあ……』

エドワーズがブリッジを去ろうとすると……

オルガ：「教官、どこへ？」

エドワーズ：「最悪の事態」も有り得るから…… 団長、対応は「冷静に、且つ慎重に」な」

意味深なアドバイスをオルガに告げた後、エドワーズはブリッジを去り、格納庫へと向かった。

格納庫へと向かう道中、立ちすくむエルヴィンとすれ違う。

エルヴィン：「エドワーズ、どうやら「交渉」は「決裂」したようだ。一戦交える事となったぞ。名瀬・タービンとやらが、こう言っていたぞ。」

「生意気の代償、高く着くぞ。」とな……」

エドワーズ：「やっぱり…… な。」

エルヴィン：「分かっていたのか？」

エドワーズ：「まあ、な。オルガ団長の事だから…… 彼には彼なりの「信念」と「筋」は持っているからね…… でもそれが…… 時として裏目に出ってしまう場合があるんだよなあ…… そして、三番組時代

の「落とし前」、清算する意味合いもあるからな……ダニエル、お前も出るのか？」

エルヴィン：「戦力は多い方がいい。俺も出よう」

エドワーズ：「助かるぜ……何せ相手はテイワズの「看板」背負ってるんだ。GHとは違うニオイすらしてならないからな……」

その頃、鉄華団・タービンス双方に動きが。

タービンスの船、ハンマーヘッドでは……

名瀬：「悪いアミダ、こうなっちまった」(´；；´)

アミダ：「ヤンチャする子供を叱ってやるのは大人の役目だよ」

名瀬：「ほおんと、イイ女だよ、お前は。欲を云えばさあ、エドワーズ君とナシつけたかったのになあ……」

アミダ：「マルバの息子にホレてんのかい、名瀬？ま、今はどうでもいいけど……」

名瀬：「ど、「どうでもいいけど」って……f(´へ´;)」

アミダ：「ラフタにノーマルスーツを着るように伝えな！」

エーコ：「はい！姐さん！」

アミダ：「総員戦闘準備だ！全員持ち場に付きな！アジー、あたしと出て貰うよ！」

アジー：「はい。いつでも」

名瀬：「あ、そうそう。「固有周波数にヒットしない謎のMS」もいるみたいだから……気を付けなよ」

アミダ：「分かってるって、名瀬。適当にあしらっておくよ」

名瀬：「楽しんで」来なよアミダ。火遊びは……程々にな(\*?▽?)ノ」

そして、イサリビでは……

ビスケット：「慎重に」って言ったじゃないか！交渉の余地はあった筈だ！さっき、教官に言われたばかりなのに……」

オルガ：「分かっているけどな……通すと決めた「筋」は曲げられねえよ」



諦めたのか、観念したか定かではないが、ふう、と溜め息をつくビスケツト。

オルガ：「敵艦にケツを取られちゃいるが、鉄華団の力を見せ付けるには、むしろ好都合だよな… お前ら！」

ユージン：「あたりめえだろ！」

シノ：「おう！目にも物を見せてやろうぜ！」

オルガ：「テイワズとの渡りをつける千載一隅のこのチャンス、ものにするぞ！」

いきり立つユージンとシノ。

チャド：「エイハブウェーブの反応、確認！敵艦、加速して距離を詰めて来る！」

オルガ：「よし、ブリッジ収納！速度は維持して180度回頭！砲撃戦に備えろ！」

チャド：「了解、ブリッジ収納!!」

オルガが指示を出すと、チャドが指示通りにブリッジ収納シークエンスを行った。

艦内放送（フミタン）：「これより本艦は、戦闘状態に突入します。艦内重力を解除。総員、120秒後の回頭に備えて下さい」

オルガ：「昭弘、出てくれるか？」

昭弘：『ああ！任せろ！』

オルガ：「ミカアツ！」

三日月：「勿論！（クーデリア、そこ）邪魔」

クーデリア：「あつ、ごめんなさい。」

クーデリアを交わしながら、三日月は格納庫へ。

オルガ：「頼むぜえ！（そんでもって…）シノも準備してくれ！」

シノ：「おうよ！待ってました！」

張り切るシノ。そしてユージンも……

ユージン：「俺も行くぜ！」

オルガ：「いや、ユージンは「残って」くれ」

ユージン：「はあ？（何言い出すんだよオルガ。俺も行きかけたのに……）」

オルガ：「船を任せたい」んだよ。ここを頼めるのはお前しかない」

照れくさそうな表情でオルガに返答するユージン。

ユージン：「お、おう……仕方ねえな（「貸し借り無し」な、オルガ）」  
フミタンが、クーデリアに駆け寄るように近付く。

フミタン：「お嬢様は、中枢ブロックに避難を。お手伝いしますの  
で、まずはノーマルスーツを……」

遮るように、クーデリアがつぶやく。

クーデリア：「ここにいては……邪魔になりますね？……いえ、  
一人で大丈夫。フミタンは皆さんの力になってあげて下さい。」

フミタン：「お嬢様がそう仰るのなら……では、お嬢様もお氣を  
つけて」

淡々と返すフミタン。祈るように目を瞑り、デッキを立ち去るクー  
デリア。

オルガ：「悪かったなビスケット」

ビスケット：「もう退けないんだろ？」

オルガ：「ああ、だから力を貸してくれ」

ビスケット：「分かってる」

「二度決めた事は、何としてでもやり通す」と云うオルガの「筋」を理  
解しているビスケットにとって、最早手に取るように分かっていた。  
参謀として、そしてオルガの、鉄華団の良心として……

時同じく、エドワーズの部屋では……

アレン：「方位180度、距離6200から3100まで詰め寄った  
とは、相対速度の一致とは……手慣れた詰め方だな」

ダンジ：「アレンさん、そこで感心しないで下さいよお……（――）」

エドワーズ：「アレンさん、ダンジ君。頼まれて欲しいんだが……」

ダンジ：「何ですか、教官？」

エドワーズ：「二人とも、ノーマルスーツ着て貰って、MWでイサリ  
ビの護衛任せてもらいたいね！」

アレン：「まさか……一戦交えらなくても言うのか？GHでも迂闊に

手を出す事すら出来なかったティワズ、とやらに?」

一呼吸置いて、アレンの問いに答えるエドワーズ。

エドワーズ：「ああ、どうやらそのつもりらしいです。取り合えず「ブリーフィング」しますか。ダンジ君、俺のタブレット持ってきてくれる?」

(イメージBGM：真・三國無双4サントラより「Intelligent Boys」)

エドワーズにタブレットを渡すダンジ。タブレットを起動、ブリーフィング画面を開き、3Dで状況が映し出された。

エドワーズ：「きてきて……これが今の状況。俺たちの船・イサリビは180度回頭し、タービンスの船・ハンマーヘッドと相對する形となろうとしているね?」

ダンジ：「そう言えば、艦内放送で言ってますね」

エドワーズ：「まずは敵の戦力。保有MSは……つと! (ハンマーヘッドの立体ホログラフィーをタップすると、「保有MS」の情報ページにアクセス。) おいおい冗談だろ? 「今の俺たち」の状況では、難しい相手みたいだ……」

頭を抱えるエドワーズ。「今の鉄華団」の錬度、頭数では困難を極める位である事が明白であった。画面を見て驚くアレン。

アレン：「何だ、この圧倒的な戦力差は?」

エドワーズ：「気付きましたか、アレンさん。俺も正直驚きました……これが、タービンスの「戦力」です。

MSは5。指揮官1に対して一般が3、そして哨戒が1かあ……どれどれ? (機体情報の詳細をタップ。)

哨戒機が……STH-14s……通称「百里」か。高機動型で足が速いやつ……シュヴァルベと渡り合える位、かな?

そんでもって……STH-05：通称「百鍊」、ティワズで運用されている汎用型の主力MSか。成程、流石のGHも圏外圏に手が出せないのは、このMSの存在あればこそ、だな」

画面を見ながら頷くエドワーズ。その横でフリーズするダンジ。全然ついていけない状態だが、ダンジが質問してみた。

ダンジ：「教官、その下に出ている「STH—05／AC」って、さっきの「百鍊」とか言うMSと、同じ型番みたいですけど？」

エドワーズ：「良く気付いたねダンジ君…… って、オイッツ！百鍊の型番の横に「／AC」だとオツ？」

その百鍊…… ソイツ手強い相手だぞ、「今の鍊度」ではな。GH以上に手強いヤツだ。」

（イメージBGM：真・三國無双4サントラより「Smileless」）

青ざめた表情と化したエドワーズ。型番から見て彼は「理解」していた。それを察したかのように、アレンが問い掛ける。

アレン：「まさかエドワーズ、「異名持ち」か？」

イヤな汗を流しながら、エドワーズが答えた。

エドワーズ：「そうなんです…… 「／AC」の「A」で、且つ「テイワズ」と云えば…… 真っ先に思い浮かぶのは、この「異名」なんですよ。」

「真紅の蛇姫」こと…… アミダ・アルカ!!」

ダンジ：「えーっ?（ここで「異名持ち」キターorz）」

アレン：「蛇姫」だど? 木星圏にもエースパイロットがいるとでも?」

エドワーズ：「ええ、そうですよアレンさん。火星圏にこのような狂歌があるんです。」

「テイワズに 過ぎたる物は 二つあり 仁侠カタギと 真紅の蛇姫」と。

まさか、あの音に聞く「蛇姫」と一戦交える日が来るとはな…… 今日は何てイイ日だ!（?▽?）」

ニヤニヤ笑い出したエドワーズ。当然の事ながら、それを察したダンジ。

ダンジ：「きょーかん？まーた何か企んでませんか？タービンスに  
対しても……」「ビームサーベル」抜くわけ…… 無いですよねえ  
？（ー；）」

エドワーズ：「どうだか？さっきブリッジでさ、親父と名瀬代表と話  
してたし、あの時の戦い、誉めてみたいだぞ？」

「ガキ共にしちやあ、大したものだ」ってね。ブリーフィングは一旦切  
り上げて、俺たちも行きますか！」

ダンジ：「適当に切り上げて…… 教官？大丈夫ですか？」

アレン：「不安しかないが…… 大丈夫か？」

エドワーズ：「大丈夫デスヨ。ソコハナントカスルンデー（？▽  
？）」

そう云うと、ダンジの「心のリミッター」が外れ、心の中でこう思っ  
たかもしれない。

「教官、絶対ビームサーベル抜くだろう」と。

イサリビ、速度を維持して180度回頭。ハンマーヘッドと対峙。  
鉄華団対タービンスの戦いの幕が、切って落とされた。

### Chapter 3：開戦!!

タービンスサイド・ハンマーヘッド格納庫。

アジー：「姐さん、先に行かせてもらいます」

アミダ：『ああ』

青い百鍊が、カタパルトに下降され、出撃態勢に。

アジー：「アジー・グルミン、行きます！」

（イメージBGM：オリジナルサントラ1より「Different  
Definition」）

ジジジ、と言う摩擦音を響かせ、アジーを載せた百鍊が射出された。  
ハンマーヘッド整備員：『次ィ、姐さんの百鍊、下ろすよオオッ！』  
エーコ：『姐さん、敵の船ですが、速度を落とさずに180度回頭し  
てきました〜』

アミダ：「教科書通り」、速度は殺さず、艦首だけをうちに向けてき

たか…… 先ずは「合格点」だよ」

ハンマーヘッドオペレーター：『カタパルト準備完了。出撃どうぞ！』

アミダ：「アミダ・アルカ、百鍊、出るよ！」

アミダの赤い百鍊が出撃した後に、青い百鍊がもう2機出撃した。

対する鉄華団、イサリビでは……

雪之丞：「すまんねえ三日月。結局、リアクターは調整不足のままだ。「こんな状態」でおめえを出したかねえんだが……」

三日月：「まあ、動くんなら何とかするさ」

雪之丞：「（動くんなら何とかする」ってオイ、無謀な事言うじやねえかよorz）寝覚めがわりイから、死ぬなよ」

三日月：「おやつさんより長生きする「つもり」」

雪之丞：「調子良いこと言いやがってえ。じゃあ、気いつけてな。（バルバトスハッチ閉まる。）おーい！昭弘のグレイズが出次第、バルバトスも出すぞお!!」

整備班員：『うーすッ!』

バルバトスの起動シークエンスに入る三日月。

三日月：「うっ!?…… リアクターだけじゃなく、各モーターに変な負荷が掛かってる。ま、やれるだけやるさ」

ブリッジから通信が入る。

フミタン：『目標より、MSの出撃を確認。数は4です』

三日月：「わかった…… おやつさん！」

雪之丞：「よオし！バルバトスを下ろすぞ！下あ気いつけろよ!!」  
射出カタパルトに移動するバルバトス。

フミタン：『Aロック作動。カタパルト、ハッチ開放します。カタパルト…… スタンバイ。いつでもどうぞ』

三日月：「んじゃあバルバトス…… 三日月・オーガス、出るよ！」  
バルバトス射出。

後部にマウントされた滑腔砲を展開、先に出た昭弘のもとへと向か

う。

次は……

雪之丞：『次は…… おめえさんか…… 推進剤だけで大丈夫なのか？』

エルヴィン：「心配はない。「デュアルドライブ」ゆえ、もしエイハブリアクターがダメになっても、「コイツ」は動けるから、大丈夫だ」  
雪之丞：『へ？「でゆあるどらいぶ」うう？何じゃそら？（ー！）』

エルヴィン：「エルピス、相手はどう来てる？」

エルピス：「MSが4機出撃された模様。しかし、敵艦船よりMS反応2機確認。うち1機は正体不明です」

エルヴィン：「切り札」か、それとも…… 雪之丞さん、お願いします！離れるように指示を！」

雪之丞：『わあつたよ。』次い!!「フェニクス」下ろすぞ！吹っ飛ばされねえよう、一旦離れろお!!」

エルピス：「フロアハッチ展開を確認。一旦ホバリングします」

機体が一時的に浮き、カタパルトアームに固定されるゼロ炎。

エルピス：「シューター固定完了、カタパルトへ移動開始。フロアハッチ閉鎖。カタパルト移動完了。Aロック解除、射出カタパルト並びにハッチ展開を確認。電磁レールテンション最大、射出権限の認可、確認しました。「You have CONTROL」です、ご主人様」

エルヴィン：「よし、「I have CONTROL!!」ダニエル・グレン・エルヴィン、フェニクス、行かせてもらうッ！」

エルピス：「ウイングガンダムゼロ炎、テイク・オフ」

ネオバードモードのまま、ゼロ炎は射出。そして……

エドワーズ：「バズーカ砲あったから、取り合えず積んでみた。相手はタービンの精鋭。生きて帰れる補償は…… どうだかな？」

雪之丞：『出撃前に、不安そうな愚痴こぼしてどうする？ま、三日月を前線で黙らせる事出来るの、おめえさんしかいねえからなあ……』  
やれやれ、と云う表情を見せながら雪之丞が離れていく。

エドワーズ：「ハイパーバズーカ」中々使えそうな気がするなコレ

(?▽?) さてさて…… ダンジ君にアレンさん、準備は出来たかい？」

ダンジ：『教官。既にイサリビ上部で待機してますよ』

アレン：『何時でも行けるぞ！』

エドワーズ：「これで「最終防衛ライン」完成、と。後は俺だけか…… ナデイさん!! G-3を!!」

雪之丞：『帰って来いよ！』 最後オオツ、G-3下ろすぞお！下あ  
気い付けろよ!!」

射出カタパルトに下ろされるG-3。

フミタン：『射出タイミング、G-3へ委譲します、何時でもどうぞ』  
エドワーズ：「エドワーズ・アーケイ…… G-3、行きます！」

G-3 射出。三日月達の元へ合流する。

昭弘：『あ……』

三日月：『お待たせ』

昭弘：『カツ…… 待っちゃいねえよ』

三日月：『「赤い鳥の人」と、教官も出るんだ』

エルヴィン：『戦力は、多い方に越したことはないだろう…… 「軍神」サマのお出ました』

エドワーズ：「これで全員だな。相手はかなりの手練れ。火星軌道上でやりあったGH以上に強えからな。三日月君に昭弘君、決して深追いと無茶はするんじゃないぞ。特に「赤いMS」には気を付けろよ」

三日月：『何かわかんないけど…… 気を付けてみる』

昭弘：『了解！』

エルヴィン：「エルピス、敵の様子は？」

エルピス：「ご主人様、まもなく会敵します」

エルヴィン：『そろそろ来るぞ、エドワーズ』

三日月：『あれか……』

エドワーズ：「さあて…… 「叩き」ますか！」

一方、タービンスサイドは……

アミダ：「アジ、船の射線に入るんじゃないよ」



アジー：『ラジャー』

アミダ：「アンタ達「にも」言ってるんだから、気を付けなよ」  
タービンズ一般兵：『はい！姐さん！』

アミダ：「さあ……「躰の時間」だ。坊やたち……」

ハンマーヘッド、イサリビ双方からの砲撃を合図に、開戦。

イサリビ甲板上部で構えているMWでは……

アレン：「始まった」…ようだな？」

ダンジ：「そう、ですね。ぼくたちも、ウカウカしてられませんよね  
！（ピーピー）MS反応キヤッチ。アレンさん、砲撃を」

アレン：「分かっている。ダンジ君はMWの操縦に集中してくれ。  
阿頼耶識持ちのキミが頼りだからな！」

ダンジ：「了解。アレンさん、酔わないようにしてくださいね!!」

Chapter 4：挫く戦意

（イメージBGM：「真・三國無双4」より「合肥—GREAT RE  
D SPIRIT—」

開戦してから数時間経過。ハンマーヘッドからの砲撃を受け、防戦  
必死のイサリビ。

ユージン：「ちつとは回避できねえのか!」

ビスケット：「下手に舵を切れば、距離を詰められて、対艦ナーム  
弾の射程に捕まる!」

ユージン：「くっ……（何か良い対抗策は……）」

フミタン：「ミサイル接近」

ハンマーヘッドからのミサイルを撃ち落とす。ブリッジで焦る  
ユージン。オルガに「船を任せる」と頼まれた以上、無下にする訳に  
はいかない。

ミサイルを撃ち落としても、対艦砲撃の雨は止まない。

イサリビクルー全体に、被弾の衝撃が伝わる。

イサリビクルー：「ぐっ!!」

ビスケット：「あれを続けてもらえば、ナノラミネートアーマーでも  
溶解するんだ！今は迎撃可能な距離を維持して！」

再び被弾。

チャド：「このままでもマズイって！」  
時同じく……

アレンの精密射撃、ダンジの絶妙なMW捌きで、ハンマーヘッドの砲撃を撃ち落とし、何とかイサリビを守り切っていた。

ダンジ：「対艦ナパーム？アレンさん、撃ち落とせますか？」

アレン：「造作もない。ダンジ君、捕捉出来ているのか？」

ダンジ：「大丈夫ですよ」

生身の人間のように、フレキシブルに動き、砲撃を撃ち落とし、守りに専念するダンジとアレン。

ホバリングし、ハンマーヘッドからの砲撃を交わしつつ撃ち返すという、ヒットアンドアウェイの戦法を取り、防戦必死の状況。

ダンジ：教官から任されたミッション、しつかり果たしてみせるツ  
！」

MWのアクセルに、いつも以上に力が入るダンジ。そして、的確に撃ち返すアレンの射撃の腕。互いのスキルが混じり合い、見事なまでの連携でイサリビを防いでいる。

アレン：「ダンジ君、再びミサイル接近」

ダンジ：「了解ッ！間に合え!!」

阿頼耶識もとい、MMIと直結されているダンジには、状況が手に取るように把握している。まさに人機一体。

タービンズサイドは……

エーコ：「敵艦、進路維持！」

ビルト：「意外と胆が据わってるんだあ……」

戦況をモニタリングしながら、納得するエーコとビルト。

その状況を聞き、艦長席でふんぞり返る名瀬が指示を出す。

名瀬：「長引きそう」なのかあ？なら、ラフタに出てきてもらったらどうかあ？」

エーコ：「了解♪」

MS サイドは……

エルピス：「ご主人様、敵機2機接近。恐らく先発かと……」

エルヴィン：「ようやくお出ましか……「性能の違い」とやら、見せてやるか」

ゼロ炎、百鍊に対し威嚇射撃のファーストインパクトを仕掛ける。分散して回避。

百鍊パイロットA：『何なの？あの機体。「百里」より足が速いようだけど？』

百鍊パイロットB：『とにかく、撃ち落とすよ！』

ゼロ炎に向かって、ライフル掃射。銃弾の雨の中をひらりと交わし、百鍊らの「大上段」まで上昇。「彼女ら」の頭上でMS形態に変型、そして……

ダンツツ!!

百鍊パイロット：『ぐあっ!!?』

ハイパーカレドヴルツフ二刀流で、百鍊を退けたではないか！

百鍊パイロットA：『うちの銃撃をかわし、更には死角からの奇襲。何なの、あのMS?』

百鍊パイロットB：『「武闘派のタービンス」が……こんな見ず知らずの赤い鳥のヤツに遅れを取るワケには……（ダアアン!）あがアアツ!』

ゼロ炎の左の肘鉄を右腕に喰らい、ライフルカノンを弾き飛ばされつつのけ反る百鍊。もう1機の方は、「がら空き」の背中目掛けて、輪胴式グレネードランチャーを発射。

百鍊パイロットA：『よくもウチらの仲間をオオツ、墜ちろオオツ!』

アラートが鳴るゼロ炎のコクピット。

エルピス：「ご主人様、背後から狙撃されてます!」

エルヴィン：「間に合うかツツ?エルピス、苦肉の策だ。ブースター逆噴射で焼き払う!」

エルピス：「了解。ブースターユニット、左右に展開。ブースター、逆噴射!」

グレネードの流れ弾を、逆噴射されたブースターの火力で消滅。狙

撃してきた百鍊の視界を奪った。

百鍊パイロットB：『ちいッ！視界がツツ!?』

爆風の煽りを受け、機体周辺の視界を奪われ、見失ってしまった。

百鍊パイロットB：『どこ消えたんだ、あの赤いMSは…?』

ピーピーピー！

警告音が鳴った次の瞬間！

ガアンッ！

百鍊パイロットB：「ぐあアッ！」

弾幕の中で「鳥の姿」に変形し体当たりを仕掛け、突き飛ばしながら飛び去って行き再度変形。「彼女ら」を見下ろす赤いMS。後ろに懸架されている片刃式ブレードに右手を添えている事を悟られぬよう身構えているが……

エルヴィン：『アンタらには、私を斬ることも、ましてや、「油断を装っての袋叩きにする」事も……お見通しだ。抵抗しても無駄だ。アンタら、いや……「貴女たち」の刃から……純粹なまでの戦意すらも感じられない。甘すぎる、それでも貴女たちは「戦士のつもり」か?』

百鍊パイロットA：「同情のつもりか?」

百鍊パイロットB：「舐めた真似を!!」

赤いMSは、徐に両翼に備え付けられた「ライフル」を両手に握り、銃口を向ける。

エルヴィン：『これは「警告」だ。貴女たちのような……純粹無垢で、可憐な乙女たちが「立ち入る」ような場所ではない。それでも抗うのなら……宇宙のチリとなつて貰おうか?』

凍り付く百鍊のコクピット。貴女たちは後で気付く事となるが、「経験した事の無い位の身の危険」を体感していた、と云う事を。

百鍊パイロットA：「ねえ……こちら、どうなってるの?」

百鍊パイロットB：「追い立ててるつもりが逆に……「睨まれてる」ようで……こわいよおおッ(´；ω；´)」

百鍊パイロットA：「泣いてどうする?ウチだつてえ、えぐ……う

「ちっだっ　でこわいよおっ！（TOT）」

百鍊パイロット『だずげで、だぁありいいん！○(T□T)○○(T□T)○』

そして……

エルピス：「ご主人様、敵機体双方より「降伏信号」を受信。戦意を喪失された模様。宜しいのでしょうか？」

エルヴィン：「ああ……彼女達の戦意を砕くには、この位の事をしなければ……」「力無きモノが搾取される」こんな時代、子供達は愚か、まさか女達も駆り出されるとはな……

あの「女狐」め、この世界で何をしようかと？」

悲壮感漂うゼロ炎のコクピット内。エルヴィンは、敢えて戦う乙女たちの戦意を挫き、「二度と戦わないように」と云う願いを込めながら、彼女たちを見守っていた。

Chapter 5：急襲、そして衝突！

ユージン：「何の光だ？」

艦橋モニターを観て、状況を確認するユージン。

しかし、時既に遅し。

ビスケット：「上」だッッ！」

ハンマーヘッドから出撃した哨戒機：百里が奇襲を仕掛けて来た。

ラフタ：「まあだ爪乾いてなかったのに……」

足をばたつかせながら愚痴をこぼすラフタ。彼女が駆る百里がイサリビ周辺を飛び交う。

ユージン：「別のMS!? 対空砲とMW　じゃ追い付かねえぞ！」

アレン：『ブリッジ聞こえるか！足の早いMSが1機、こっちに急襲してきた。俺とダンジだけでは持ちこたえられん！前線に出ているのを誰かしら下げた方が良いで。』

ビスケット：「アレンさん、申し訳ないです……アドモスさん、前線に出ている三日月たちに連絡取って下さい！MS　を戻さないと

やられる！」

ビスケットの指示を聞き、フミタンは直ちに前線に展開している4人に指示を送った。

前線では……？

滑腔砲を放つバルバトス。

三日月：「もう1機いたのか？」

がら空きである事を気付いたアミダ。アサルトライフルを乱射する。

アミダ：「余所見ッツ！」

エドワーズ：『余所見してんのは、何処のお姫さまだい？逆にがら空きなんだよおツツ！』

ズガアン！ズガアン！

灰色のMS が放ったバズーカ砲（G-3のハイパーバズーカ）を2発喰らい、のけ反るピンクの百鍊。そのコクピットの中、アミダがモニターで状況を確認する。

アミダ：「ちいいッツ……あの灰色のMSが、さつき名瀬が言つた……アジー、気を付けな。あの灰色のヤツは、アタシがやる！」

アジー：『姐さん、先行したステイシー・シアンビーの双子が、謎の赤いMS にやられた模様。戦意喪失しています。』

アミダ：「うちの斬り込み役をそこまで追い詰めるとは……中々出来るヤツがいるんじゃないのかい？」

関心するアミダ。

エドワーズ：「あの赤いMS ……「蛇姫」は俺がやる。三日月君と

明弘君は、一旦イサリビに下がって防衛を頼む！」

明弘：『了解』

三日月：『わかった』

エドワーズの指示で、イサリビの防衛の為に二人を下げた。

モニター越しのG-3と対峙しながら、アジーに指示を出す。アサルトライフルを左に持ち換え、片刃式ブレードを抜刀する。

アミダ：「つれない真似をするじゃない？アンタ一人でこの「蛇姫」

の相手が出来るか？アジー、逃げたヤツらを追いつつ、ラフタのカバーに入りな」

アジー：『ラジャー』

アミダ：「名瀬、聞こえる？アジーだけじゃ心許ないし、斬り込み役が心へし折られて戦意喪失状態。増援寄越してほしいけど、大丈夫かい？」

名瀬：『アミダがそう言うんだったら…… 良いぜ。イける子たち何人か向かわせるよ。双子も回収しとくから、安心しな』

（イメーじBGM： Wings／山本彩）

アミダ：「助かるよ、名瀬。さあて…… アタシを楽しませてくれるかい、「軍神」さん？」

逆手持ちのブレードを真横に構え、G―3に躍りかかるアミダの百錬。

エドワーズ：「来い！」

シールドを前に構え、防御姿勢を取るG―3。

エドワーズ：「さあ来い、蛇姫。「燻製」にしてくれるわ！」

アミダ：「煉獄帰りの軍神」の異名が本当なのかどうか…… 見定めてやるよ！」

To be continue the next LO  
G……

## 第4話： 激突！鉄華団 VS タービンス・中編（劣勢）

LOG―「侵」第4話

Chapter―6：イサリビ防衛：仕込み

（イメージBGM：「真・三國無双4」より「合肥―GREAT RE  
D SPIRIT―」）

エドワーズ：「さあ来い、蛇姫。「燻製」にしてくれるわ！」

ハイパーバズーカを構えるG―3。

アミダ：「煉獄帰りの軍神」の異名が本当なのかどうか…… 見定  
めてやるよ！」

右に片刃式ブレード・左にアサルトライフルを構え、躍りかかる赤  
い百鍊。

一騎討ちが始まる！

G―3、ハイパーバズーカ発射。砲撃の雨をすり抜けながら間合い  
を狭め、更にアサルトライフルで撃ち返す赤い百鍊。

アミダ：「どこ狙ってんだい？当ててるつもりなのかい？」

バズーカの弾を撃ち落としながら接近、そして…

アミダ：「でええいッッ！」

ガアンッッ！

エドワーズ：「ぐうッッ!?」

右手で持っていたハイパーバズーカを弾かれ後退。弾かれた反動  
で爆発四散。

エドワーズ：「バズーカがッッ… ならこれでッッ！」

すかさず、ランドセルに備え付けておいたバトルアックスに持ちか  
える。

エドワーズ：「はああッッ！」

百鍊に向かって仕掛けるG―3。G―3に向かってライフルを放  
つ。銃弾の雨をシールドで防ぎながら詰め寄る。

アミダ：「中々タフなようだねえ。さっさと墜ちて、ぐっ!?何処から



？」

流れ弾を受け、のけ反る百鍊。センサーを確認するアミダ。映されたのは……

アミダ：「なんだい、あの「赤い鳥」は？」

エルヴィン：『エドワーズ！助けに来たぞ！』

エドワーズ：「おいおい、せつかくイイ所だったのにorz……」

エルヴィンのゼロ炎が助太刀に来た。

第4話：

激突！鉄華団 VS タービンス・中編

（劣勢）

エルヴィン：『先見隊のMSは、適当にあしらっておいた。どうする？』

エドワーズ：「俺は良いから兎に角イサリビの防衛に、三日月君と明弘君のフォロー頼むわ」

エルヴィン：『分かった、そうさせて貰う。』エルピス、イサリビの状況は？」

エドワーズに託し、イサリビの方向へ飛び去るゼロ炎。

そのコンソール上では戦況が映し出され、エルピスが淡々とガイドを始める。

エルピス：「今現在イサリビは、奇襲に遭われている模様。バルバトス・グレイズ改の両機は、防衛の為後退を開始。（ピーピー）タービンス艦・ハンマーヘッドより増援出撃を確認。数は3。2機は百鍊。もう1機は……」

解析を急ぐエルピス。

エルヴィン：「どうした、エルピス？まさか!？」

コンソールを眺めるエルヴィン。そこに表示された型式番号・機体データを観た瞬間、絶句した。

エルピス：「もう1機のMSは…… 「エヴァンス様が解き放った駒」の一つ、異世界から呼び寄せたMSです」

エルヴィン：「何、だど？機体名は？」

エルピス：「機体型式番号：XXXG-01W。通称：ウイングガン

ダムです」

エルヴィン：「ウイング、ガンダム」だと？」

（イメージBGM：新機動戦記ガンダムW OP「JUST COMMUNICATION/TWO-MIX」、と行きたい所だが、佐咲紗花Ver. を推奨、フルで流します。）

モニターの先に映ったのは……

濃い青と白の機体色に、赤・白・黄色のトリコロールカラーで彩られた、二枚羽根を持つ、鉄の鳥の如きMSだった……

一時を遡る事半刻前、タービンス母艦：ハンマーヘッド。

アミダ：『名瀬、聞こえる？アジーだけじゃ心許ないし、斬り込み役が心へし折られて戦意喪失状態。増援寄越してほしいけど、大丈夫かい？』

名瀬：「アミダがそう言うんだったら…… 良いぜ。イける子たち何人か向かわせるよ。双子も回収しとくから、安心しな」

アミダ：『助かるよ、名瀬』

矢継ぎ早に指示を出す名瀬。

名瀬：「エーコ、ビルト、出撃可能（イケそう）なコたち適当に募っておいてくれない？」

エーコ：「らじや、適当に募るときまゝす（\*?▽?）ノ」

出撃要請のメールを、ハンマーヘッド各定点に着いている「百錬操縦可能メンバー」に送信し始めた。

そんな中、マルバの背後に「ある気配」を感じた。

マルバ：「な、名瀬さん？」指南役の先生が、お話しがしたい、と仰ってますが……」

流石のマルバも、血相を変えて話す位だ。何しろタービンス御抱えの「戦術指南役」だ。

名瀬：「マルバ、何か言いたげだから、通してやんな」

はい、とマルバが返事をして、ブリッジのドアが開くと同時に、「指南役の先生」なる男が入室。

???：「入るよ、タービンの旦那。ぶちわやな事になっとるみたいだ

のお。「武闘派」の名前で知れ渡つとるあんたたちタービンズが、見知らんひとらに負けて、どうする？ 稽古付けちゃった事を無駄にしてえ、どうするん？」

中国系の拳法家のように出で立ちの武官が、マルバを軽く突き飛ばし、血相を変えてズカズカと入ってきた。

名瀬：「すいませんねえ、ヤン」先生。ウチの斬り込み役の双子が……先生が手塩にかけて育てたお弟子さんが、いとも簡単に戦意喪失、心をバツキバキにへし折られたようでしてねエ……ちようど困つてた所だつたんですよ」（、、；）「」

名瀬が”先生”と呼んで、一目置いている武官。

「GH木星支部から「出向」と云う形で、タービンズの戦術指南役を務めているエースパイロットー

「『カイエル四衛将』の一角・『青龍』の称号を受け継ぐ、GHの「喪われた名家」の一つ・ヤン（楊）家の嫡男にして、『木星の青龍』の異名で畏れられている異名持ちー

「ステイブ・ヤン」が、腕を組みながら姿を現した。

ステイブ：「へえ、それで、旦那の連れもわやかな事に、大分苦戦しとるようで？ 出撃要請のメール、確認させてもらおたよ。「わしにも出て欲しい」ゆうてのお。メールにやあ、『MS戦に慣れとらん「こーへえーげなしごんぼう共」の癖して、何かおかしい上に……守りの壁が薄いのに、手厚いような「錯覚」を感じて、迂闊に手も足も出せんとおに、手こずつとる状況」だとか？

それに……『「煉獄帰りの軍神」に、「今まで観たことも聞いた事もないいなげな兵器を使う、赤い鳥に変形するMSがいる」との文面があつたようだのお。冗談じゃろ、これ？ 今まで、ゆい訳した事もないアミダも、流石にお手上げ、となるワケだ……そりゃあそれで良しとして、アジーたちやあどうなつとる？」

矢継ぎ早に名瀬に質問するステイブ。

名瀬：「アジーたちは、ガキ共の艦落としに向かつてますよ。ちようどラフタがプレッシャーかけに行つてるようで……」

ステイブ：「成程、そうゆうことのお。それで、ステイシーとシア

ンビーは大丈夫なんか？自分の力で帰還出来るんか？」

名瀬：「それが……立ち直れずにいる状態なんですよ。なので先生、出撃ついでに回収、お願いしますよ」

目配せして、ステイブにお願いする名瀬。

ステイブ：「まったく……ぐうの音も出んわ……しゃあない、行つて来るとしよおで。ビルト、出撃メンバーはわしが決める！そうじゃのお……アスカとサラの二人に声かけちゃってくれんか？あの二人なら、アジীরケアに最適じゃけえね！わしゃあ……」「拾い物のMS」で、あのしごんぼう共を、ぶちまわしたるわ！」

名瀬：「頼みますよ、先生。アミダが塞がってる中で、頼りになるのは、先生しかいませんから……」

と、ステイブを椅子越しに手を振りつつ、見送る名瀬。

ステイブは、ブリッジを後にして、格納庫へと向かう。

ステイブ：「クツクツクツ、大人の怖さア、身をもつて教えちやるけえ、覚悟しときんさいやアツ！」

と、ヤバーイ笑みを浮かべながら呟き、足早にMSデッキへと向かった。

エーコ：「だーりん、先生の指示通り、アスカとサラに出撃するように、伝えましたあー」

ビルト：「先生が言うのであればと、喜んでましたよー」

名瀬：「良いんだ、これで……（ヤン先生、何を考えているのか、さっぱり分からん気がするし……それにしてもあのガキ共も、ビルトが言つてたように、ホントしぶといなあ……）」

戦況を注視しつつ、艦長席で思考を巡らせた。

そして、MSデッキでは……

タービンズ整備クルー：『先生のシュヴァルベ・グレイズ、間に合いませんでした。調整に調整を重ねないとムリなようで……』

ステイブ：「気に止む必要はないよ。げによう頑張ってくれた。そりゃあそれでええから、とにかく、整備はこのまんま続けてほしいんじゃ。今の段階で、出撃可能な機体は、この拾い物しかありやあせんけえのお。かなりピーキーな機体だし……頭に埋め込まれた「コ

イツ」を頼りにして、この戦況、覆しちやろうかア!」

射出カタパルトへと移動する「機体」。

ハッチ展開、射出タイミングが移譲された。

ステイブ：「ほいじゃあ、行くとしようか。ステイブ・ヤン、「ウイングガンダム」行くよ！覚悟しんさいや……しごんぼう共が!!」

ハンマーヘッドからウイングガンダム（以降W）が飛び去ってから数刻後、アスカとサラが操る青い百鍊が、後を追うように出撃した。

（イメージBGM：新機動戦記ガンダムW OSTより「黒い風が死へ誘う」）

ステイブ：「分かつとるね、二人とも。ラフタとアジのフォローをかけつつ、こーへえーげなしごんぼう共に、やいとを据えるだけじゃ！向こうはまだ「戦いの作法」を知らん素人じゃ。日頃の成果、見せ付けちやろうか!」

アスカ：『了解、先生!』

サラ：『その前に、ステイシーとシアンビーの回収、忘れてませんかあ?（…ω…）?』

ステイブ：「あー、そうじやったそうじやったんじや。双子の回収が先じやったね、忘れとったよ……恐らく無事じゃけえ、丁寧に対応しときんさい。心バッキバキにへし折られとる状態だと、何かの拍子で、フラツシユバック引き起こして、手が付けらりやあせん状況になるからの。すぐメデイカルチェックを受けた後、カウンセリングを受けるよう手配してくれんか?」

アスカ：『分かりました、先生。だーりんに伝えておきます。サラ、行くよ!』

サラ：『あいよつ、アスカちゃん!』

二機の百鍊が、青い放物線を描きながら、双子の回収へと先行していった。ーーー

時間軸を戻し、戦闘宙域。

（イメージBGM：「真・三國無双4」より「合肥―GREAT RE D SPIRIT―」）

エルヴィン：「まさか、テイワズが「駒」を持っていたとでも?（そ

れにしても「あの女狐」の媚びに毒された空気すら微塵にも感じなかったのに、何故？」

コクピット上、焦るエルヴィン。

エドワーズ：『ダニエル、大丈夫か？』

エルヴィン：「何でもない」

エドワーズ：『「蛇姫」は、俺がココで食い止める。三日月君と昭弘君のフォローを頼む！』

エルヴィン：『言われるまでもない、任せろ！』エルピス、捕捉出来ているか？」

エルピス：「既に捕捉済みです」

タービンスの猛攻を防ぐ為に、各々が修羅に入ろうとしていた。

Chapter 7：イサリビ防衛：煽り煽られ振り回されて・・・その頃イサリビは、タービンスのMS・百里の銃撃の雨の真っ只中にいた。

百里からの射撃を撃ち落とし、単機で孤軍奮闘するMW。

脆弱ながらも、防戦必死の状態だ。

対する百里は、ヒットアンドアウェイの離脱戦法を取りながら、隙を伺っている。

ユージン：「アレンさんとダンジ二人つきりに任せつきりじゃ、どのみち持たねえぞ！」

チャド：「相手のMSが、やけに速すぎて捉えきれない！」

イサリビ周辺を飛び回る百里。

ラフタ：「“エビ”だけに、かっつたいなあゝ・・・（ダンッツ!!）ヒヤッ!? いっつたいなあ、もー（ピーピーピー）何なの、あの「赤い鳥」？」

苦戦するラフタ。その直後に、何が被弾。赤い鳥のようなMSに背後を取られた。

その戦況を注視していたステイブが、ラフタにこう言った。

ステイブ：『“エビ”だけにかっつたいなあゝ”って、ぼんすーか、ワレえ！ しっかり狙えてるんかよ、ラフタ：・・・と云うか何じゃ、あの赤い鳥は？（ひよっとして、噂の「厄祭戦」を終わらせた

伝説のアレなんか？「固有周波数」は、一致しとるんに……「喪われたMS（ロスト）」か、それとも……」』

赤い鳥のようなMS：エルヴィンのゼロ炎が、全速力で反転、イサリビ防衛の為に戻って来た。

更にMS形態に変形、ツインバスターライフルを右手に携え射撃、砲撃の雨をひらりと避けながら距離を詰める。

ステイーブ：「ほお……危ない危ない。あの赤い鳥、人の形に「変形」するんじゃない？びつくりしたなあ……」  
「……って、ここで驚く「ワケ」ないじゃろうが、ワレえ！わしのこの機体も、あんたが乗つとる機体と同じように……」  
「変形」出来るんよ。さて、教え子にカッコええトコ見せて、生意気なしごんぼう共に……やいとお据えたるわ！」  
そう話すとグリップを操作、人型の姿：MS形態へと変形を始めた。  
右手にバスターライフルを携え、ゼロ炎に向かって砲撃開始、更に距離を詰める。

エルピス：「御主人様。ウイングガンダム、接近してきます！」

エルヴィン：「撃ち合いだけでは埒があかない！接近戦で迎え撃つ！」

エルピス：「了解、装備を「ハイパーカレドヴルッフ」に切り換え……」

ステイーブ：『胴体から空きなんでええ！隙ありイイツツ！』

バスターライフルを即座に「格納」し、シールド下部からグリップを取り出しビームサーベルを抜刀、ゼロ炎に斬りかかる。絶体絶命のピンチ。次の瞬間！

ダアンツツ！

Wのビームサーベルの勢いを相殺するかのように、後方から、ガンダム・バルバトスの滑腔砲が炸裂。どうやら間に合ったようだ。

三日月：「俺たちの艦（ふね）に勝手に手を出すなよ！」

昭弘：「教官に任されたんだ！ここで止まる訳には、行かねえんだアアツ!!」

バルバトス・グレイズ改の両機がイサリビに間に合った。

奇襲を仕掛けるタービンズ勢に反撃を仕掛ける。

ステイーブ：「ここで真打ち登場？あの機体が、ウワサのASW――」

G-08「ガンダム・バルバトス」：「厄祭戦」を終わらせた72機のガンダム・フレイムの1機、か。更に、ありやあ……色がちぐはぐで妙ちくりんなグレイズか？「急いで間に合わせましたよ」感バレバレだって。マトモな調整もしとらん上に、あたかも初心者丸出しの後方支援（バックアップ）……げに、腐りきった火星支部を出し抜いた上に、更に名家の嫡男と一戦交えた、ゆうて聞いたがなあ……

まあ、それがあなこたあどうでもええとして……

ラフタは目の前の角を生やしとるヤツを、アジーは、色がちぐはぐなグレイズを懲らしめちゃってくれんか？わしやあ赤い鳥のヤツと戯れてくるよ。徹底的にしごいちゃりな！」

ラフタ：『はいはい♪』

アジー：『ラジャー』

バルバトスには百里（ラフタ）を、グレイズ改には青の百鍊（アジー）を、それぞれ充てるよう指示を飛ばしたステイーブ。戦線は分散し、「青龍」の独壇場となった。

ステイーブ：「これで主戦力と敵本陣との分断に成功、

つと。次は、孤軍奮闘しとるMWを楽にしちやろうかと……

（ダアアンー）ガフウツツ！何しよーるん？」

前方のモニターを注視。どうやらMWからの流れ弾を喰らったようだ。

そのMW では……

ダンジ：「アレンさん！当たったみたいですよ！」

アレン：「敵の注意を向ける事は出来たが……頼みの綱である主力が分散され、ピンチである事に代わりはない」

MW 砲手席のモニターを注視しながら、ダンジに状況を伝えるアレン。弾薬が底を尽きるまで後少し、補給で一旦下がらないとマズイ状況だ。

ダンジ：「このままだと、僕たち犬死にですよ、アレンさんどうしますかあ？」

単機だけでイサリビを護りきったのは良いが、MS数機がよって集って潰しにかかる、と云う事態に。エドワーズに託された任務を全



うしようかとした矢先の事であった。

ブリッジから通信が入った。

ユージン：『ダンジにアレンのオッサン、一旦下がってくれ。ここから討って出る。後は俺たちに任せろ！』

アレンが冷静に返す。

アレン：「討って出る」…… 君たちは正気か？ 敵艦に「特攻する」とでも言うのか？ 無茶な事を云うんじゃない？」

ユージン：『前線に出てる三日月や教官たちだけに、イイカツコされてたまるかよ！ 俺たちなりの…… 「宇宙ネズミ」なりのやり方で、アイツらに見せ付けてやりてえんだ。俺たち鉄華団の…… 「筋」と云うヤツを』

少し黙るアレン。彼はふと思い返した。かつてGHにいた時、アインとロッカーで語ったあの日の事を……

……CGS夜襲後にまで遡る。

コーラル：『何、「失敗した」だど!? どういう事が説明して貰おうか、ゼント二尉！』

モニター越しのコーラルが、克蘭ク（アレン）を詰める。

克蘭ク：『指揮官であるオーリス・ステンジャが死亡、三割の兵とグレイズ1機を失い、やむを得ず撤退を余儀なく……』

コーラル：『ふざけるなッ！（机を叩く）「独立運動の旗頭であるクーデリアが」戦死」を遂げ、火星は「今以上」の混乱に陥り、地球への憎しみを強くする……そういうシナリオ（手筈）だったのに…… 貴様も知っていいようが、後日本部から監査局が、視察に見えられるんだぞ？ 分かって言ってるのだろうな？ それで…… 誰にオーリスがやられたと云うんだ？』

躊躇いながら言葉を返す。

克蘭ク：「相手は…… 子供でした…… 二十歳にも満たぬ…… 子供でした……」

コーラル：『「子供」？ 雁首揃えてガキ共に…… してやられたと？』  
克蘭ク：『実際に感じて思った事だが…… 子供を、否！ 少年兵を

相手に戦争など出来ません！彼らが自らの意思で戦っているとは思えない！GHの「清廉潔白たる正義」の御旗のもとに集いし護り手が、なぜこのような事を…」

コーラル：『甘い事を抜かすな、ゼント二尉！相手が子供だろうと関係ない！事が明るみにならぬよう、一人残らず駆除しろ、いいな！これは命令だ！絶対に失敗は許されんぞ!!』

ブツンツ！と、一方的に通信が切れた。

拳を握り、歯ぎしりをしながら、やり場のない怒りを堪えるクラック。一路、ロッカーへと向かう。

ロッカールームに入ったクラック。アイン・ダルトンが座っていた。

クラック：「アイン、お前にこれを預ける」

アインに向かって投げ渡した物―GHの紋章：角笛に月桂樹をあしらったバッジだ。

アイン：「クラックさん？どうしましたか？コーラル司令に詰められたようで…」

クラック：「アイン、お前も先の作戦で痛いほど感じたろう……我々の知らない所で、年端も行かぬ子供達が、武器を手に取り戦っている現状を……」

アイン：「ええ……私も感じました。ですが、あいつらはオーリス隊長を手にした、それに我が隊のMWまで……許す訳にはいきません！」

クラック：「無論、そうだな……「本来なら」な。しかし蓋を開ければ、相手は「子供だった」と言う事実。罪の無い子供を相手になど、辛いものがある。アインのように、これからのGHを担うお前達に、「兵士としての汚名」を着せたくはないのだ」

アイン：「しかし！」

アインの肩に手を置くクラック。まるでアインを諭すかのよう……に……

クラック：「戦いたくはない」それが俺の本心だ……だが、戦わ

ずには済まされないのなら……それがGHが長年提唱してきた……  
「清廉潔白たる正義」の正道に反しているか否か……今一度、己自身  
に問うといい……」

アイン：「クランクさん!!」

アインの静止の声も届かず、クランクは独り、MS格納庫へと向かい、「決闘」へと赴いた――

時を戻し、イサリビ甲板上では。

ダンジ：「アレンさん？一旦退きますよ」

ダンジが声をかける。

アレン：「ああ、スマン。昔の事を思い出していた……艦に下がる  
う」

そう云うと、二人を乗せたMWが撤退した。

ステイブ：「へえ、降参かのお？それにしても何かおかしゅうない  
か？（まるで勝利を確信したかんような退き口。何を考えとるん  
じゃ、あんなあらあ？）」

エルヴィン：『前線で物見とは……戦上手にも程があるとは  
な……』

（イメージBGM：「真・三國無双4」より「合肥―GREAT RE  
D SPIRIT―」

敵MS：ゼロ炎のバルカン掃射にたじろぐW。

ステイブ：「ぐっ……寝首を掛かれる所じやったよ……戦い  
慣れしとるようじゃのお、ちいと手合わせしようか、のオツ！」

ビームサーベルとシールドを携え、ゼロ炎に躍りかかるW。

バチバチバチバチと、蛍光グリーンの光の刀身がそれぞれ交わり、  
スパークしている。

鏑迫り合いだ。力は互角。互いの意地が刃に乗り、一步も譲れない  
状況だ。

エルヴィン：「中々”出来る”ようだな。修羅場慣れしているよう  
だが？」

ステイブ：「そうゆうワレも、案外骨のある、かなりええ線行つと  
るようじゃのお。刃にのしかかって来る「重さ」が、いっつも稽古つ

けとるのと違うようじゃがアアッ、押し負けてしもおた!」

ゼロ炎が競り勝ち、のけ反るW。ビームサーベルをシールドに納刀し、バスターライフルを「召喚」し、体勢を立て直す。

ステイブ：「それじゃったら……これでどうだ!」

バスターライフルを放つ。その雨の中を縫うように回避しつつ、Wの懐に接近する。

エルヴィン：「エルピス、回避出来るか?」

エルピス：「回避可能、相対速度維持で回避します」

そして……

ガアアン!!

ステイブ：『相対速度を落とさず、鮮やかに回避。同時に背後を取ってトドメの間違い、か……流石のわしでも恐怖を覚えたよ……あんたア……アミダより、ぶち強そうじゃけえの。「勝ち」は、ほうじゃのお……ワレに譲っちゃるよ。逆鱗に触れのおて……えかったのオ』

エルヴィン：「見応えのある戦ぶりだった……「使いこなせて」いたようだな……敵ながら見事、称賛に値するな……」

ステイブ：『「称賛に値する」か……大袈裟な事言いよる。わしの事を誉めとるんか、それとも、貶（けな）しとるんか……ハツキリ言いんさいや、濁すようにゆわれると、どんように解釈すりやあええんか、わしやあどうも分からのおて……』

翼を持つMS同士の対決は、不死鳥の心臓（フェニクスのリアクター）を宿したゼロ炎に軍配が上がった。

Chapter 8：イサリビ防衛：劣勢濃厚、そして……  
Wとゼロ炎の両機の戦闘が始まるのと同時に、戦線は分断。イサリビ劣勢の空気の中、昭弘・アルトランドが駆るグレイズ改は、単機で青い百鍊と対峙していた。

昭弘：「ぐぬう……この状況、どう切り抜けりゃあ……」

アサルトカノンの銃撃を耐え凌ぎつつ、反撃のチャンスを伺う昭弘

のグレイズ改。

ナノラミネート装甲材を外装甲としているMSとは云えども、執拗なまでの銃撃に晒され続けている上、何れ「傷口」が出来る。銃弾の雨など、ただのかすり傷同然だ。

昭弘：「そこだツツ！」バシユウウン!!

アジー：「ぐううつつ！」

グレイズ改が放った一撃が、百鍊のアサルトカノンに命中、その場で爆発四散した。

アジー：『やってくれる... なら、これならどうだい!?』

すかさず片刃式ブレードを抜き、躍りかかる。

昭弘：「抜かれて、たあまあるウかアアツ！」

躍りかかる百鍊に対して、ライフルで応戦するグレイズ改。

次の瞬間！

ガキイイツ!!

昭弘：「ごがあアアアツ！」

強烈な前後からの不意打ちとスタン状態に陥る昭弘。どうやら、「青龍」があらかじめ増援として出撃させた、アスカとサラが間に合い、電磁ナックルで挟撃。グレイズを黙らせた。

アスカ：『アジー姉さん、遅くなりました』

サラ：『良ければこれ、使って下さい』

サラから、アサルトカノンを渡されるアジー。これで挽回出来るような気がしてならない。

アジー：「まさかヤン先生、このような展開になることも、お見通しだったのか？」ありがたい、一気に盛り返すよ！」

アスカ：『了解!』

サラ：『遅れた分、きっちり返しますよ!』

グレイズ改に、鮮やかなサマーソルトキックをかまし、体勢を立て直すサラの百鍊に対し、アスカの百鍊は、ナックルガードを納めてアサルトカノンをグレイズ改の右手に向かって照射、マシンガンを弾き飛ばした。

昭弘：「グッ、マシンガンがツツ!ならこれでええツ!」

左腰に帯刀しているバトルアックスを抜く。

昭弘：「教官に任されたんだ。退く訳には、行かねえんだよオオ！」

勢いのまま、突撃を開始！

サラ：「ふーん、「力任せの単機突撃」……なんか暑苦しいんじゃないの、アスカちゃん？」

アスカ：『そうね、ぶきつちよなんじゃないの？あの「ちぐはグレイズ」のパイロットさん』

アジー：「相手は、バトルアックスを抜いて来たようだ……近接戦で追い込むよ。アスカ、サラ、「プランC」で行くよ!!」

アスカ：『了解ッッ！』

サラ：『「予習通り」ってヤツね。アジー姉さん、サクツと済ませましょ！』

各機、グレイズ改に踊りかかる。

昭弘：「グウウウウッ……（捌ききれるか、この状況よお……）」  
「木星の青龍」の薫陶を受けただけの事はある為、対応はスムーズに行けたようだ。

2機の僚機で敵を追い込みつつ挟撃し、メインの機体でトドメを差す。

MS の機動性を充分に活かした戦法：プランCだ。  
時同じく、バルバトスと百里との戦況は？

三日月：「くっ……コイツ、足が速すぎる。捉えきれない」

狙いを定めて滑腔砲を放つても、上手く回避しつつ反撃の隙を伺う百里。

三日月：「んぐうッッ!!」

百里のライフル被弾。

ラフタ：「ビィインゴ〜♪」

バルバトスを翻弄し続ける百里。それに食らいつくバルバトス。  
一進一退の攻防が続く。鬼ごっこのような展開となる。

三日月：「くっそッッ！速い！」

ラフタ：「推進力が違うっての！」

態勢を立て直すバルバトス。百里から見れば、格好の的だ。

ラフタ：「遅い遅い遅い!!」

旋回しながらのライフル連続掃射。バルバトスが受けるダメージは、ひとたまりもないだろう。

華奢な体躯に相反する大型のバックパック、それに積んであるのは3基の大型ブースターと両足のブースターの計5基で実現出来た高推力を生かした一撃離脱の高機動性。

シュヴァルベ・グレイズより扱いが難しいピーキーなMSを、いとも簡単に操るラフタ・フランクランドの技術は、侮れないだろう。

三日月：「んぐうツツ!今のでスラストが……それにしても、このままじゃ埒が明かない」

三日月も昭弘と同様、苦戦を強いられていた……

一方イサリビでは、「次の作戦」の準備に取りかかっていた。

シノ：「よう、ヤマギ!」

ヤマギ：「あっ……(シノ……)」

シノ：「準備はどうだ?」

ヤマギ：「今終わったとこだよ」

シノ：「そっか……いつもわりいな!」

互いに見つめあい、暫く沈黙が続いた。

シノ：「ん? (何か言いたげだぞ、どうした?) へっへへ! 遠慮なんかすんじゃねえよ! ほら、よっと!」

整備クルーのヤマギ・ギルマトンに手を伸ばすノルバ・シノ。茫然とした表情のヤマギを引き上げ、同時にMWに乗り込むシノ。そんな中、雪之丞の櫓が飛ぶ。

雪之丞：「整備班! 手エ空いたのからとつとと上がれエ! すぐにエアロック閉じるぞお!!」

シノ：「お前ら、準備はいいよな?」

共に行く団員を鼓舞した。準備は出来た。

シノ：「ブリッジ! こっちは準備出来たぞ!!」

ブリッジでは、ビスケットとユージンが待機していた。

ビスケット：「ユージン!」

ユージン：「ああ、わかってんよ！」

そう言うどジャケツトを脱ぎ、コンソールを操作し、「あるモノ」を現出させた。何かのコネクターのようだ。

現出させたコネクター：「すなわち、イサリビと「阿頼耶識」で繋いでMWと同じように操船する為のコネクターである。」

鉄華団はタービンスに、ひいては、かつての社長：マルバに一矢報いる為の策に討って出ようとしているのだった。

ユージンの脳裏に、開戦前のやり取りが過った。

(イメージED : Wings / 山本彩)

ーオルガ：「あんたの要求がどうだろうと、俺たちにも通さなきやいけねえ筋がある」

名瀬：「ああ：俺たちと「戦う（やり合う）」って意味で良いんだよな？」

オルガ：「ああ：俺たちが「ただのガキじゃねえ」って事を教えてやるよ。マルバ！てめえにもな」

マルバ：「はあ？」――

イサリビと「繋がる」前、モニターを見ながら、ユージンはこう呟いた。

オルガ・ユージン：「死んでいった仲間のケジメ、キツチりつけさせて貰うぞ!!」

To be continue the next LOG……